

# 御伽草子

## 目次

天稚彦物語	1
伊香物語	3
音なし草紙	5
かざしの姫君	8
こほろぎ草子	10
大仏供養物語	12
玉水物語	16
玉虫の草紙	21
依藤太物語	24
付喪神	32
鳥部山物語	35
鳴門中将物語	40
化物草紙	42
花みつ	43
美人くらべ	46
福富草子	54
ふくろふ	56
富士の人穴草子	59
辨の草紙	65
松帆浦物語	68

## 天稚彦物語

昔、長者の家の前に、をんな、物洗ひてありけり。大きなくちなは出でていふ様、「我がいはむこと聞きてんや、聞かぬものならば、おしまきてむ。」といへば、女、「何事にかはべらむ、身にたへむ程の事は、いかでか聞き侍らでは。」といへば、くちなは口より文を吐き出して、「此のうちの長者にこの文をとらせよ。」といふ。持ちて去ぬ。やがてあけて見るに、「三人の女、たへとらせずば、たゝをも母をも、とり殺してむ、そのまうけの屋には、そこくの池の前に釣殿をして、十七間の家を作りたるに、わが身はそれにはゝかるぞ。」といひたり。これをてゝ母見て、泣く事かぎりなし。

大女を呼びていへば、「あな思ひかけず死ぬる色なりとも、さる事はしきふらはし。」といふ。中女にいへば、それもあなじ事にいふ。下の女は一のかなし子にてありければ、泣く泣く呼びていへば、「父母とらせむよりは、われこそ如何にもならぬ。」と云ふ。あはれさかぎりなくて、泣くくいだしたつ。くちなはのいひたりし池の前に、家を作りて、いてあぬ。唯一人すゑて、人々かへりぬ。亥の時許りなるらむと思ふ程に、風さと吹きて、雨はしはしと降り、神鳴、稲妻、ひらくとして、おき中より浪いと高く立つ様に見ゆれば、姫君、生きたる死にたるかと思ひて、恐ろしさせむ方なく、あるかなきかにて居たるに、十七間にはゝかる程のくちなは来て、云ふ様、「我を恐ろしと思ふ事なかれ、もし刀や持ちたる、我が頭斬れ。」といへば、恐ろしさ悲しけれども、つめきり刀にてやすく斬れぬ。

直衣著たる男の、まことに美しき走り出でて、かはをばかいまとひて、こからびつに入りて二人臥しぬ。恐ろしさも忘れて、語らひ臥しぬ。かく相思ひて住む程に、よろづの物多くてありける所なりければ、取出してなき物なく、楽しきことかぎりなし。すんさけんそくおほくある程に、この男いふ様、「我はまことには、海龍王にてありしが、又、空にも通ふ事のあり、この程に行くべき事あれば、あすあさてばかり、空へ登りなむするぞ。七日過ぎてかへらむするぞ。それ心ならず、かへらぬ事あらば、二七日を待て、それになほ、おそくば、三七日を待て、それにこすはながく来まじきと思ふ。」と云へば、「さらば如何せむする。」と云へば、男云ふ様、「西の京に女あり、一夜杓といふ物持

ちたり、それに物をとらせて登れ、それも大事にて、登りえむ事かたからむもし登りたらは道に逢はむものに、天稚彦のおはする所は何処ぞと、問うて来よ。」と云ふ。「この物入れたるからびつをば、あなかしこ、如何なりとも開くな、これだにあげたらば、更にかへり来ましきぞ。」とて、空へ登りぬ。

さて、姉女ども、此の家に来て、目出度き事を見むとて来てあひたり。「かく楽しんでおはしましけるに、我等果報の悪くして、恐ろしくも思ひけるぞ。」など云ひつゝ、よろづの物どもあけつゝ見るに、此なあけそと云ひしからびつを、「あけよ、見む。」と云ひあひたるに、「その鍵知らず。」と云へば、「かまへて鍵とり出でよ、など隠すぞ。」と姉共こそくりけるに、鍵を袴の腰に結びつたりけるが、木丁にあたりて音のしければ、「なとくわ有けるは。」と云ひて、そのからびつを、さうなくあけてけり。物は無くて、煙、空へ登りぬ。かくて妹どもかへりぬ。三七日待てども見えざりければ、云ひしまゝに、西の京に行て、女にあひて、ものどもとらせて、一夜ひさしに乗りて、空に登らむと思ふに、ゆくへなく聞きなしたまひて、親達の嘆き給はむ事を思ふに、いと悲しく、今は故郷見るまじきぞかしと、顧みのみせられて、

あふ事もいさしら雲の中空に漂ひぬべき身を如何にせむ

空に登りて行く程に、白き狩衣著て、みめよき男のあひたるに、「天稚彦のおはします所は何処ぞ。」と問へば、「我は知らず、これよりのちに逢ひたらむ人に問へ。」と云ひて行くに、「われは誰ぞ。」と云へば、「ゆふづ。」と云ふ。又、帚持ちたる人、出で来たれば、先のように問ふに、「我は知らず、此の後逢はむ人に問へ、我は帚星となむ申す。」と云ひて過ぎぬ。又あまた人逢ひたり。又先の様に問へば、これも先の様に云ひて、「我はすばる星。」とて過ぎぬ。かくのみあらば、尋ねあひきこえむ事もいかゞと思ふに、中空なる心地、いみじく心細し。さてしもあるべきならねば、猶行く程に、目出度き玉の輿に乗りたる人に逢ひたり。又これもおなじ事に問へば、「これより奥に行かむ程に、瑠璃の地に玉の屋あり、それに行きて、天稚彦に物申さむ。」と教へ給へば、そのまゝに行きて尋ぬ。天稚彦に尋ねあひたてまつりぬ。上の空に迷ひいでつる心の中など語り給ふに、いと哀れにて、日頃のいぶせきわりなかりけるに、契りきこえしまゝに、尋ね給はむと待ち聞えて、なぐさみ侍りけるに、おなじ心

に思しけるこそあはれなれと、さまゝに契り語らひ給ふも、げに浅からざりける御契りなむめり。

さても心苦しき事のあるべきことは、如何し侍るべき。父にて侍らむは、鬼にて侍る。かくておはすると聞きては、いかゞしきこえむとわびしきと云ふに、いと浅ましけれど、よしや様々、心尽しなりける身の、契りなれば、それもさるべきにこそ、こゝを憂しとて、又立帰るべきならねば、あるにまかせてとおぼしけり。かくて日敷経るほどに、此の親来たり。女をば脇息になして打ちかゝりぬ。まことに眼もあてられぬ気色なり。娑婆の人香こそすれ、暫くさやとてたちぬ。その後も度々来りけれども、扇、枕などにしなすつゝ、まぎらはしてありふるに、さや心得たりけむ、足音もせず、みそかにふと来たり。ひるねをしたりければ、身隠さで、みえぬ。是は誰ぞと云ふに、いまは隠すべき様ならねば、有りのまゝに云ふ。「さては我が嫁にこそ、つかふものも侍らぬに、たまはりてつかはむ。」と云ふに、「さればこそいと悲し。惜しむべきならねば遣りぬ。ぐして行て云ふ様、「野に飼ふ牛数千あり、それを朝夕に飼へ、昼は野へ出し、夜は牛屋へ入れよ。」と云ふ。天稚彦に、「之をば如何すべき。」と云ひあはすれば、我が袖をときて取らせて、「天稚彦の袖々。」と云ひて振れと教へければ、そのまゝに振りければ、つとめては野へ出で、夕さは牛屋へ入る。千頭の牛なびきたり。かくこそ神通なれと鬼云ひけり。「我が倉に在る米千穀、只今のほどに、こゝ倉に運び渡せ、一粒も落すな。」と云ふ程に、又袖を振りて、袖々と云へば、蟻いくらもく出で来て一時に運びぬ。鬼これを見て、算を置きて、一粒足らずとて悪しげなる気色にて、「確かに求め出せ。」と云ふ。顔を見るに、今はかくと見えて、恐ろしさ云ふ許なし。「尋ねてこそ見侍らぬ。」とて求むる程に、腰の折れたる蟻のえ運ばであるを見つけて、嬉しくて持ちて行きぬ。又、「百足虫の倉にこめよ。」と云ひて、はたいたに、くるがねをしてあり。百足虫と云へば、つねにもあらず、一尺余りばかりなるが、四五千許り集ひて、口をあきて喰はむとするに、目もくるゝ心地しながら、又此の袖を振りて、「天稚彦の袖々。」と云へば、隅へ集ひて、側へも寄らず、七日過ぎてあけて見れば、事なくてあり。又蛇の城にこめぬ。それも先のまゝにしたれば、くちなはひとつも寄り来ず。又七日過ぎて見れば、たゞおなじやうにて生きたり。しあつかひかねむ、しかるべきにこそあるらめ、もとの様に住み

あはむことは、月に一度ぞと云ひけるを、女房悪しく聞きて、「年に一度と仰せらるゝかと云へば、さらば年に一度ぞ。」とて、菰もちて、なげ打ちに打ちたりけるが、天の川となりて、七夕彦星とて年に一度、七月七日に逢ふなり。

## 伊香物語

いづれの御門のおほん時にや、近江の国伊香郡の司なる人に、いみじうゆたけき者ありけり。其の妻かたち世に並びなきのみならず、心優しく情ありて、花紅葉に心を寄せ、四季折々のながめに大和歌を口ずさみ、糸竹をもてあそび、手などをかしく書きて、績み縫ふ業までおろかならず、そのわたりの人思ひかけざるはなけれど、心正しく貞婦の道を守り、五つの徳を修めて、いさゝかざれたる由もなければ、皆人類なき事に言ひわたりけり。其の国の守変る事に伝へ聞きて、いかにもして此の女を得まほしく思ひて、いはでの森のいはでやとは、真間の継橋ふみ通はぬ事もなければ、善きにもあしきにも重ねそめにし未ならず、又異人にまみえず、手にだに触れぬ玉章のくちやみぬる事となりぬ。このたびの国守もみぬめの浦の思ひ深く、波の立居に心をめぐらし、言にいでては叶ふべきやうにも有らざりければ、いかにもして此の女を取りてむと、一つの謀をぞ工みける。まづ国守の御館に宣はす事ありと、人をして召し寄せける。郡司の夫何事の仰せにやと、急ぎまゐりければ、しかぐの由申して奥に召し入れけるに、常に参るより事敵かにいとをしくもあひしらはず、心も空なるに国守出で合ひていふやう、「此の国の内に人多かれども、物すべ知りたらむ人とは汝をこそと思ひ侍る、然れば何事につけても心裏なく昔今の事ども問ひ聞かむ料に呼びいでぬる。」とて、珍らかなる果物を初め、酒肴もてなして、いかめしければ、夫よろこびよと飲みつ、昔今の事心ゆくかぎり打語りて、国の中の面目身に余りてなど酔ひ泣きしてめで惑ふ。かく打解けたる時国の寺曰く、「何事につけてもわが言ひいでむ事承り届けつべきや。」と。男の曰く、「こは仰せとも覚えぬ事かな、時の御門の命をつけて此の国にあるとある事どもを、心に任せて計らひ給へとの事なり、しからは守の宣ふ事を否み申さば、御門の旨に忤ふことわりなれば、国法を背きて何れの所にか足をとゞめむ、何事

にても申させ給へ。」といふ。「然らば汝と我いに争ひせむ、必ず我を憚らず計らふべし、汝勝ちたらば我が国の所領以下を半分ちてしらしむべし。其の上は心の儘に計らへ、われ勝ちたらむにおいては善きも悪しきも知らぬ、汝が妻を我に得さすべし」とて、文机にある沃懸地の硯とりよせ、何やらむ書き認めて上に封じて、梨地に松の群立ちて、千鳥の騒ぐ方に捨小舟の蒔絵かきたる文管に入れ、上にも封つけ印押して差出し、「これをいと開くべからず、此の内には和歌の本なん書きてあるぞ、此の末を同じ心に詠み合はせよ、汝が家にもて帰り開かずして、これに添へ七日といふにもて参るべし、和歌の上下付合ひたらば、速かに此の国をわけてしらしむべし、都方の事は我に任すべし、もし歌の心ことに様あしくば、汝が妻を進らすべし。」と言へば、夫ふと胸打騒ぎ、心の内に、いかで我、神にもあらぬ身の草深き鄙の土に生ひたちて、早苗とり初打つ歌ならでは言ひいでむ言の葉もなし、たとひあらはに見聞くとも何程の事がいふべき、まして堅く封じて見せも聞かせもするにこそ、よしなき酔ひの上に心よく口かためて、年月馴れたる一日片時もえさらぬ中の蘆垣を、人のために押隔つべきかと思ひて、「我ら賤しき心にて和歌の文字の数をだに知らず、何しに君に勝つことあらむ。」と、とかく言ひてすまひけれども、「さればとよ、とくより言ひ定めしものを、上を軽しむるにや。」など、むつかしげに言ひて、駟も舌に及ばず。むくつけき顔の鬚さへあれば、見あぐるも恐ろしくて、我にもあらぬ心地して泣く／＼家路に帰りぬ。

女房はかくとも知らず、常にもあらず国守に召されて、程過ぐるまで遅き事よと心もとなくて、更けゆく夜半も春なれば、さなきだに霞める月に浮雲の、かゝる限さへ怨めしく慰むかたのなきまゝに、枕に近き琴を掻き鳴らし調ぶるからに、中の緒のたへがたきすすみも由なしと置きて、

春の夜のならひに霞む月影もいと涙に曇りはてぬる

あなつたてやと衣うちきて臥しぬ。むかひの寺の鐘の音も夜半過ぐる頃、男は帰りに寢屋の外にたゞずみて、言もいはず片手には蒔絵の文管をもち、片手には面にさし当て、さめざめと泣く。女房は呆れはてて、こは何事ぞやと胸うち騒ぎしが、もて鎮めたるけはひにて、「やゝ言ふ事あらば申し給はで、只泣きに泣き給ふは、啼沢女の神にやおそはれ給ふらむ、怪しきに疾く語り給へ。」

といへば、男は知らぬこととて、「何をか言ふ、此の年月そこをば片時去らず  
馴れむつれて、憂きも喜びもうらなく語り慰み、あはれと思ふ節々も月にそひ  
てまさり草、まさる思ひのうらがれて、見もし見られむ事も、今五六日と思ふ  
が悲しければ、泣かるゝなり。」といふ言葉のあやも続かず、只妻の顔を守り  
つゝ、又雨雲と泣く。女房は思ひよらぬ事なれば興さめて、「何の為にしかあら  
む、事の様聞きて後、とありかかりとわきても答へめ、疾く語り給へ。」といへ  
ば、泣くゝ国の守のもてなしより始めて、しかゝの由語れば、女房とば  
かりためらひて申す、「さはよく聞き給へ、かかる難題にあたり、国の守に命  
を召し取らるべきしぎに成るとも、それ猶前世の宿業なり、今更悔むべきにあ  
らず、さりとて免るべき難をそのまゝに過して、おろかなる名を取るべきや、  
つらゝ思ふに我が国の歌は、素盞鳴尊の八雲を始め、三十一文字の数はか  
ぞへて知るとも、六くさの深き道に尋ね入る事は更なり、まかして見ぬ本歌に  
叶ふべき末をつがむこと、敷島の道に名高き雲の上人にもあるべき道理かは、  
昔物語に又逢坂の関と書きしに、かち人の渡れど濡れぬと、鵜の底に続松の炭  
して書きつけしは、見たりし歌の上下にこそあれ、とにかくに国の守へ我を召  
捕らむ謀に陥り給ひしこそせむ方なくうたてけれ、かかる事を愚かなる人の心  
をもてめぐらすとも甲斐あるべき事は、仏菩薩こそ一切衆生を憐み渡れる心  
に誠を発して頼み申せば、宿業をも転じ給ふとなり、中にも大悲観世音は救世  
の誓ひ深くして、もろゝの苦を抜き樂を与へ給ふ、然れば遠く外に求むべ  
からず、此の国内にまします石山寺の観世音こそ殊に靈験いちじるし、誠に  
もて頼み給へ、もし宿因深く験なき時は、憂き事繁き此の国に住まぬばかり、  
われゝ諸共にいつちの山の奥、谷の隈にも影を隠し、身こそわびしき住ひ  
ならめ、朽ちぬ契りは心の中に変らじものを、諫むべき夫の諫められ給ふは  
余りにいふ甲斐なき迷ひまかな。」と、いと面なげに恥かしめられて、夫は  
やうゝに人心出で来て、暫く涙を押へける。「さらばその計らひに従ひて  
む。」とて、今日より家の内清まはりて、下人はしたに至るまで、精進うちし、  
石山の方に向ひ観世音を念じて、夜昼となく額つきぬ。さて三日といふ日に、  
男夜の程よりゆるして明けたつとも立ちいでて、世は安からぬ野洲川にす  
むとて人の渡りかね、曇るか影の鏡山、長き思ひの勢多の橋、かけし願ひを見  
ぬ歌のあふ事かたき石山寺、大悲の誓ひ過たず、験をあらはし給へ、救世のほ  
さち施無畏の徳を施し給はば、歌の本末を示し、恐ろしき国守の悪さげなる面

ばせを解き、われに半国をしらしめ、後の世は仏の国に生れ、ぼさちに逢ひ見  
奉るまで、朽ちぬ契りの妻諸共に、此の世後の世助けさせ給へと、涙を袖にし  
たてて念願し、其の夜は内陣に通夜しける。

此の頃の物思ひ、習はぬいも心の心づくしに、道の疲れさへ添ひて、前後  
の分ちもなく打臥して、更けゆく鐘の響、暁の鈴の音にも目を醒さず寝入り  
たりしが、ゆふつけ鳥の鳴くまでも仏の告げはなくて、あまつさへ国の守に  
襲はれ妻を奪ひとられ、我が身も痛く責まれて追ひ払はれつゝ、せむ方なさ  
にをうゝと、わが泣く声の我が耳に入りて夢は覚めぬ。こは何の験ぞや、  
身は汗雲になり、われかの気色に呆れ果てたり。かなたにはからからと鳴る  
花皿の音して、密闕伽奉る法師ばらの、をのこのねおびれたる顔を見て、笑  
ふが恥かしさに、やをら這ひいでて、怨めしきに物言ひもやらず、堂を下り  
て家に帰るに、参る人も多く、出づる人もある中に、怪しむ人は差寄りて、  
「何を歎く人ぞ。」と問ふに、「何をか歎かむ。」と答へつゝ、楼門にさしかゝる  
程、いと気高き上臈の面は白く光るやうにて、まみのあたり打ちけぶりたる  
が、紫苑色の衣に紫の綾ひき重ね、濃き袖白ききぬ被きて、市女笠著たるに  
供の女三たり四たり後に下りて歩みくる。かの夫を見て、「何を歎くぞ。」と  
問はせたるに、「はげしかれとは言はまほしけれど、何を歎かむ、伊香郡より  
参りたるに。」と答ふ。「猶思ふ事あらむに申さしめ給へ。」と、頻りに問ふに  
こそ、ふと心づきて、仏智不思議の方便は順逆の量り難く、三十三心の身は  
いづれにか託し給はざらむ、よしそれならずとも道の巷に行きかぶ袖の追風  
そよと身にしむも宿世の縁なり、ましてあはれと思へばこそ問はせもし給ふ  
らめと、「しかゝの事ありて歎く事を祈りしに、菩薩の誓ひにもれて、せ  
む方なさに帰るなり。」と語りければ、彼の上臈するゝと立寄りて、「それ  
ばかりの事はいと易かりけるものを、疾く語りざりける人かな。其の和歌の末は、

みるめもなきに人の恋しき

と言ひやるべし。」と言はすを聞くに、嬉しき事限りなし。「さるにても君  
はいづこにおはする御方、御名は何と申すぞ、承りてこそ重ねてよるこびも申  
さめ。」といへば、「武蔵野のゆかりの草も仮初の名なれば、いかでそれと打出  
でむ、折節は御堂の東のつまに住むぞ、能くこそ問ひける。」と打笑み給ふ顔

の光、衣のほひ移る許りに芳しくて、堂のかたへ歩み給ひしが、立隔たる朝霧に隠れて見失ひぬ。男はまさしく救世菩薩の我を助け給ふと、御堂の甍のかくるゝまでに顧みて、拝みく口にはかの歌を誦しつゝ帰りけり。家には女房心もとなさに湖の方を眺めやりて、南無観世音と唱へて、門に出でゐて待ち居けるが、夫の顔を見るより、「いかに駿や。」といへば、仏を頼みてしるしなく有らむや。」と、賢げにいらへて内に入りつゝ、しかくゝの事共を語れば、女房余りの嬉しさに声を打上げて、さと泣きつゝ涙も更に堰きあへず、繰返し吟するに、言葉の続き長ありて頼もしげなれば、緑の薄様に筆のあや清げに書きて、上を包み封つけて推し戴きくゝ、浦島が子の玉手箱、明けてかひなき恨みはあらじと、うち任せたる仏の誓ひを力にて、夫に渡せば、七日といふ夕つかた、国の守の館に参り、「仰せのおもければ何の径路は知らねども、歌の下つけける。」と案内さすれば、守は遅し来れ、そのわたり名ある侍、家の子共ある限り召し集め、興あるあらがひに郡司が妻をとられむ不便さよ、よも歌の本末つゞくべきやと、喜びて待ち居たり。

程なく参れば、「よくぞ逢へず参りたり。」と、「いかに人々も聞き給へ、此の歌心詞続きたらむにおいては、枯れに国を分ちてしらしむべし、続かぬ時は彼が妻を我に贈らるべきかためなり、必ず此のこと違ふべからず、其の証人にもなり候へかし。」と、髭おしなでて居たり。男恐れくゝ心の内には、なも観世音ばさくゝと念じ、文管をさし出せば、封を切りつつ改むるに、違ふことあらむやは。さて我が方よりの歌を高く吟するに、近江なるいかこの海のいかなればとて、下の封を開きて読みあげたれば、

みるもなきに人の恋しき

と吟するに、おのれも人々もはつと言ひて、暫く感ずることやまず。守も余りの不思議さに男を近くよせて、「いかなればかく思ひ寄りしにや。」と、頻りに問ひ責むれば、せむ方なくて、「石山の観世音の教へに任せて付くる。」と答へければ、さしもあらみさきのかみの心もとけて、「仏の力ならでは及ぶべきかは。」と、人々の上に召し上す。「今よりは国を分ち申すべし、兎も角も心に任せ給へ。」といへど、男は如何有らむと辿る許りなれば、武士の癖にて言ひ出でたる言の葉を違ふは道の恥辱なり、人の思はむも恥かしく、且は私に計

らひ約を違へなば、観世音の咎めも恐ろしと、しるしの文に、いろくゝの絹五十匹、太刀、かたな、砂金百両、馬、鞍など、引出物に相添へて、「けふより半国を計らひ給ふべし。」と、杯とりて勧め、おのれも悦ぶ事限りなし。男は面目を世にあらはし、家に帰りて妻を初め家の内上下悦ぶ事たぐひなし。かくて横しまなくおきてし、民草豊けく家の内富み栄え賑はしく、あまさへ国のの子姫一方生ひいでて、夫婦悦びを重ね、行末長き楽しみとなりにけり。これひとへに賢妻の諫めにより観世音に帰依し、信をもて祈れば、大悲無辺のあはれみを施し給ふ靈験、豈疑ふべけむや。郡司は観世音の厚恩の報せむために、石山寺に一日の法会を行ひ、これを恒例として今にたえず、子孫相續いて勤めけり。

つらくゝ此の歌の心を案すれば、所は近江の伊加胡郡なれば、それに擬へ、いかなればかく思ふにやと上にいひしにつけて、見る人ならばこそ、見もせぬ人の何しに恋しき道理あらむと咎め給ふ心にぞあらむ。それをこゝは塩ならぬ海なれば、蜚の刈るみるふさわかめやつたくひも無きにといふ詞によそへて、みるも無きにと続けたり。此の歌の一ふしに鬼神の如くなる国守の心を案げ、仏力の深きを解き、菩提の道に入る事誠に歴劫不思議にあらずや。郡司も仏力を頼みて妹背の中絶えず、家ゆたかにして仏道を修し、二世安樂を得る。あだなる迷ひのすぢを深き仏像に引きかけ、終に一大事の因縁と成就する事を思へば、いづれの門よりして真浄の道に入らざるべき、利生の方量りがたし、仰いで尊ぶべし。

## 音なし草紙

近き程のこととて、世に疎忽なるをかしき事の由来をなむ、詳しく語り伝へけるは、西の洞院の河近き辺に住み馴れし人の侍るが、そのかみ見初めしより、互に浅からず思ひ、いかならむ岩の峡、水の底までもと思ひて、年月を過しつゝ、白地にも立出づることなき人の、俄に思はずも遙々と、習はぬたびの心筑紫に思ひ立ちぬれば、いと心細くも覚ゆるに、又跡にとゞまれる人の眺め入りたる様もことわりぞかしと、かたみに袖を絞りつゝ、末の松山浪越ゆべし

とも思はずして、立歸るべきほどを遙かに打敷きつゝ、「わが行くかたは西なるに、都は東の空なれば、月の出で入る山をこそ、恋しき方のしるべには互に眺め侍らめ。」と、やう／＼こしらへ立出づるに、早如月も半ば過ぎ、弥生も近き程なるに、都の花の梢ども見すてて行くは、鷹がねの歸る空には似たれども、それは越路の故郷に、急ぐ心もありあけの、我は尽きせず物憂くて、引きかへ辛き旅衣、立出でがたき心地して、名残は多く思へども、とゞまるべき道にあらずとて下りけるが、さきへはさらに行きやうで、跡にのみ心の残りければ、

たつよりも心つくしの旅衣露けき袖をいつかはらはむ

女かへし、

言の葉の露おきそへていとまなほとまるつき身ぞ濡れはまされる

女も名残忍び難く、徒然の寂しさに、旅の空をのみ思ひやりつゝ、眺め暮し侍る折節、程も近くて常に見し人なるが、忍び入り来りて聞ゆるは、「思ひの色をかうとだにいはまほしくはありしかど、人目の間に洩らしわび、徒らにのみ蘆垣のま近きながらかひもなく、明し暮してすぎの門、さすがに忍びはてずして、名に立つともいかゞせむ、かゝれる道の惑ひには、品位にも依らざるにや、数ならぬ身に便りなくも、擬ふべきにはあらぬとも、光源氏は現なや、御継母の藤垂に、いとわりなくも如何して、忍び／＼の御わざに、設けの君の御名をば、冷泉院とぞ申しける。そのみならず春の夜の、朧月夜のあやまちに、須磨の浦へぞ流れゆく、浮寝の床の浪枕、思ひ明石のうたゝ寝も、人憎からぬ住居とて、問はず語りの夢をこそ、又も結ばせ給ひけれ。さて在原の中將も、鬼一口の辛き目に、都の中に住みわびて、東の方に旅衣、遙々行きて宇都の山、思ひをいとゞ駿河なる、富士の煙とかこちつゝ、なほ行末は武蔵野の、はてしもあらぬ恋路ゆゑ、身は徒らに業平の、男に今の世の、我も何かははらまし、幾程あらぬ夢の世に、はかなく思ひ消えぬべき、あはれを知らせ給ひなば、露の情をかけ給へ。」と、いと口なれていひ寄れば、人の心の奥も見ず、はや花染の仇にしも、うつろひ易くなりにつむ、百夜千束の例より、いとあり難く侍らめ、篠の小笹の仮初を、偽りなれし人やらむと、思ひもあへずいつの

まに、移り果てぬる心ぞと、頼み難なき世なれども、人の心はさま／＼に、なべてあらねば変りける。妻に別れて海に入り、共に自害をするもあり、歎きわびつゝ程もなく、思ひ消ゆるもあるものを、命までこそあらずとも、などかは同じ世に、かはる心のうたてさよ、たゞ何事も一筋に、思ひ定めぬ世の中や、風もまだきに糸すゝき、はや乱れつゝ打靡き、夕暮ことを松虫の、吹きくる笛をやるべにぞ、聞へも入らで元結に、霜置くまでも侍りければ、心安くも今ははや、其の関守もあらばこそ、夜な／＼毎に通ひ来て、年頃なれし人よりも、猶睦ましく打解けて、思ひかはせる其の色を、深く包むと思へども、浮名は殊にもれ易き世のならひなるに、まして阿漕の浦に引く網の、度重なりて人目にも、余るばかりの其の気色を、いかでか人の知らざるべき、いと愚かなる心にこそ。

今は早忍ぶる事もやう／＼まけぬれば、色に出でてぞあたりの人々は、此の事のみ囁き合ひけるを、此にさる若き人の聞きつけて、我もいかさまいひよりに見ばやと思ひ侍るが、げに浮船の御方へ匂宮こそ薫の御真似し給ひつゝ、混れて入らせおはしませと、思ひ出して我も又、彼の男の気色をなむしつゝ、行きで見むとぞ思ひたち、月のしば／＼遅き夜の更くるを待ちて彼の家の、軒端ま近く木がくれて、笛吹き鳴らし佇めば、女は夢にも知らずして、やう／＼今に來なましと、待つ程なれば笛の音を、只其の人と思ひつゝ、姿さだかに見もわかず、袖を引きつゝ内に入り、杯肴取出し、「興ある事のためたきは、昔も今も変らじや、三百杯も強ちに、辞すなと詩にも作りける。世のつき時も侘しきも、酔ひてぞしばし忘らるゝ。殊に不死の薬にて、心をのぶるものなれば、空しくする事勿れとは、げにもとおぼえ侍る。」と、いと馴れ顔にもてなして、かたみに強ひて飲むほどに、後の覚えもあらぬまで、共に酔ひてぞふし竹の、夜半すぐと思しきに、通ひ馴れたる人も来て、いつもの如く笛を吹き、声作りつゝ音なへど、鎖し固めつゝ寝ねければ、如何なる事の有らむと、覚束なくは思へども、しばしが程は待つ宵の、更けのく鐘の声きくに、昔の人の言の葉も、思ひ知られて徒らに、歸らむ事の本意なきに、忍ぶ妻戸も忘れつゝ、叩けど音の聞えぬは、耳無山か怪しやな、いつの間にかは昨日に今日は替る瀬の、飛鳥の川とちかひつゝ、東路ならぬ此の宿に、今は勿來曾の関すゆる、人の心ぞいとつらきと、打恨みつゝ、

頼みなき人の心を果なくも後の世かけて何契りけむ

と云ひつゝ歸りにけれど、女は爰に臥したるを、有らぬ人とも知らずして、「あな煩はし戸叩きけるや、夜は甚くこそ更けぬるに、辺なる人も如何思ふらむ、此の主こそいとよくなむ、聞き知りて侍れ。」とて、其の名を定かに云ひ現はしつゝ、「あのわたりには、なまいたづらなる人の、あまた侍る中にも、とりわきて仇めきたる色添ひ、笠彼所の軒に立ちつゝ木隠れ居て、行き来の者を招き寄せ、人を弄する心ありて、かかる好からぬ事を為侍る。」と、悪くげに語りなしけるを、此の男つくぐと聞きて、まるが事よと思ひぬれば、いとをかしきを念じつゝ、名のりをしてや行かましと思ひしかども、さすが咎めを憚りて、「木の丸般にあらばこそ。」と独りこちつゝ詞少なに云混らはして、まだ夜深くも歸りつゝ、実にかしこくも為済しけるよと、いと嬉しさを限りなくて、

思はずも契りし事ぞ忘れぬ後のなさは知らずながらも

女は此の人違へたる事は臆気にも知らずして、夜深く叩きける安からず思ひて、爰にさる者の侍るを語らひよせて、有りし花の様を聞えつゝ、「よし自らをこそ侮らせ給ふとも、辺も思ひ憚りからで、夢驚かし給ひたる悪くさをかこちてたべ。」といひければ、「畏まり侍る。」とてぞ行きにける。

使ももとより、此の人違ひの事をば夢にも知らずして、過ぎし夜深く叩きける事をかこち顔に行きて、かの女のいひし儘に聞えければ、人して云はする程もなく、泊りし主出て来りて、「実に御咎めはさる事なれども、それは常々うとからず、通へる人のわざなれば、彼所へこそはかこちたまはめ、爰には更に知り侍らず、去りながら某も、過ぎにし宵は何と無くやすらひ出でて侍るに、招く気色の見えし儘、誰とも知らで立寄るに、袖を引かせ給へるは、いと思はずに覚ゆれど、さすが嬉しき道なれば、いかでか辞み申すべき、一夜参りて、御とのみを申せし事も混れなし。扱、又殊に珍らしき、肴数々取出でて、酒の威徳の有ることを、様々語り給ひつゝ、御杯をたびければ、数をも知らず飲み酔ひて、現も更に無かりしが、斯くては人の御為も如何と思ひ憚りては歸りしながら、そなたの空のみ眺めしに、今更かかる御使の有るべしとは、かけても思ひよらざりし、ゆるし給はぬ御ことを押しても参りたらばこそ、身の僻事に

も侍らめ、あなかにおはする殿にも此の故を、たとひ罪には沈むとも、いかさま歎き聞えむ。」と、ろつじつゝ云ひければ、いと道理におぼゆれば、言の葉も無くて、「しかぐの其の故をも知り侍らで、かかる御使を申し、面目を失ひたるこそ口惜しけれ。」とて歸りぬ。

使歸りて彼のもとに云ひし事を、有りの儘包まず語り聞ゆれば、人やりならぬわざながら、俄に胸の潰れてぞ、我にも有らぬ心地して、物も覚え今更に、世の人聞きを思ふより、増りて猶も苦しきは、哀れに深く思ひおき、心つくしに住む人も、斯くと聞かれは如何せむと、いと悲しきに打添へて、傍は忍び来る人も洩り聞かなむも恥かしく、心つきなき事なれば、返らぬ事の悔しくて、取返すものにもがなやと、千度万度思へども、過言一度出でぬれば、駟も舌に及ばず、いふ言の葉は今更に前非を悔ゆるかひもなし、面目無さは限りなくこそ侍れ、と、「御身を深く初めより、頼み侍る事なれば、露いさゝかも此の事を、人に洩らせ給ふなと、いとよく口を固めつゝ、数々の引出物を戻してぞ、彼の腹立てし心をもさるべき様に聞えなし、宥めてたべ。」と云ひけるに、かかるべしとは白雲の、跡はかなき事なるに、由なく人に頼まれて、又は何とか岩橋の、夜の契りも絶えはてて、明けてわびしく憂き事の、今有りともいかにして、有らぬ様には岩波の、云ひくだかむは難くのみ、思ひながらも様々の、ひきどもあまたたびけるに、辞み難くて、「聊かも、疎略は更に侍らじ。」と、聽て立ちてぞ行きにける。女は更に現とも夢ともわかぬ心地して、いと浅ましきの余りにぞ、

今朝こそは有らぬ人ともしら露のむすぶ契りを夢になさばや

いなみ難さのまゝにこそ、如才あらじと聞えつれ、行きては何といふべきと、詞ぞ更に無かりける。人の頼むに身を捨てて、頼まれぬるも事に依る、笑はれぐさに成りはてば、我さへ共に名取川、流しはてむも口惜しく、譬へば漢の古に帝堯と申し奉る帝より、許由と云へる賢人の、箕山に住むと聞召し、御位を賜ふべしと、御救誼の有りにけるに、其の返事をば申さで、剩へかかる事を聞きて、耳が穢れぬとて、頼川の水にて耳を洗ひしところへ、同じ山に住む巢父も此の川に來り合ひしが、左様に穢れたる耳を洗ひし水をば、牛にはいかに飼ふべきとて、牛をひきて歸りしところ聞け、昔の賢人はかやうに心清かりしぞかし、いかなる我なれば傍痛き事に頼まれけむ、かく穢れぬる心をば、大海

にてすゝぐとも、いかでか清からむと、古き例も恥かしく、悔しさ限りなければども、今更異議に及はずして、又彼処に行きつゝ、「さても不思議なる卒爾をも知らず、申出づるこそ返すゝも口惜しく候へば、御詫言に参りて候。よしゝ人は知らざれば、たゞともかくも御心得にてこそあらむすれ、哀れ此の事を音無しに深くも頼み侍る。」と、俄に引きかへ詫ひけるも、いと可笑くて、「某を世に徒らなる好き者と宣ひしさへ、御恨みは深く侍るに、ましてや故も無きことをかこち給ふは心得ず、いと珍らかなる事かな。」と、るつじつゝいひければ、「御道理にては候へども、かゝる過の侍ればこそ、かやうに御詫言をば申し候なれ、実に亦昨日今日までも鎧を削り戦へる敵なれども、降を乞ひぬれば御許しを給ふも習ひぞかし、是れは誠にいはなき女心地のはかなくて、乱れしすきに引かれつゝ、由なき事を聞えしは咎にあれども、さりとは浮節ながら、なよ竹の一夜をこめし御情も、此の世ならざる契りぞと思召し赦させ給へかし。」と打笑ひつゝいひければ、さすが打ほゝゑみて、少し和らぐ言の葉のいと嬉しくて、「御僻事は無しとて、聞え頭はし給はむも、いはぬに劣る習ひあり。悪き者として今更に辛き目を見せ亡はせ給ひなば、よしなき罪に侍るぞ、只さるゝは此の事を思ひ止まらせ給へかし。」と、詞をつくし様々にわびければ、悪きながらもさすが又、いと可笑きにすかされて、やうゝのこゝにも聞入りて侍るとぞ。

されば余りにけしからず、我が身の程をふさやかにいひなさむとて、斯かるうたてしき事をなむ取り出でて、人笑はれになるぞ心憂き、たとひ斯かる事ありと、知らず顔にて忍びなば、かく憂き事はよもあらじ、死ぬるに増る恥ぞと、げにかやつなる事をこそと、聞くも憂ければ、とにかくに見やう形はおくれても、心は下の品ならず、只何事もつゝましく、忍びすくしてさすが又、世の浮節も哀れをも、情ありつゝ知る人の、只仮初に云ひ捨つる、言の葉ことの末までも、露違へしと思ふには、心悪くも頼もしけれ。其の人柄はやいとなぐ、片帆にあらぬ様ながら、心の様はさしもなく、偽り勝にさがなくて、面はゆげなき風情には、花の姿も何ならず、心の程にやつつゝ、色香も消ゆる心地して、難波の事も深からず、思ひなさを浅くのみ、見劣りするぞ憂き。されば高きも下れるも、おのが心のゆく儘に、人の誹りを知らざれば、遂に怪しき事出で来、世の言種となるぞ憂き。又さりとも見聞く世に、露きすなくて方にも満てる人はあらばこそ、唯何事も耳立たで斜なるぞ目安きや。余りに下しつう

処までも取る方なきは口惜しく、人も落しめはべれば、其の品あるも品なきも、只程々に従ひつゝ、心つかひなむいとよくだしなみ侍るべきことにこそ。

## かざしの姫君

昔、五条あたりに、源の中納言とて、万にやさしき人おはしける。北の御方は大炊殿の御女なり。姫君一人おはします。御名をばかざしの姫君とぞ申しける。御容を見るに、髪のかゝり眉口美しく、春は花の下にて日を暮し、秋は月の前にて夜を明し、常に詩歌を詠じ、色々の草花をもて遊び給ふ。中にも、菊をばなべてならず愛し給ひて、九月の比は庭の辺を離れがたく思召して、年月を送りたまふ。十四と申す秋の末つ方に、菊の花の移るひゆくを、限り無く悲しきことに思召し続けて、微眠みたまへば、年のほど二十あまりなる男の、冠姿仄に、薄紫の狩衣に、鉄漿黒に、薄化粧太眉つくりの、やごとなき風情は、古への業平、光源氏もかくやと思しくて、姫君によりそひ給へば、姫君は夢現ともおぼえず、起きさわがせ給へば、この人姫君の御袖をひかへ、「なごか露ばかりの御情もなからまじや。」とて、泣くゝ色々のことの言の葉を尽し給へば、姫君もあはれとやおぼしけむ、夜半の下紐うちとけ給へば、かの人嬉しくて、いとこしかた行末を語り明させ給ひけり。衣々にもなりしかば、この人姫君に打向ひて、「又の夜は必ず。」とて、なくゝ、

憂きことをしのぶるもとの朝露のおきわかれなむことぞかなしき

ときこゆれば、姫君、

末までと契りおくこそはかなけれしのぶがもとの露ときくより

と、互に言ひなかし給へば、まれ人は籬のほとりへゆくを見て、面影もなし。さてかざしの姫君はいよゝ不思議の思ひをなし給へども、人にとぶべきたよりもあらねば、心ならず、それよりして互の御契り浅からず、忍びゝ



に通ひ給へば、いつとなく日数をすし給ふほどに、ある時姫君仰せけるは、「今は何をか包み給ふらむ、はや〜御名をしらせ給へかし。」ときこえたまへば、この人恥かしげにて、「このあたりに少将と申しはべる者なり。後には定めて知召すべし。」とて、帰り給ひぬ。

そのころ朝廷には花さるへありとて、人々を召されければ、中納言殿も参り給ふ。みかど、中納言を近づけ給ひ、「尋常ならぬ菊の花さるへ奉れ。」と、綸言あらせ給へば、ちからなくして中納言、「菊を奉らむ。」とて、帰られけり。さて少将は、その日の暮方に、西の対に來り給ひて、いつよりも打萎れたる有様にて、世の中のあだなる事ども、語り続けて、うち涙くみ給へば、かざしの姫君、何とやら御物思ひ姿見えさせ給へば、「いかなる事を、思召しわづらひ候ぞや。」と、終夜きこえさせたまへば、「今は何をか包み候べき、見えまぬらせむ事も、けふを限りとなりぬれば、如何ならむ末の世までと、思ひし事を、皆徒事となりなむ事の悲しさよ。」とて、さめ〜と泣き給へば、姫君も、「こはいかなることぞや、御身をこそ深く頼み奉りしに、自らをば何となれとて、さやうにはきこえさせ給ふらむ。野の末山の奥までも誘ひ給へかし。」とて、声を惜しみます悲しみ給へば、少将も、「心にまかせざれば、とて、とかくの詞もなし。や〜ありて少将涙の隙よりも、今はは立歸りなむ。あひ構へて〜思召し忘れたまふな、自らも御心ざしいつの世に忘るべきなむ。」とて、の髪をきりて、下絵したる薄様に押包みて、「若し思召し出でむ時は、これを御覽せさせたまへ。」とて、姫君にまゐらせて、また胎内にも、緑子をのこしおけば、如何にも〜よぎやうに育て給ひて、我が形見とも思召せ。「とて、泣く〜出でたまへば、姫君も御簾の外までしのび（脱文あり）あつけおき、「いつく〜とてかおはすらむ、今一たび見え給へ。」と悲しみ、只ならぬ御身とてはしまで思ひなげき給ひけり。今はなやましくならせ給へば、乳母いかにと悲しみて、母上に此の由申しければ、中納言殿も騒ぎ給ひて、〜に勞り給へども、そのしるしこそなかりけれ。乳母かんなぎの方へ行きて、「御年十五にならせ給ふ姫君の、長月つこもりの西の刻よりいたはりつかせ給へるは、いか〜候べき、考へて給はり候へ。」と聞えしかば、神主申しけるは、「なにもはかりがたく候、若した〜ならぬ御身にてやおはすらむ。如何様にもあやぶき御占にて候。」とありしかば、乳母不思議の思ひをなし、急ぎかへりて母上にかくと申されければ、北の御方仰せけるは、「みつ

からも然様には見なしてありしかども、さやうの事はあらじと思ひ侍れば、言ひいでむ事もさすがにて、若し又いかなる事にかありけむ、よくよく賺して問ひ給へ。」ときこえければ、乳母対の屋に参りて、「御姿を見参らすに、た〜ならぬ御有様と覚えて候ぞや、自らに何をか包ませ給ふべき、御心の内しらせたまへかし。」とて、〜と嘯きければ、姫君思召しけるやうは、とても忍びはつべき事ならねば、語らばやと思召し、恥かしながら、如終の事どもを、残りなくきこえければ、乳母あさましく思ひけり。さるほどに乳母北の御方へ参り、ありのまゝに申しければ、中納言殿も聞召し、「類なく浅ましき事かな、内参りの事をこそあけれ思ひしに、さてのみやまむ本意なさよ。」とて、うちすさみ給ふ。さる程にやう〜月日も重なりければ、内々御産所を初めて、女房達数多介錯申しければ、実に美しき姫君出で給ふ。乳母嬉しく思ひ、やがて御産湯衣まゐらせて、申されけるは、「人々も見給へ。母姫君も御覽せよ。これにつけても、御命ながくよ。」とて、母姫君にさしよせ給へば、姫君見やり給へば、未だあやめも見えさせ給はねども、か〜やき美しく、御顔はせ、父少将に少しもちがはせ給はねば、そのとき姫君かくぞ詠じ給ふ。

夢ならば夢にてさめてあさましやこはいかなりし忘れ形見ぞ

とて、御涙をながし給ふ。さるほどに北の御方聞召し、「あらうれしのことどもや、いそぎ中納言殿に見せ参らせむ。」とありしかば、母姫君思召しけるやうは、あら恥かしのことどもや、親の身にても、さこそあさましくおぼすらめ。これにつきても少将殿命をめせとぞ悲しみ給ふ。さてあるべきにあらざれば、乳母、姫君を抱き給ひ、北の御方諸共に、中納言殿御覽じて、「あら美しの姫君や。」とて、懸て御袖に移し給ふ。御いとほしみ限りなし。かくてつながらぬ月日なりければ、七歳にて御袴著せ参らせ給ひけり。日数を経る程に、程なく十三にぞならせ給ふ。「眉目容の美しさ、唐の楊貴妃、漢の李夫人、我が朝の衣通姫、小野小町なんども、これにはよも勝らじ。」とて、人々申しけり。さる程に君聞召されて、女御にぞ定まりける。中納言殿も、北の御方、母姫諸共に、御喜びは限りなし。さても御門御寵愛甚だしくこそきこえけれ。いよ〜浅からぬ御心にも、かなひ給へば、ほどなく若宮、姫君うちつ〜きいでき給ひて、まことにめでたき事にぞ人々申しけり。あまりに不思議なる例な

れば、末の世までの物語に書きおき侍へるなり。

## こほろぎ草子

あやしの庵の草枕、暫しはこゝにかり寐して、憂き世の中をつく／＼と思ひ続けて日を送りける折節、秋の末つ方、庭の薄ももとあらみ、木の葉の色づく風に乱れ、そこはかとなく、物哀れなる夕暮に、ひとり寂しく月影に、心を澄ましし折節、傍なる秋の下葉の陰よりも、虫の数々集まりて、そゞるなる物語するを聞けば、いと哀れにをかし。其の中よりこほろぎといふ虫出でて申しけるは、「いかに方々聞き給へ、誠に我々の身の上は、あさましや、はかなきこと果ても侍らじ。春過ぎぬれば夏草の、緑も深く茂りあひて、五月水無月の頃は、朝な夕なおく露の、玉を乱せる如くにて、心も浮きたつ、或時は菜種の色に染み、ある時は濁き水の流れに、我が身の影を写し、こゝかしこに飛び遊ぶ時は、罪も報いも忘れ果て、心も浮かれつゝ、世の憂き事も思はれず、誠に一時の楽しみ、千年の命を延ぶる心地して、はや文月も菊月の空に移りて、月はさやかに渡れども、吹き来る風も身にしてみて、いつとなく物悲しく、夜も長月になりぬれば、足さへ心の儘ならず、まして声もかれはてて、頼む草木は、露も宿らず、いつしか、初霜の下りて寐ぐらも露はれにける。木の枝に小鳥の音もきく時は、消ゆる思ひに心を痛め、ある時は人近き垣根に取りつき、又は縁の下に身を隠さむと、ひしるに、小さかしく鼠に探し出されて、憂き目ばかり見むことの口惜しさ、あなたかなたと迷ひ出でけるを、いたづらなる子どもに捕へられて、悲しやかや系につながれて、大地に曳廻されて、恥をさらし、竹にさし通され、たちまち気を失ひ、すでにむなしくならむとするを、水を飲ませいたはるやうにもてなして、やう／＼心をとり直し、思へばあら浅ましや、踏み殺されて遂にせつがきの蚯蚓となる憂き目にあひ、所詮火の中へ飛入らむと思ふにも、身をいとひいましめられていひがひもなく、寔に身をもぬれ衣、怨めしき先の世の報いの程こそ悲しけれ、嘆きはまた余りあり。明日の命も白露の、とても消えなむ浮身ぞかし、せめて今宵の月影に、我々が心に思ふ言の葉を語り慰まむこそ嬉しけれ、いざ／＼敷島のこ

とよせて、拙き言の葉を三十一文字結び置き、なきあとまでのかたみともなし給へ、扱々。」と語りける。数多の虫どもはだ寒く、衣の袖を顔にあて、涙を流し、「扱々日比おもひけるこほろぎ殿は、色も黒し、せもかゞみ、生れつきのやさしがら、まして、花の下、月の影にも心をよせ給はず、こゝのかべにとりつき、又流しの下に身をかこち、物の哀れをわきまへて、夕暮より夜半の比まで啼きたまふ、声のみはよそ／＼しく聞きはべりしに、今宵の物語こそ哀れも哀れに催し侍り、こゝろざしの程も有難く感じけり。」と、やがて涙にくれにける。その中より蟬出でて申しけるは、「如何にも今宵は月も冴え渡り、面白く覚え侍るなり。しからは夜も更けぬうち、はやとく／＼。」と言ひければ、各落葉の上に座を並べ、思ひ／＼に詠じける。心の内こそをかしけれ。

### こほろぎ

此のすみ彼所の壁にすがりつき身は数ならで君をこほろぎ

### はたおり

かた糸のはる／＼野辺に繰返しはたおりかけて啼きあかすかな

### すむむし

君にかくふりすてられし鈴虫の我が身の果てやいかなるらむ

### きり／＼す

けふよりは深き思ひをきり／＼すなけど哀れととふ人もなし

### ほたる

草の露水の泡とも消えやらでたへめ思ひにもゆるほたる火

### 蚊

夕ぐれの軒の煙に立ちまよひ忍びかねたる身こそつらけれ

### かげろふ

あはれなる夕べはかなきかげろふの消ゆる命を露の一時

玉むし

いろにこき千草の花のかずくゝに思ひみだるゝ露の玉むし

みのむし

恋ひわびて涙の袖にぬれにけりわがみの虫はいきてかひなし

木こりむし

人しれぬ深山のおくに住みなれて朝な夕なにつま木こりむし

蝶

花の色に心を見せてまよふてふ哀れとおもへ草の葉の露

峰

棹さしていつか渡らむみつせ川はちすの船にのりを求めて

小がねむし

山吹の色をあらそふこ金虫くさ木もなびく光なりけり

松虫

夜もすがら恋しき人を松虫の音をなきわぶる野べぞ露けき

蠅

玉だれの錦の床の上までもはひあがるこそくわはつ成りけれ

くつわむし

ものおもふ心の内ぞくつわむし人の情をかけぬ身なれば

日暮

何となくけふは日暮しあすは又いかなる方に身をや隠さむ

かまきり

草の葉をかま切り立ててかる野べの露のつき身はおき所なし

くも

あやしくもかゝるはかなき住ひせば問ひ来る風の便りだになし

けら

下つかに身は埋もれて過ぎけらしいつくも宿と定めざりけり

蟻

山深き朽木の中にありながら峯のあらしをよそに聞くかな

けらく

よしなくも人のけらを請ひもせず世に悪まるゝ身を悔ゆるかな

いもむし

わが住みし芋の畑はあれにけりことしの夏はひとりのみして

みゝず

浅ましや頭も見えず尾もしれず土の中には音をのみぞかし

毛虫

いかにせむ我が身の毛虫なかゝに人の見る目もさぞやはづかし

とかげ

世を捨てて柴のとかげに引きこもりいかでや人の毒と成るべき

蛇

いたづらに身はくちなはと成り果てて結ぶえにしの便りだになし

しらみ

思ふ事がきくどくまに長月の夜はほとくとしらみこそすれ

の  
み

ひとりのみ思ふ心のかひもなくとび立つばかり物ぞ悲しき

百  
足

とにかくに世をはてむかで渡るへし数多の足も頼まれぬ身は

飛  
虫

羽もなく行くへもしらぬ飛虫のおもはぬ淵に身をなげにけり

ぬ  
もり

苔深き水の底にてもろともにかねふる里のぬもりをぞする

か  
へる

古里に立ちかへるとは知りながら土かきわけてとふ人もなし

や  
す  
で

雨ふればかや〇〇目際に集まりて心やすと遊びぬるかな

蝉

はかなしや身はつつ蝉のから衣なほうらめしき秋風ぞ吹く

さて、申して曰く、此の時一首の歌は虫の歌仙まなびて、しうぎの判者は、やうつし中納言在原の蟬朝臣信行卿、座上につらなり、歌批判せられしが、「いかにおのく宵よりほろぎ殿の座席に、時うつし参らせ候、秋の夜長と申せどもはや明けむとす。此処に長座敷無益の事に候、東雲鴉の声も恐ろしくとくく住家々々へ帰り給へ。」といふ。ぬもり是を聞きて、蛙がをこがましくいひ出でたるをそねみけむ、

立ちもせず下にもをらずさわがしくかへるくといふぞをかしき

蛙大きに腹立ちて、返歌に、

浅ましやすみの衣に身をそめてなどかいろには深きぬもりぞ

何れも論じけるを、又々こほろぎ出でて、互にせんなきことなりとて鎮め、各暇乞して藪の中へぞかへりける。

## 大仏供養物語

春乗房重源東大寺やうやく勧めつくりて入唐す。帰朝のとき極楽の曼荼羅、五祖の真影をわたり奉り、東大寺半作の軒の下にて、法然聖人御導師として、供養あるべきよし風聞あり。しかる間建久六年乙巳十一月廿八日と定めおかれし事なれば、東国大將殿を初めまゐらせて、宗徒の大名千葉、北條、畠山、宇都宮を初めとして、大名高家三百八十四人、其外数をしらす。又鎌倉殿の北の御方を初めまゐらせて、畠山の内様、宇都宮の内方は鎌倉殿の北の御方には妹御前にてましければ、申すにおよばず、大名小名の女房達、法然聖人の御説法聴聞せんとて、六百人ときこえし。充上臈達には帝王を初めまゐらせて、関白殿卿上雲客籠居日みす達を始めまゐらせて、南都へ輿車をやりつゞくるぞおびたゞしき。其外大和、山城、和泉、河内、近江、越前よりまゐりつゞく聴聞者は、いくらと云ふ数をしらす。かゝる所に法然聖人鎌倉殿へ案内を申されけるは、承り候へば供養の御導師に源空をめされ候べき由候ふ、尤も導師にめされん事面目と存じ候へども、浄土門をとり立てて、愚癡闇鈍の衆生を仏道なさんと嘗み候へば、山の大家不思議の法然房、外道の法をとり立てて、衆生を地獄へおとさんとせらるゝ不思議さよとて撰択の形木をうちわりし刻に、黒谷を退出せられ、当時は大原にすみ候ふ、まして導師つかまつると聞えては、広座とも憚る事は候はん、狼藉仕り候はん哉、かゝる大事の御供養に障碍をなさん事口惜しかるべき事に候ふ、余の御導師をめされ候へ、源空におき候つては叶ひ候ふまじきよしを申されければ、鎌倉殿頼朝のはからひたるべからずして、

当帝へ奏問せらる。帝王を初めまゐらせて公卿殿上人、さていかゞあるべきと詮義したまふ。大宮の左大将忠光の公の申されけるは、白河の院の仰せにも何事も丸が心にそむける事はなけれども、賀茂河の水と双六のさいと山法師の心、これ三つは丸の心に叶はぬ物ぞと仰せられし事なれば、今もかくこそ候はんずらんめ、さ候はゞ天台座主をめされ候へと申されければ、しかるべしとて、天台座主を召さるべしとぞ聞く。奈良法師此事を承り謂候はず、其義ならば我寺の得業こそ御導師はせらるべけれ、ゆゑいかんとなるに、聖武皇帝の御ちぎり浅からざりし三台女御に過ぎおくれたてまつり、御歎き深かりしに、死出の山より郭公に女御の御歌を誦みて、娑婆へ言伝られし事ありしぞかし、其歌に云く、

わくらはに問ふ人あらばほとゞぎす死出の山をばひとりこそ行け  
と仮名に書きて、郭公の足にゆひつけてつかはされければ、卯月八日に内裏の上を鳴きめぐるを、公卿殿上人鞠の会ありけるが、初音めづらしく聞ゆる物かなと、雲井を御覧ずれば、文をくひきつて落したりければ、大臣達不思議と思召し、是をとりて帝王に奏し申しければ、是を開き御覧するに、女御の御手跡にて此歌をよみ給へば、御涙にむせばせ給ひ、あらむざんや御存生の時は百官万乗の位にそなはり、国母女院とかしづかれましましけれども、死出の山をば只ひとり行き給ひけん事よとて、金銅十六丈の璫遮那仏を手づからみづから鑄たてまつり、行基菩薩を御使として、中天竺より娑羅門尊者を請じ渡し奉りて、供養をとげさせ給ひたりし事ぞかし、我寺の本願を思つて得業こそ導師をばせらるべけれと申しければ、寺の僧綱是をきゝて、さらば我寺の誦源法印こそ顕密の家にてましませば、御導師はせらるべきとぞ印されける。帝王を初めまゐらせて、いづれを導師に定むべきとぞ仰せける。かゝる所に梶原、鎌倉殿の御前に参りて、地体御心せばき御事にて御座候ふ、賤しき者さへ富貴の家に生れつれば、堂を作り塔をくみて、一座三座の説法をばせさする事にて候ふ、いはんや大日本一番の大仏の御供養一座の御説法はすけなき御事にこそ候はんずれ、只三人ながら召され候へと申しければ、然るべしとて、三度の説法に定まりぬ。又一二番をぞあらそはれける。さてたれか一番の御導師をせらるべきと申されければ、山の大家我山の上をばたが期すべき、座主一番とぞ申しける。又奈良法師の申しけるは、花族をたてんずるにたれか山に劣るべき、東

大寺は聖武皇帝の御願所、興福寺は淡海公の氏寺なり、花族栄葉、南都の上をばたがおすべき、得業一番とぞ申しける。又寺の僧綱申しけるは、其義ならば我等の法印こそ九條殿の御子息に壽楽院の寛明僧正の御弟子也、顕密兼学浄行持律の御事也、法印御導師とこそ申しける。相論によつていづれを一番に定むべしともおぼしめさず。又梶原申しけるは、さらばくじを取らせ候へ、くじの籌はかた恨み候はじとて、三人の御代官をめて、足立の藤九郎くじを持ちてとらす。げに山王権現の御はからひにてや候ひけん、山は一番に取りあたる、南都は二番に取り当る、寺は三番に定まりける。さて法会の儀式には山の大家一千人、奈良法師一千人、寺の僧綱一千人、そつじて三千人は大行道にたち、廻る錫杖の役には山より円入房に定まりぬ。伽陀の役には南都より率の法印但馬の阿闍梨、戒壇院の大夫房、円明院の式部の阿闍梨を初めとして、十二人とぞきえし。鑊鉢の役には寺より覺乘坊、道永坊、この清僧たち我劣らじといさみけるは、天人も影向し、堅牢地神、梵天四王龍神八部も御納受ましますらんとぞおぼえける。去程に上臈達輿車に乗りつれて御聴聞せらる。座主の御説法始まるに、近き遠きもの一文一句にても御聴聞とおぼしき事もなかりけり。是を始めとして三座の御説法は過ぎ侍れども、たが耳に入る御聴聞更になかりけり。鎌倉殿の北の御方、大将殿へ御使をもつて仰せありけるは、東国より仏の御説法聴聞のためにはるゞ上りて候へども、何事の聴聞事も候はねば、法然聖人の御説法聴聞申して下向し候はでと申させ給ひければ、頼朝もさこそ存じ候へとて、御使者まゐらせける。聖人も今こそ参り候ふと御返事ある。さるほどに山の大家是をきゝて不思議の法然房の振舞かな、碩学達の御説法ありつる後に、何条の法をのぶべき、必ず浄土門をほめて余宗をそしらんとぞ思ふらん、もしさもあらば椅子より引きおとし、恥をあたへん物をとて、あらき大家一二百人、姿をかへて聴聞衆にまじはる。聖人は是をしるしめされたれども、六青の小袖のさる体なるに薄墨ぞめの衣めして、高野日笠を顔にあて、いと事もなける体にて入堂し給ふ。御供には小坂の善恵坊、長楽寺の隆寛引接坊、筑紫の聖光坊を初めとして、御弟子十二人にてぞ侍りける。聖人の椅子ちかくつらなり給ふ若殿三人、あないやしげの御房や、輿車にてこそまゐらるべきに、かちやはだして見苦しさよ、是は本よりの貧僧かなんどとさゝやき笑ふ。聖人東西をしづかに御覧じて、幾千万ともなき聴聞衆を、皆死人ぞかしとおぼしめし、御涙をながさせ給ひければ、北面の下臈どもものいひけるは、あれ

見給へや、説法すべき智分が無くてこそ泣き給ふにやと、笑ひあひけり。聖人かね打ち鳴らし、東西をこらんじ、人の身の欲心はおそろしきものにて候ふ、碩学達の御説法のあとで、源空があまり候へば、何條の法を説きのぶべき、いかさま施物にこそ心をかけて参りたるらめと思召し候ふらん、それもつともにて候ふ、又聴聞衆の御耳才宏才博覧の人あまた御わたり候へば、はづかしき御事にて候へども、一座の説法はつかまつるべく候ふ、定めて山の大家はいかさまにも浄土門をほめて、余衆をさらはゞ恥にあたへんとぞ思しめし候ふらん、八万四千の法はみな衆生の機根にしたがひて説き置きたまへる法なれば、いづれをそしり、いづれを正しとすべきやらんおぼえず候ふ、中にも我身の体は妙法蓮華經の五字をも建立し給へる事なり、胸には八葉の蓮華あり、仏みなこれにまし／＼給へり、かるが故に悪業もとより常になし、妄想転倒よりおこる、心蔵みなきよければ、衆生もとより仏なり、かるが故に法花経をそしらん者は、只我身の体をやぶるに似たり。そも／＼法花経と申すは中天竺のありし浄飯大王の御子悉連太子、十九歳にて大道心をおこさせ給ひ、御ちぎり深かりし耶修多羅夫人をそむき、いとをしみの御子羅喉羅をふりすて、檀特山にいたらせ、阿私仙人につかへ、難行六年苦行六年し給ひて、三十成道御くし剃除し給ひて、釈尊とあらはれ給ふ、一字一点なりとも、この御経をあだに申すべき事なし。されば書写供養して筒に奉納し侍らんに、口に覆面をして臭き息をあてじと奉納したてまつるべし。かゝる御経をば末代悪世の衆生等いかでかよく保ちたてまつらざらん。又真言の教と申すは、たとへば人となる事は父のをもつてなり、いかなれば父母のをもつて人と成るべきぞや、北斗七星延命經には、九曜七曜の星のあつまりて、作りこしらへる事なれば、大骨、小骨、肉、肝、目、口、耳、鼻、六根六境仏ならずと云ふ事なし、出入の息は金剛界、胎藏界、動きはたらくこと印契ならずと云ふ事なし、就中北斗七星は頂を座とせり、最後臨終の時までもしれつを定め、常に其人を守護し給ふ。九曜七曜は、酒飯ともなれり、その人をはらんとする時、北斗さきだち座をはなれ出で給ふ、玉のいづるを人光物の出づると申す事にて候ふ、かゝるめでたき法も七年の兼行五年三年して、いかに悟るといへども、百日の精進潔齋にてこそ、伝法灌頂はつかまつり候へ、かくの如く候ふ間、下界の衆生この法をいかでかたもち候ふべき。又座禅修行と申すは、達磨いにしへの智人達、樹下石上にこもり、岩の上を座と定め、膝をくみ手をむすびて、三業をしづめ身なはたらかさ

ず、七年五年三年通して得法仕り候へども、末世の衆生は風の梢を鳴らすごとく、海の波の荒れたることく、散乱疎動の心なれば、いかでかたすやくかゝる座禅をば仕るべき、此ことわりを存知し給ひて、釈尊世に出でさせ給ひ、すでに八万四千の教法を説き給ふ、中にも大無量壽經に云ふ、末法万年余経悉滅弥陀一教利物遍増と説きたまへり。此経を善導釈してのたまはく、万年三宝滅此経住百年爾時間一念皆徳生彼と説きたまへり。かゝる御事にて候へば、源空浄土門を取り立て候へば、外道の法をとりたてて、衆生を地獄へおとさんと仕るとあつて、山中を追ひいだされて候へば、いかでか聖教の所判のまこと尊き処を背くべき、三世の諸仏は十万仏土を建立して、衆生をみちびかんと誓ひましませども、余仏は顕密兼学浄行持律のものをこそ迎へんとは誓ひましませ、西方極楽の阿弥陀仏は十悪五逆の衆生氷く三途にしづみて浮ぶまじきかとなげかせ給ひ、五劫思惟の間結跏趺坐し給ひて、四十八願をおこさせ給ひ、第十八の願に六字の名号を造らせたまひ、乃至十念の願をおこしたまへり。そも／＼五劫思惟と申すは、一切の深き事高さ八十里の磐石を天人のあまの羽衣をきて、三年に一度あまくだらせ給ひて、此岩を撫てはのぼり／＼、皆なでつくすを一劫と申す也、又八十里の箱に芥子といふ物の菜種よりも小きを、此箱に満ちたらんを、天人三年に一度下りて、一つづつ取りつくせるを一劫と申す也、如此方八十里の岩をなでつくし、八十里の箱の芥子を取りつくすことを、五劫思惟とは申す事にて候ふ、是ほど久しく案じます功能いかほどか思召し給ふ、念仏をば立つ子這ふ子をさなき者まで、南無阿弥陀仏と申すはやすき事にて候へども、仏の兆載永劫の間衆生を仏になさんとして、案じましけるあり難さよとて、南無阿弥陀仏と申すこそ八十億劫の罪の重罪消滅するとこそ候へ、中にも一念十念の功能のふかき事、喩をとつて申さんに、高堅樹と云ふ木はおひのぼること一日に百丈づゝ、百年おひのぼる、此木の高さに金銀七宝の塔をくみたらんと、一念の功能と対し候へば、高堅樹の高さの七宝の塔の功德は十分の一も念仏一念に及ぶべからずと見えて候ふ。又毘闍風といふ風は大力の者箭を射出したらんが如く、東西南北をめぐり、おこたらず百千年吹きゆきたらん遠さの間に、金紙七宝の堂塔をひとしく造りたらんと、一念の功德と対すれば、毘闍風の吹きゆきたらん跡の堂塔は、十分一も一念の功德によりつくべからずと見えて候ふ。さて十念の功德は天竺に、河と云ふ河あり、無熱池の池より流れたる河也、広さ四十里、深さ四十里あり、水上より湊まで百万三

千六百里流れたる河なり、此河のいさこの数の金銀七宝の堂塔を造立したらん功德とくらぶれば、かの 河の沙の数の堂塔は、千分の一も十念の功德には及ぶべからずとこそ見えて候へ、又一大三千世界の草木をあつめて灰にやきて、是は其山の木の灰、かれは草の灰と仏はしろしめせども、一念十念の功德ときつくしがたしと仏は説きたまふ、中にも此法は女人のためにおこし給ひたる願にて候ふ、三業をしづめて耳をそばだて御聞召し候へ、女人は三世の諸仏に棄てられて、仏と成るべきことなし、吾朝は小国なりといへども、女人のまゐらぬ所おほく候ふ、吉野には不動院、比叡山には坂本をかぎる、高野山には不動坂、天王寺には宝塔、善光寺には堂の内へはまゐれども、御格子の内へはまゐらず候ふ、あさましと云ふばかりなし。されば涅槃經には女人地獄使永断仏種子外面似菩薩内心如夜叉とのたまへり、此文の心は女人は地獄の使永く仏子の種をたつ、外面は菩薩に似たりと云へども、内心は夜叉のごとし、同じき經の二十一巻にのたまはく、諸有三千界男子諸煩惱合集以一人女人為業障とのたまへり、此文の心はあらゆる三千世界の男子のもろくの煩惱を合せ集めてもつて、女人一人の業障とすとのたまへり、同じき經の二十三巻に、女人大魔王能食一切人現世作纏縛後生為怨敵とのたまふ、此文の心は女人は大魔王なり、よく一切の人をくらふ、現世には纏縛となり、後には怨敵となるとのたまへり、心地觀經の文の一の巻四丁めにとき給ふ、三世諸仏眼墮落於大地法界諸女人永無成仏願とのべ給へり、此文の心は、三世の諸仏の御眼は大地に墮落すと云へども、法界の女人ながく成仏の願なし、又阿 經の一の巻二十一丁にのたまはく、一見於女人永結三途業、何況於一犯定墮無間獄とのたまへり、此文の心は一度女人を見れば、長く三途の業をうく、いかにいはんや一度をかしめれば、定めて無間獄におつと云へり、法華經の五の巻にも一者不得作梵天王、二者帝釈、三者魔王、四者轉輪聖王、五者仏身とのたまへり、此文の心は女人一には梵天王となる事をえず、二には帝釈とならず、三には魔王とならず、四には轉輪聖王とならず、五には仏身とならずとのたまへり。されば女人は三世の諸仏に捨てられたり、女人の頂に鼎あり。肩に火毒のほむらあり、腹に剣ほくのつるぎの山あり、かくのごとくの不清惡業のとがを心中につゝめるによつて、女人をば深く忌まれけるものと説きたまへり、されば女体の御門は此涅槃經を御覽じて不当の仏の仰せかな、さながら女人の惡名をたて給ふ事の口惜しさよとて、涅槃經四十巻をみな焼きはらはせ給ひたりしを、御子の徳一大師碩学にて

わたらせ給ひしかば、空に覚えて書き留め、日本国にひろめ給ひし御事也、女人の業障の深き事かくのごとし、浅ましきことかぎり無しといへども、阿彌陀如来広大無辺の御慈悲にて、四十八願の中に第三十五の願にのたまはく、設我得仏十方無量不可思議諸佛世界其有女人聞我名号觀喜信樂發菩提心厭惡女身壽終之後復為女像不取正覺と説きたまへり、此願の心は、たとへわれ仏をえたらんに、十方無量の不可思議諸佛の世界に、それ女人ありて我名号をきゝて喜びたのしみ、菩提心をおこして女身をいとひにくまんに、命終りて後、又女像とならば正覺をとらじと誓ひ給へり、まさに知るべし、又女人成仏の願成就の文に云く、すなはち彌陀の本願力によるがゆゑに女人仏の名号を称して、まさしく命終の時、女身を転じて男子となる事をえて、彌陀の御手をさづけ菩提身をたすけ、法華の上にまします仏にしたがひて、往生して仏の大会に入りて、無生忍を証語す、又一切の女人もし彌陀の名願によらずは、千劫万劫恒沙劫をふるとも、つひに女身を転ずる事を得べからず、まして知るべし、いまだ俗ありて女人浄土に生まるゝ事をえずといはゞ、よく忌惡すべし、信ずべからず、女性たちよく此法を聞きたもち念仏申させ給ふべし、油断して地獄へおちさせ給ひ候ふな、それ女人の惡名をたて申すにはあらず、又天女成仏經には女人の方人をせられて候ふ、天なくして雨ふらず、地なくして草木生ひず、天と地とのめぐみによりて、草木は出生し候へば、それにたがはず、女人は三千世界の仏の蔵とこそ説き給ひて候へ、女人なからんにはいかでか仏のたねをばつぐべく候ふ、されば文には女人誹謗罪誹謗断とて、女人一人を演じつれば、諸仏を謗ずるとも説けり、たのもしきかなや。又觀無量壽經に三輩をわけられたり、上輩の念仏は誦誦大乘解第一義如法如説に、勇猛精進にして一日七日一心不乱に申す念仏は、大乘の念仏ときこえて候ふ、中輩の念仏は戒を保ち時をして申す念仏にて候ふ、下輩の念仏は阿彌陀仏の仰せに、そもく人ととなるは種々の不清をあつめて人とはなれる物なり、身のきたなきこと大海をかたづけず、くぐと云ふとも、いかでかきよくなるべき、阿彌陀仏の誓には不論不清、不論心乱、他念仏陀則得往生とのべ給ふ。されば汚穢不清をもきはらず、行住座臥時諸縁とて、ねてもさめても他事なく念仏をだに申せば、三輩中輩をこえて、浄土の往生をとげんこと何のうたがひ候ふべき、又念仏誹謗の者は阿鼻大城におちて、長く苦惱をうく、かへすくも諸法を謗することなかれと、迦陵頻の御声にて、午の時より説法始まりて酉の時まで御説法ある。近きも遠

きも御声の及ばずと云ふ事なし。聴聞の人々も袖をぬらさぬはなかりけり。鐘うち鳴らしゆすよりおりさせ給へば、公卿殿上人輿車よりおり、又武士等は狩衣束帯の袖を合せて、各礼拝したてまつる処に、悪僧進み出でて聖人に申すやう、謗法の罪人は阿鼻大城に墮ちて長時に苦惱を受くると説き給へるは、いづれの経の文ぞやと問ふ。聖人とりあへず大仏頂経の文なりと答へ給へば、此僧合掌して後生たすけ給へと、聖人を礼したてまつれば、粗鼻うそやきてぞ見えたまひける。さて其後あぶらくらに入れ奉り、もてなしたてまつる。御布施には大將殿より御馬六百疋、北の御方よりは長持三百枝、その外大名達御馬十疋二十疋、長持十枝二十枝まゐらせらるれば、いくらといふ数をしらす。されども奈良へみな修理料に参らせられて、聖人の御徳分には一つもめされ給はず。さてしもあるべき御事ならねば、いそぎ大將殿関東へ下向ましゝき。秘すべしゝ。

享録四年二月二日書写畢

## 玉水物語

上

中比の事にや有りけむ、鳥羽の辺に高柳の宰相と申す人坐せしが、三十に余り給ふまで御子もなく、如何なればとて欺き給ひて、神仏に祈り申し給ひければ、其の効験にや北の方只ならず見へさせ給ふ、御悦び限りなかりけり。さて神無月の初めつ方に、姫君出で来給ひけり。手の上の玉と傳き育て奉り給ふ。三十二相の御容めでたく、誠に傍光る許りに見え給ふ。斯くて年月重なる俣に十四五に成らせ給ふ。吹く風立つ波につけても、心をかけて歌をよみ詩を詠じ、何となき御遊びにても類有り難く坐しければ、父母なべてならず思し傳きて、なほざりばかりは痛はしく思召し、御宮仕へにや出し立てむと思す。御心様優にやさしく坐せば、前栽の花ども吹き乱れ、四方の山辺の霞み渡りいと面白きを、或夕暮に御乳母子の月ささと申す女房只独り御供にて花園へ立出で給ひつ

ゝ、花に戯れ、何心なく遊び給へり。此の辺には狐と申す者多く住みける処なり。折節此の花園に狐一つ侍りしが、姫君を見奉り、あな美しの御姿や、せめて時々も斯かる御有様を、余所にても見奉らばやと思ひて、木陰に立隠れて、静心なく思ひ奉りけるこそ浅ましけれ。姫君帰らせ給ひぬれば、狐も斯くてあるべき事ならずと思ひて、我が塚へぞ帰りける。熟々と座禅して身の有様を観ずるに、我前の世如何なる罪の報いにて、斯かる獣と生れけむ、美しき人を見染め奉りて、及ばぬ恋路に身を、徒らに消え失せなむこそ怨めしけれと打案じ、潸然と打泣きて伏し思ひける程に、よきに化けて此の姫君に逢ひ奉らばやと思ひけるが、又打返し思ふ様、我姫君に逢ひ奉らば、必ず御身徒らに成り給ひぬべし、父母の御欺きと言ひ世に類なき御有様なるを、徒らに為し奉らむこと御痛はしく、兎や角やと思ひ乱れて、明し暮しけるほどに、餌食をも服せねば、身も疲れてぞ伏し暮しける。もしや見奉ると、彼の花園に蹠踵ひ出づれば人に見られ、或は飛礫を負ひ、或はじんどうを射掛けられ、いと心焦しけるこそあはれなれ。中々に露霜とも消えやらぬ命、物憂く思ひけるが、如何にして御側近く参りて、朝夕見奉り心を慰めばやと思ひ廻して、或在家の許に男許り数多ありて、女子を持たで、多き子供の中に一人女ならましかばと、朝夕歎くを便りにて年十四五の容鮮やかなる女に化けて、彼の家に行き、「我は西の京の辺に在りし者なり、無縁の身となり頼む方なき儘に、足に任せて是れまで迷ひ出でぬれど、行くべき方も覚えねば頼み奉らむ。」といふ。主の女房打見て、「痛はしや尋常人ならぬ御姿にて、如何にして是れまで迷ひ出でけむ、同じくは我を親と思ひ給へ、男は数多候へども女子を持たねば朝夕ほしきに。」といふ。「左様の事こそ嬉しけれ、何処を指して行くべき方も侍らず。」といへば、斜ならず喜びて愛しみ置き奉る。如何にしてさも有らむ人に見せ奉らばやと咎みける。されど此の娘つやゝ打解くる気色も無く、折々は打泣きなどし給ふ故、「もし見給ふ君など候はば、我に隠さず語り給へ。」と慰めければ、ゆめ／＼左様の事は侍らず、憂き身のめざましく覚えて斯く結ばれたる様なれば、人に見ゆる事などは思ひも寄らず、唯美しからむ姫君などの御側に侍りて、御宮仕へ申し度侍るなり。「と言へば、」よき所へ有り付き奉らばや。」とこそ常に申せども、さも思召さば、兎も角も御心には違ひ候まじ。高柳殿の姫君こそ優にやさしく坐せば、妾が妹、この御所に御ひてうにて候へば、聞きてこそ申さめ、何事も心易く思されむ事は語り給へ、違へ奉らじ。」と言へば最



嬉しと思ひたり。

斯く語らふ所に、彼の者来りければ、此の由を語れば、其の様をこそ申さめとて、立歸り御乳母に伺へば、「さらば唯やがて参らせよ。」と言ふ。悦びて引装ひ参りぬ。見様容貌美しかりければ、姫君も悦ばせ給ひて、名をば玉水の前と付け給ふ。何彼につけても優にやさしき風情して、姫君の御遊び、御側に朝夕馴れ仕まつり、御手水参らせ供御参らせ、月さえと同じく御衣の下に臥し、立去る事なく候ひける。御庭に犬などい参りければ、此の人顔の色違ひ、身の毛一つ立になるやうにて、物も食ひ得ず、けしからぬ風情なれば、御心苦しく思されて、御所中に犬を置かせ給はず。余りけしからぬ物怖ぢかな、此の人の御覚えの程の御羨ましきよなど、傍には嫉む人もあるべし。斯くて過ぎ行く程に、五月半の頃、殊更月も隈なき夜、姫君簾の際近くゐざらせ給ひて、打眺め給ひけるに、時鳥おとづれて過ぎければ、

郭公雲居のよそに音をぞ鳴く

と仰せければ、玉水取敢へず、

ふかき思ひのたくひなるらむ

やがてわが心の内と口々申しければ、何事にか有らむ心の中こそゆかしけれ、恋とやらむか、又人に恨むる心などが、怪しくこそとて、

さみだれの程は雪の郭公たがおもひねの色をしるらむ

玉水やがて、

心から雲ぬを出でて郭公いつを限りと音をや鳴くらむ

月さえ、

覺束な山の端いつる月よりも猶鳴きわたる鳥の一声

など言ひかはし、夜も更けぬれば、内へ入らせ給ひぬ。されども玉水は月残り多く侍るとて残り居て、来し方行く未打案じ、さても我はいつを限りに何となるべき身の果てぞと、漫に涙漏れ出でて、袖も絞るばかりに成りにければ、

思ひきや稲荷の山をよそに見て雲ぬはるかか月を見るときは

心から雲ぬを出でて望月の袂に影をさすよしもがな

心から恋の涙をせきとめて身のつき沈みむことぞよしなき

最久しく帰らねば、月さえ心もなくて立歸るに、かく吟むを聞きて怪しく覺ゆれば、

よそにても哀れをぞ聞く誰ゆゑに恋の涙に身をしづむらむ

ととむらへば、姫君聞き給ひ、

おほかたの哀れは誰もしらずやと身には習はぬ恋路なりとも

はや夜も更けぬらむ、入らせ給へと言へば、泣く／＼歸りて、月さえ諸共、姫君に添ひ臥し奉れども、思ふ心のもとと言ひ現はさねばにや微睡まず。

斯くて月も立ち行く程に八月許りに成りぬ。初鴈音の告げ渡る声も身に染む心地して、哀れを訪ふと覚えたり。養母の方よりは絶えず訪れ、誠の親よりも愛しく当りけり。常の衣裳の外にも鮮かに目易く仕立ておこせけり。文にも、「なごや時々は出でて慰めたまはぬ、我はかく夜の寢覚にも、生まぬ親なれば、みやうとくのみ持成し給ふ。」と恨みければ、「我も覺束ながら過ぐる朝の心には思はざらなむ、誠の親ならねばと、承るこそ怪しけれ。」など言ひて返事をしければ、是れを見て、げに／＼さぞ有らむ理ぞかして打泣きぬ。去る程に三年と申す神無月に、姫君の親しき人々数多寄り集まり給ひて、紅葉合あるべしと定めさせ給ふ。明日にもなりぬれば、色美しく葉数多有らむ紅葉を

尋ね侍るに、此の玉水夜更けて打紛れ出で、元の姿になり、鳥羽殿の南面の塚に、兄弟などある処へ行きたりければ、見付けて斜ならず悦び、「如何にや何処より来れるぞ、失せぬると覚えて後の営みをこそ此の三年はしつれ。」此の程御所の辺に候なり、静かに語り申すべし、さては明日一大事の用ありて紅葉尋ね来りたり各如何にもして尋ねて給べ。」と言ひければ、「所や有る、易き事かな。」といふ。「嬉しくもあるかな、さらば高柳の御所南の対の縁に差置き給へ。」といへば、「易き事なり、さりながら大や有る。」と問ふ。「犬は侍らず、心安く在せ。」など言ひ置きて帰りぬ。姫君、月さえは、「例ならず何方へ出で給ひしぞ。」といへば、打笑ひ、怪しき者に恋ひ契りて出で逢ひつるなど戯れければ、「実にさや有りつらむ、いと久しかりし。」などいへば姫君、「さもあらば如何に憎からむ、移れば変わる習ひなれば、我は必ず思ひ捨てられむ。」と戯れ給へば、悉く嬉しいみじと思ひて、「あな傍痛や、世にあるまじき人と云ふとも、御側を立離れて他人に添ふべき心地はし侍らむものを。」と申せば、「知れ難き事。」と打笑み給へるを見奉れば、身に染む心地していと味気なし。さて彼の兄弟は、山へ入りて紅葉尋ねけり。中にもさし次の弟、五寸許りなる枝に、色は五色にて、葉毎に法華經の文字を摺りたり。鮮かに磨き付けたる如くなるを、明日の午の時に玉水出でて見れば、「枝差の斯かる物有りけるや、まだ見ず。」とて、愛で悦び給ふこと限りなし。「外よりも数多奉らせ給へども是れに並びや有るべき。さて面々に紅葉に歌をつけらるべし。」と有りしかば、「同じくば歌を玉水よみて付け給へ。」と言ふ。「唯遊ばしたらむこそ。」と言へど強ひて言へば、「さらば書き出でて見せ奉らばや、少しも宜しげならむを取り直し給はなむ。」とて、筆とり上げすさみ居たり。殿も渡り給ひて、紅葉を御覧じ愛でて帰り給へば、又母上ぞ渡り給へる。

さて玉水は歌を書き出でて姫君に奉る。何れも面白しとて、五つの枝に五首歌を付けらる。青かりし枝に、

もみぢ葉の今はみどりに成りにけり幾千代までも尽きぬ例に

黄なる葉に、

黄なるまで紅葉の色は移るなり我れ人かくは心かはらじ

赤き葉に、

くれなるに幾しほまでか染めつらむ色の深きはたくひあらじを

白き葉に、

野辺の色みな白妙に成りぬとも此の紅葉ばの色はかはらじ

紫の葉に、

幾しほに染めかへしてか紫の四方の梢を染めわたすらむ

とむ書き付けられける。残り姫君書かせ給ふ。扱其の日になりて合はせ給へば、色々心を尽して読みいで、えならぬ枝色を調へ給へども、姫君のに並びものなかりけり。五度合はせ給へども、度毎に姫君ぞ勝たせ給ひける。此の事隠れなく、内にも聞召され、彼の紅葉御召しあり。惜しみ給ふべきかはとて聽て参らせ給ひければ、帝觀覽坐して、聽て其の姫君参らせ給ふべき由、時の閑白に仰せ下されければ、「定めて参らせ給はむ事は悦びなるべけれど、宰相微かなる住居にて候へば、出し立てむ事難くや。」と申させ給へば、聽て心得させ給ひて三箇所を賜ひにけり。かねて願ひし事なるに悦び給ふ事限りなし。聽てその御言みめでたかりけり。玉水の前の御きそく類なし。津の国かく田といふ所をば玉水のけはひ所に賜ひにけり。「我が身は無縁の身なれば、只哀れをかけさせ給はむこそ嬉しう侍らめ、斯様の御事は思ひ掛け侍らず。」と度々申し返し奉れども、様々恨み仰せられければ、さらば父母悦ぶ事斜ならず。或時彼の母物怪めきて悩み渡る、多くの祈りをしけれども、月日重なる儘に重くのみ見ゆれば、おほげ子ども欺きけるに、「御所に候ひ給ふ娘に、今一度逢ひ奉らまほしう、常に恋しきを見て止みなむ。」と言ひければ、此の由かくと伝へ申しけるに、いと哀れと思ひて、暫しの暇を申して参りければ、悦ぶこと限りなし。「如何なる前の世の契りにか、唯朝夕御事のみ心苦しく、御宮仕へも何時までかと痛はしく思ひ奉る、御身故に心易く過し侍れば、有り難く嬉しく

も覚え奉る、思ひ掛けず斯かる病を受けぬれば、千に一つも助かり難し、身置き奉らむこそ悲しけれ。」とて、衰へたる手を差出して搔撫で泣きければ、此の人は物も聞えず、泣くより外の事ぞなし。側に付き添ひ給へば、残りの子共は少し暇ある心地して、此処彼処に打休む程なり。

下

此の母少しも人心地ある時は心細げなる事ども言ひ、又起ると思ふ折々は物怪めきて、現にもあらぬ風情なり。起りて又少し押鎮めて言ふやう、「我は斯かる有様なれば、遂には消え失せなむ、痛はしや御身も我世に無くなりなば、又誰をか母とも頼み給はむ、われ母の譲りにて鏡一つ持ちたり、日比命の限りと思ひしものなれば、これを形見に御覽せよ。」とて参らせけり。今は早帰り給へと勧めれど、見捨て難くて一日二日と過ぐる程に、既に三日になりけり。姫君の御方より文あり。母の悩み心苦しかるらむ、少しもよき様ならば、早く帰り給ふべし、此方の徒然思ひ遣り給へ、搔暗す心地なむすと書かせ給ひて、

年を経るは、その風にさそはれば残る梢はいかになりなむ

と遊ばしたるを、此の母少しの間心よく見奉りて、「忝くも仰せられたるかな、御宮仕へならずは、いかで世にある者とも知られ奉らむ、とにもかくにも有り難し、身より出でたる子供よりも、おろか無く思ひ奉るぞ。」と悦びけり。月さもえ細々と書きて、

初花のつばめる色のくるしきに、木葉の色をみきくに

と、斯かる事を見聞くに付けても、思ひの色は晴れやらす。御返りは、忝き御哀れみ申し尽し難う、筆にも及び難う侍るなり、心に掛らぬ折なく参らまほしう侍れども、見捨て難くてなむ、少しもよろしげならば、参りてよろづ自らこそ申し侍らめとて、

ちりぬべき老木の花の風吹けば残る梢もあらじと思ふ

月さえにも同じく書きて、

陰たのむくち木の桜朽ち果てばつばめる花の色も残らじ

など書きて参らせけり。

斯かる処に母の物怪起りければ、一所に集まりて歎くに、又少し怠りたる様にて寝たれば皆打緩み、夜更け人静まりて此の娘許り起きて居たるに、毛一条もなく禿げたる古狐一つ立寄りて見ゆ。能々見れば我が父方の伯父なり。これを追ひ退けければ、病者は微睡みけり。互に、「こは不思議なる事かな、如何に。」といふ。「我が狐われ聊かの便りによりて、この病者を親と頼む事あり、然るべくは立退きて此の苦しみを止め給へ。」と言へば、「ゆめゆめ叶ふまじき、其の故は彼の病者の父、我が頼みたる子を、さしたる咎も無きに殺したれば、などか思ひ知らせざらむ、我も此の娘を悩まし命を取りて、思ひをさせむと思ふなり。」と語る。玉水、「理なれどしゆしやうむしやくしやう化城品と名付けたり、さり乍ら業に引かれて六道に迷ふ罪によりて、元の三途に帰る事、身より出せる焔なり、我等畜類なり、未だ業因盛んなり、然りと雖も善根をもせば、など今度人体を受けざるべき、又人体は仏の骸なり、心違はずば、などかこんど仏にならざるべき、幾程あらぬ世の中に、一旦の念に引かれて、忽ち此の病者を失ひ給はば、彼の罪と言ひ、又多くの人の歎きを受け給ひなむ、何事も報いのものなれば、さあらば獵師の手にも掛り給ふか、然らずは三途に帰り給はむ事のはかなさよ、唯然るべくは立退きて助け給へ。」と言へば、古狐目を見出して申すやう、「人界に生るゝも仏の教によりてなり、然れば仏も度々現じて、忽ちに人の命をも断ち給ふ、我に起す罪ならず彼等が招く罪なれば、努々身に過失なし、終日に座禪工夫をして我が心を見るに、心に種なし理を知りて心とす、理を計つて、そこ案ずるに、起らざる念を理とす、念を払ひて功德とす、此の仇を知らずして、思はむ事は力なし、延喜の帝と申すは、未代まで忍ばれさせ給ひし帝なれども、過去の宿業によりて、無間の底に沈み給ふ。帝の皇子かふや上人とて世を背き給ひし人、御夢想の告げに随ひて、無間の底より、炭頭の如くなるを金鉢にてはさみ出し給ふとこそ申せ。斯かるめでたき御門だに前世の者をば免かれ給はず。又播磨の書写に住みける、雀の子を尋ぬ

るとて、法華經の声を聞きし故、聖武天皇の后とならせ給ひしなり。今悪念を  
払ひ菩提心を起し、十悪五逆の罪人まで導き給ふ弥陀の名号を頼み奉らば、後  
生は疑ひ有らじ、然るに汝も獸なり、我も畜類なれば、一業所感の身として、  
何れを教化すべし。」といふ。其の時若狐、「理はいと能く知り給ひて、仏の力  
にばけ給ふ謀一旦の事なり、法然上人の仰せられし事を、耳に留めて覚えきか  
むといふは、善悪を嫌はざる処なり、罪に理非は入るべからず、淨飯王の王子  
悉達太子と申せしも、王宮を出で給ひし故にこそ、今の釈迦仏とも成り給へ、  
又善悪を分け給ふはかうこそ有るべけれ、子の敵を取り給へば悪なり助け給へ  
ば善なり、爰に於いて善悪けつしやうは、是れを殺さむと思ひ給はむ念ならず  
や、爰に於いては私はぬ念なり、彼是を思ひ捨て給へば悟りなり、即身成仏こ  
そ有らまほしけれ、十悪五逆を尽して阿弥陀仏の教化を頼みたまはむ事は然る  
べからず、此の上にそれを思ひ取り給はずば力なし。」と申せば、其の時古狐  
猿眼りして打頷き、「斯かる不思議に逢ふ事前世の幸ひなり、誠に殺したれば  
とて、恋しき我が子帰るべきにあらず、今は一筋に亡き後を弔ひ給へ、我は入  
道して山深く閉ぢ籠り念仏申すべし。」とて、病者の許を立退きけり。母は娘  
の人と物語するとぞ思ひける。さて病者は心軽くなりて物など言ひ、物見入れ  
などしける由聞き、同じ畜類と言ひながら、有か見たりとて語りければ、実に  
さる事ありとて、彼の射殺しつる狐の後弔ひ、様々の孝養したり。さて玉水は  
心易く見置きて御所へぞ帰りける。

既に霜月になりぬれば、御内参りの御儀式目も驚く許りなり。女房達童三十  
人、中にも此の玉水をば中将の君になし給ひて、一の女房に定めらる。されど  
も是れを勇ましくも覺えず、常は打萎れたるを如何にと怪しみ給へば、何とな  
く風の心地など言ひ紛らはし、「いか様にも物思すらむ、か許り隔てなく思ふ  
を、などか心にこめて言ひ出で給はざるらむ、語りても慰み給へかし。」と宣  
へば打泣きて、「遂には知召さるべき事なれども、今は語り奉らじ。亡からむ  
後にも哀れとは思召し出でさせよ。」など申せば、心苦しう思す。御内参りも  
近づく儘に、玉水熟々と思ふ様、われ畜類と言ひ乍ら、近づき参りて契り奉ら  
む事は痛はしさに、只斯くながら見奉り添ひ奉るに、心を慰めつる事の果なさ  
よ、姫君の御耳へは聞かせ参らせばやと思へども、今まで知らせ奉らで思ひの  
外に恐ろしと思されむ、拙も御内参りあらば其の時こそ紛れ失せめ、わが化  
けたりし姿を今まで見つけれざりつるこそ不思議なれと思ひ廻らして、風の

心地とて我が住む局に閉ぢ籠り、初めより思ひ染め奉りし我が有様、今までの  
事を書き集め、小き箱に入れて姫君にもて参り、「何とやらむ此の頃は世の中味  
気なく、仇なる物と思ひ知られて物憂く侍れば、もし夜の間にも消え失せ侍る  
事もやと覺えて此の箱を奉る。我いか様にも成りなむ後、此の箱を御覽せよ。」  
と申して潸然と泣きければ、姫君は怪しく、「如何に思ひ給へば斯くは宣ふぞ、  
此の儘わが行先をば見届け給はまじきや。」と打怨み給へば、「御内参りにも御  
供申し奉るべけれど、もし如何なる事か有らむと心細くて是れを奉り置くなり、  
儀式の折は人目繁くて、此の箱をもえ参らせぬ事かあらむなどと思ひ奉りて。」  
など言紛らかしつゝ、「構へてく此の箱を類なく思召し、又親しく思召さる  
ゝ月さえなどにも見せさせ給ふな、様ある箱にて候へば、左右なく人に見せさ  
せ給ふまじ。中の懸子をば御年積り世を思召し放ちたらむ時明けさせ給へ。」と  
申せば打泣き給ひて、「何時までも候はむとこそ思ふに、斯く末の世の事まで  
宣へば、心元なく、最憂き心こそすれ。」と言ひながら、此の箱を受取り給ひ  
て、互に涙に咽び給ふ。月さえも参り人々忙はしげなれば、紛らかしつゝ立去  
りぬ。姫君さらぬ様にて、此の箱を引隠し給ひけり。

さて御内参りの紛れに車に乗る由にて、何処ともなく失せにけり。殿には門  
へ御供なりと思す、内には心地悪しと常に言ひしかば、里に止まりぬらむと人々  
も思ふ。姫君も歎かしく、如何もなりつるぞと心元なう思召し、「一三日過ぎて  
何方へも無しと聞えければ、親の方此処彼処尋ねさせ給へども行方も知らず。  
五日十日の程は、さりととも聞き出でむ、余所よりや帰り来むと待ち給へども見  
えねば、何処に失せぬぞ、人の隠したるかと思し給ひければ、御悦びに御心  
の内の御歎きぞ増させける。諸卿の女房達打託ち欺き合ひけり。何事につけて  
も此の人あらましかばと思しける。宰相殿は中納言にぞ成り給ひける。玉水の  
事常に名高く、いみじき事も有れば、如何に成りぬる事ぞと欺き給ふ。姫君は  
此の箱の中ゆかしく思さるれども、御門のおはします事絶えず、暇なくて明し  
暮し給ふに、或時官の庁へ御幸あり、よき暇と思召し、忍びて開けて御覽すれ  
ば、如めより終りの事を書き付けたり。こは如何になる事ぞと、御胸打騒ぎ、  
恐ろしくも哀れにも思しけり。われ故斯様に化けたりしを、遂に色にも出さで  
過ぎし事の、畜類ながら無慙さよ、覺えの志を見せつせし事の哀れさよ、難  
有き心かなと、思召し続けて打泣くみつゝ御覽すれば、此の巻物の奥に長歌を  
ぞ書き付けける。

束の間も 去り難かりし 我がすみか  
君を逢ひ見て その後は 静心なく  
あこがれて うはの空にも 迷ひつゝ  
はかなき物は 数ならぬ 憂き身なりける  
物ゆゑに すゞろに身をば つくし舟  
漕ぎ渡れども 晴れやらで 浪に漂ふ  
篠蟹の 糸筋よりも 微かにて  
過ぎし月日を 数ふれば 唯夢とのみ  
成りにけり 我が身一つは 如何にせむ  
君さへ長き 恨みをば 負ひなむ事の  
由なさよ朝 夕君を 見る事も  
身の類ぞと 慰めて 夢現とも  
別き難く 明し暮しつ 面影を  
何時の世までも 変らじと 思ひ明石の  
浦に出て 潮干の貝も 拾ふかな  
蟹の焚く藻の 夕けぶり 棚引く方も  
なつかしや 鳥伝ひして みるめ刈る  
蟹の子どもに 有らねども 乾く間もなき  
袖の上に 訪ひ来る風も ほしかねて  
靡く気色を 余所に見て 思ひ知られぬ  
身の程も 遂に甲斐なき 心地して  
たゞ一筆を すさみ置く 玉章ばかり  
身に添へて 長き思ひの しるしぞと  
常に申ふ 心あらば 後の世までの  
掛橋と なりても君を 守りてむ  
斯かる憂き身を 人知れず とぶらはしとは  
をののやま またたついなや 花に出でて  
また例なき たぐひをも 思ひ出でよの  
心にて 只書きすさむ 水茎の  
岩根をいづる 山川の 谷水よりも  
処狭き 袂の露を 君は知らじな

色に出て言はぬ思ひの哀れをも此の言の葉に思ひ知らむ

濁りなき世に君を守らむ

かやうに歌を書き奥に二首の歌を書きつけて、此の箱は人に厭かれず、年経れど添ふ人に愛を増す箱なれば奉るなり、君に添ひ参らせむ程は、此の懸子をあげさせ給ふなど申し置きつる如く、よを思召し離れむとぢめなどには、開けても御覽せさせ給へなど、細々と書いて参らせたるに、哀れ浅からず思召しける。畜類ながら斯かるやさしき心の、哀れ深き打伝への為におくなり。

## 玉虫の草紙

天地開け、伊 諾伊 冊の尊、浮橋の上にてこと始めし給ひしより、八雲立つ出雲八重垣妻ごめに、八重垣造るその八重垣をと、ながめ給ひしこのかた、矛の露国となり、恋の煙たちなびきけり。さりながら百敷の内、または柴の戸の外までも、男女夫婦の道ならずといふ事なし。過ぎ行くまゝに、このかた浅茅が末の世となりて、露の情の戯れ、鳥類畜類までも、この執心をこめられ、竹に鳴く鶯、水に住む蛙、野辺にある虫の声、みな歌にあらずといふことなし。此にちかき頃、きたいやさしき恋の道あり。頃は八月中の十日許りの頃なるに、野もせの花の色めく草の下葉に、すだく虫のその中に、白練衣の十二単に身をまとへる虫、輝く程なれば、名をば玉虫姫とぞ申しける。数々の虫共かの玉虫を見きき、同じ憂き世に生れあひても、玉むし姫と草の枕を並べ、薄が袖をも重ねばやと、思ひを懸けぬ虫ぞなき。あまり思ふも苦しきに、各玉章を通はし、歌にて心をひき見ばやと思ひけり。まづかげろふの兵衛の方よりも、葦の葉に文をかき、歌を咏みてぞ通はしける。

さてもく、いつぞや夕の月の影、ほの見えて、憧れまゐらせ、心露に乱れ候まゝ、一首贈りまゐらせ候。

数ならぬ身はかげろふの袖のうへにいつか宿さむ玉むしの君

かやうに書きて送りければ、玉虫取上げて見て、玉章歌の心は優しけれども、見るにつけても、かげるふの様なる虫に、いかで靡くべきかとて、たゞ歌の返しばかりありけり。

恥かしいつまであらぬかげるふの影にやどさじ我が袖のつゆ

次に、蛙の雅楽助方よりも、玉章歌贈りけり。

さては申すにつけても御物笑ひの種と思ひ申し候へども、夕の露のひま毎に、音のみ泣くばかりなり、御身故とてかくよめり。

かはつなく田の面の水に玉むしのひとり宿かせ秋の夕暮

かやうに遣はしければ、玉虫取上げて、なりは下種々々しくして、むとくげなれども、歌の心やさしさよとて、たゞ返歌のみかくなむ。

およびなき田のもの井戸に雨そひてなくや蛙の空音なるらむ

次に蝗の宰相の方より、

そよや吹く稲葉の風の便りにて、一筆伝へまゐらせ候、御面影身につち添ひて、天雲の上の空なる恋ゆゑに、うちまどろまむひまもなく、心つくしにゆく船の、よるべも知らぬ思ひにてこそ候へば、かくなむ、

秋の田の穂の上てらす稲妻の光のうちもわれになびけよ

玉むしこれを見て、あれが文のかきやう、歌のよみやう、やさしそよとて、

たのめとて霜おく野辺の叢薄ひとり残らむ秋の未まで

次に鈴虫の三位の中將の方より、

さてもく宮城野にて、秋の萩の陰より見初めまゐらせ、しのぶもぢずり誰が故に、いつまで袖しぼりなむ

おもひわびひとりふる野に鈴虫の啼きもやあかす秋の夜なく

かやうにかきて贈りければ、姫君御覽じて、やさしの事やとて、返歌ありけり。

すゞ虫のすゞろに物をおもふとて及ばぬ野辺に心かくるな

次に、ひぐらし山陰の方より、

うつせみのもぬけに一首贈りまゐらせ候。

いつもたゞひぐらしのおく山陰をひと方ならず問ふ人もなし

玉虫御返歌ありけり。

よそまでも夜は明けがたし日ぐらしの住む山陰に秋の来つらめ

この御返しを見て、さてははや契らむこともいと難がるべしと、思ひに沈み、朝の露とぞ消えにける。

其の後蟬の左大臣殿より、紅の花にふみかきそへて贈りけり。

過ぎにし頃、姫君をひと目見まゐらせ候より、心空にあこがれて、有明のつれなき命もはや消えまゐらせ候。とて、一首かくなむ、

空蟬のもぬけの衣脱ぎおくぞたゞ君ゆゑとおもふ夜もなしたまむし御覽じて、いと心細き様より、かの君に心はより候へども、人目の闇のはづかしければ、たゞ返しばかりありけり。

我もたゞ心はおなじ思へどもまた来む春をしばし待て君

こゝに、いは虫のへほ入道、心に思ふやう、年よりといひ、しかも入道やうして、若き姫君の方へ玉章を贈らむこと恥かしくは思へども、恋のならひは、縁にまかせてある習ひなれば、かくのみ思ひ立ち候事も、前の世の縁ぞかしく

て、文を通はす。

おそれなる申し事に候へども、此の道には、高きも賤しきも、老いたるも若きも、思ひ惑へる事はなし。かく申す入道に御摩き候へ、一は御利益、二には人の思ひをかり候へば、末の世の障りとなるべし。昔志賀寺の上人は、八十三の歳御息所を見せ給ひてより、恋となり、御手を執りたまひて、読み給ふと聞く。「初春の初音のけふの玉は、き手にとるからにゆらぐたまの緒」とあそばし、二条の后へ贈りたまへば、やがて御返歌に、「いざさらば眞の道にして承る。姫君の御なびき候はずは、数多の虫をたのみ、押寄せ奪ひとり申し候はむ時、われら怨みたまふなよとて、一首かくなむ、

いほ虫のいふこと聞かぬ玉虫はいかなる鳥の餌ともなれかし

姫君このよし御覽じて、あはれ女の身ほど哀れなる事はよもあらじ、あのやうなる、いほ虫入道などにさへ、玉章を得ることうさつらして衣引きまというち臥したまふ。御乳母小蝶の前申しけるは、「情はきはなき御事にて候。あの歌にもよみ給ふ、

なさけには賤しき袖もなきものをもらさで宿れ衣半の月かけ

と候へば、御摩きの御返しは思召しより給はずとも、歌の返しばかり。「と申しければ、実によと思ひ、むしんにはおもへども、さらば返歌ばかりとて、かくなむ、

いかにたゞおどすときかじいほ虫のはいとるまでに我を思ふか

いほむし、かの御返歌を見て、おどしそんじけりとして、其の仮にやみにけりとかや。

次にきりぐすの帥のすけ方より、文をまゐらせ候。

いつぞや垣ほのひまより、燈火のかけほのくくと見せまゐらせ候後は、明けぬ暮れぬ尽きせぬ思ひ深く候まゝ、一筆まゐらせ候となむ、

きりぐすひとり啼くなる秋の夜の長きおもひを問ふ人もなし

姫君御覽じて、文歌の心もちやさしくは候へども、せいちひさく極めて声高きものなりとて、たゞ御かへしばかりなり。

きりぐすいたくなわびそうき秋の思ひは我もおなじ心を

次に、松虫の左大臣殿の方より、玉章を通はしたまひけり。

初秋風を便りにて、心そらにあこがれて、雲ゆく月の御面影、身にうちそひて、今更忘れやらぬ恋草の身もうは枯れの野辺の露、消ゆるとすれば天雲の、晴るゝひまなく思へども、いつかは君をみよしのの、花の匂ひをわが袖にうつしもやせむと、心のみはや五月雨の、夜なぐの榻の端書数へつゝ、九十九夜まで通ひつゝ、一夜をまたで死したりける、人の心も知られけり。たゞ悔しきは錦木の、朽ちも果てなむ夕暮の、くれぐれおもひ参らせ候へども、御面影忘れやられで、一首かくなむ、

わが恋は難波の浦の海人ごろもしほたれのみにぬるゝ袖かな

玉虫姫御覽じて、さてもくやさしき文の書きやつかな、古今、万葉、伊勢物語、源氏、狭衣の御面影、今のやつに見えまゐらせ候、これほど心の細き君に、さのみつれなかるまじとて返歌あり、

人もこそ心つよくもたまかづら暮るゝ夕をわれもまたなむ

とありければ、松虫なのめならず喜び、比翼連理の契り、偕老同穴のかたからひ浅からずと見えたりける。

其の後養虫の方より、

身づから参り候て申したうは候へども、一しやつたゞ一の身に候まゝ、余所の御目もはづかしくして、まじつ文にて申しまゐらせ候。

数ならぬみのむしなれどたまむしと一夜の枕並べてもがな

姫君聞しめされ、古のひとりある身なりとも、あれ体のものをとりあげ、再度いふことなかれ、おつのはじめ、岩のものいふ世の中に、人の耳に入りなば、無き名の立たむこと口惜しさよとて、遂に返事もなし。

その後、又此にこえむしとて、あけくれ春秋のこえの中にすむ虫、心に思ふやう、なさはけ人によらずあるものなり。其の上わが名も世の中の人をこえむしなればとて、いかでか玉虫姫もなびかざるべきとて、墨すりながし、筆にそめ、頃は秋の中ばの事なるに、薄様に紅葉重ひきかさね、

はつのに薄ほのめきて、風を便りながら一筆まゐらせ候。雲のよそなる人故に海士小舟こがれて物を思ふかや、小夜千鳥ひとり枕のさびしきに、起臥の涙の床にうきぬべし、かやうの心をも御慰めたまひなば、さこそ嬉しくおもひ参らせ候とて、かずくゝのむしに御なびきたまはぬに、いかゞとはおもへども、一首かくなむ、

かずくゝの虫に心のおとらめやこのひめ君を我もこえむし

玉虫姫御覽じて、こは如何に、あけくれこえの中に住居する虫の身として、おもひをかくる無念さよ。さりながらあまり心つきなきとて返しばかり、

世の中の人の噂の恋をのみ田の面のこえとおもふあはれさ

いかに平生一人の時も、御身のやうなる人に、おもひかけらるべきとは知らず、今ははやひとりならぬ身なるに、玉章たまはり候事不思議におもひ候。この水茎をば置きて殿に見せまゐらせむとて、便をかへしけり。

さて其の後のこりの虫ども、はや人のもとに御出でわたらせたまふと聞く程に、水き歌がよはし候は口惜しとて、おのくゝ已みにけり。末の世なれど、誰かは虫と生れ来て、秋の思ひの音をやなくらむとおもひつゞけて、一首かくなむ、

恋ひこふる虫もつき世の人も皆のこらむものか秋の夕ぐれ

かやうに心なき虫までも、つき世の中の思出に、恋を心につけ、文、玉章を書きかよはし、歌をよみ、互になさを忘れじと契ることの葉も、たゞ人の心を和らげ、末もめでたかるべきまゝ、かやうにかきとゞめおくなり。

## 俵藤太物語

上

朱雀院の御時に、俵藤太秀郷と申して名高き勇士侍り。此の人は昔大職冠鎌足の大臣の御裔、安部の左大臣魚名公より五代の孫、従五位の上村雄朝臣の嫡男也。村雄朝臣田原の里に住しけり。然るに秀郷十四歳に成りしかば、初冠をさせて其の名を田原藤太とぞよばれけり。若輩の比より朝家に召され、宮仕へし侍ること年久し。或時秀郷父の許に行きければ、村雄朝臣いつよりも心よげにて秀郷に対面し、御酒を様々に羞めて申されけるは、「人の親の身として、我が子をいみじく申す事は、嗚呼がましくや侍らむ、さりながら御事は世の人の子に勝れて、行儀礼配ゆゝしく見え給ふものかな、如何様に御事は、先祖の誉れを継ぎ給ふべき人とこそ見れ、それにつき我が家に鎌足の大臣より相伝し来りし霊剣あり、我老耄の身として、従へ持つべきに侍らじ、只今御辺に譲り侍るべし、此の剣を持つて高名を極め給へ。」とて、三尺余りに見えたる金作りの太刀を取出して、秀郷の前に差置かれければ、秀郷此の由承り、余りの事の嬉しさに、三度戴き謹んで退出す。されば此の剣を相伝して後は愈心も勇み、何事も思ふ儘なり。打物取つても、弓を引くにも、肩を並ぶべき輩もなし。君の御為忠孝を励ます事甚だしければ、下野の国に恩賞を賜はつて、罷り下るべきにぞ定りけるこそ難有けれ。然るに其の比近江の国勢多の橋には、大蛇の横はり臥せりて、上下の貴賤行き悩むことあり。秀郷怪しく思ひて行きて見れば、誠に其の丈二十丈もや有るらむと思しき大蛇の橋の上に横はり臥せり。二つの眼の耀ける様は、天に日の並び給ふが如し。十二の角の鋭利なる事は、冬枯の森の梢に異ならず。鉄の牙上下に生ひ違ひたる中より、紅の舌を振出しけるは、焰を吐くかと怪しまる。もし世の常の人見るならば、肝魂も失ひ、其の儘倒れ



ぬべけれども、元来秀郷は大剛の男子なれば、少しも憚らず、彼の大蛇の背をむすくと掴むで彼方へ通りけり。

されども大蛇は、敢て驚く気色も無し。秀郷も後を顧みず、遙かに行き隔たりぬ。それより東海道に赴き、日も西山に入りぬれば、或宿の出居に宿られける。既に其の夜も更け行く儘に、夢も結ばぬ仮寝の枕傾けむとし給ふ所に、宿の主の申す様、「誰人にやらむ、旅人に対面申さむと申して、怪しげなる女房一人、門の辺に佇みておはします。」と申す。秀郷聞きて、「あら思ひ寄らずや、そも何処の人にてましますば、我に見参せむとは宣ふぞ、更にこそ心得ね、さりながら思召す仔細のましますばこそ、これまで御出であれ尋ね給ふべき事あらば此方へ入らせ給へ。」と有りければ、主彼の女性に斯くと申す時に、女性言ふやうは、「いや、是は苦しからず都の方の者なるが、此処にて聊か申し入るべき事有り、恐れながら是まで御出であれかし。」と申す。去る程に秀郷辞退するに及ばねば、居たる所を突立つて門外に出て見てあれば、二十余りの女性只一人佇み居たり。その形貌を見るに容顔美麗にして辺も耀く程なり。髪のかゝり麗はしう、さながら此の世の人とは思はれず怪しきは限りなし。面はゆげにて、「日頃物申したりとも覚えぬ人の、夜更けて殊更尋ね給ふこそ覺束無く候へども。」と申されければ、彼の女房藤太が側に差寄り、小声に申す様、「誠に妾を見知り給はぬこそ道理なれ、我はこれ世の常の人にあらず、今日しも勢多の唐橋にて見え申せし大蛇の、変化したる女なり。」とぞ申しける。藤太此の由聞きて、さればこそと思ひ、「扱如何なる事の仔細にか、変化して来り給ふ。」と申されければ、女房申すやう、「日比は定めて聞召し及び給ふべし、妾は近江の湖に住むなり、昔久方の天の道開けあらがねの土固まりて、この秋津洲の国定まりし時より、かの湖水に居を占め、七度まで桑原となりしにも形貌を人に見せず、然る所に人皇四十四代に當つて、元正天皇と申す帝の御時に、日本第二のぬんこの神、彼の湖水の辺三上の嶽に天降らせ給ふ、それよりをちつかた、かの山に百足といふもの出で来て、野山の獸、江河の鱗を食する事年久し、これに妾が類度々彼に服せられ、三熱の苦しみの上に、愁歎の涙乾くひまなし、如何にもしてこの敵を亡ぼし、安全の古へに為さばやと許り、事を廻らすと雖も、妾が類としてたやすく平らげむ事叶ひ難し、若し人間に然るべき器量の人ましますば、因み縁りて頼み侍らばやと思ひ、勢多の橋に横はつて往来の人を窺ひに、遂に近辺へ近づく者もなし。斯かる処に今日の御辺の御振

舞誠に堪へ難き御心根かな、此の上はかの敵を亡ぼさむ人は御身に限りて有るべからすと、頼み申して来りたり、我が国の安危は御言葉によるべし。」とて、誠に余儀無き有様なり。

藤太此の由を熟々と聞き侍りて、扱も難儀の事かな、世の常ならぬ物の頼みて来りしを違変するも臆けり、又大事を仕損じたらむは、先祖の名折末代の恥辱なるべし。さりながら我が頼む神の恵みのましますばこそ、日本六十余州に抽んで我を目当てて来るらめ、就中龍宮と和国とは金胎西部の国なれば、天照大神も本地を大日の尊像にかくし、垂跡を蒼海の龍神に現はし給へりと承り及ぶ時は、異議に及ぶまじ。と思ひ定めければ、「時刻を廻らさず今夜の中に罷りて、かの敵を亡ぼし侍るべし。」と申しければ、女房斜に悦びて掻消すやうに失せにけり。さるほどに藤太は約束の時を違へじと、重代の太刀を佩ぎ、一生身を離たず持ちたりし重藤の弓の五人張ありけるに閑弦かけて挟み、十五束三伏ある三年竹の大矢の、鏃半過ぎたるを三筋手挟んで、勢多をさして急ぎけり。湖水の汀に打臨みて三上の山を眺むれば、稲光すること頻りなり。さればこそ件の化物来るにこそと守り居ける所に、暫く有つて雨風夥しくする程に、比良の高嶺の方よりも、松明三三千余り焚き上げて三上の動く如くに動揺して来る事あり。山を動かし谷を響かす音は、百千万の雷もかくやらむ、恐ろしななどは計りなし。されども藤太は少しも騒がず、龍宮の敵といふはこれならむと思ひ定めて件の弓矢を差加へ、化物の近づくを待つ程に、矢頃にもなりしかば、飽くまで引き、眉間の真中と思しき所を射たりしに、その手心へ鉄の板などを射るやうに聞えて、箭を返して立たざりければ、安からず思ひて、又二の矢を取つて番ひ、折れし矢壺を心掛け、忘るゝ許り引絞りて射たりけるが、此の矢も又踊り返つて、身には少しも立たざりけり。只三筋持つたる矢を二筋は射損じたり。頼む処は只一筋、これを射損じては如何せむと、とりとりに思ひ廻らしつゝ、此の度の鏃には唾を吐き掛け打番ひ、南無八幡大菩薩と心中に祈念して、又同じ矢壺と心掛け、よつびいてひよつと放ちければ、手心へしてはたと中ると覚えしより、二三千見えつる松明一度にはつと消え、百千万の雷の音も鳴り止みけり。扱は化物は滅したる事疑ひなしと思ひ、下部共に松明点させ、化物をよく見れば紛ふべくもなき百足なり。二三千の松明と見えしは足にてやあるらむ頭は牛鬼の如くにて其の形大なる事譬へむ方もなし。件の矢は眉間の只中を通つて喉の下まで抜け通りけり。急所なれば理と言ひなが

ら、斯程の大きな化物一筋通る矢に痛み滅びける弓勢の程こそゆゝしけれ。さる程に初め二筋の矢は鉄を射る如くにて立たず、後の矢の通りし事は唾を鏝に塗りたる故なり。唾は総じて百足の毒なればなり。日比勢ひを振りし物なれば、尚も仇をなす事もやとて、件の百足をはずたく／＼に切り捨て、湖水にこそは流されたれ。藤太は宿所に帰り給ひけり。明の夜又夕への女性来りけり。此の度すぐに出居まで入りて、「藤太殿に見参せむ。」と言ふ。藤太やがて出で会ひ対面しければ、女房うらやかなる声にて、「扱々貴方の勇力に日比の敵を平らげ、安全の代となし給ふこそ返す／＼も神妙なり、悦び身に余りて侍れば恩を報するに物なし、せめては私に持つ所の物にても、先づ／＼進らせむと思ひて来りたり。」とて、藤太が前に据ゑ並べたる物を見れば、巻絹二つ、首結つたる俵、赤銅の鍋一つぞ候へける。田原藤太は此の由を見るよりも、「誠に難有き御志かな、然れば今度の御事はみやつの方便によつて高名を極め候へば、御身の悦びは申すに及ばず、我等の家の面目何事かこれに若かむや、其の上斯様に御宝物賜はり候事、悦びの中の悦びにて侍る。」と色代して申されければ、さて女房も心よげにて、「さらば先づ今宵は帰り侍るべし、返す／＼も今度の悦び、我が身一人に比へ難し、千万人の為に宜しければ、重ねて其の徳を報じ申さむ。」とて、女房は何地ともなく帰りけり。秀郷件の女房に得たりし巻絹を取出し衣裳に仕立たる処に、裁てども／＼尽きず。又米の俵を開きつゝ米を取出すに、これも遂に尽きざり。さてこそ藤太をば俵藤太とは申しけり。さて又鍋の内には思ふ儘の食物沸き出でけるこそ不思議なれ。藤太は猶も奇特を見る事もこそと思ひて待つ処に、案の如く月明き夜の更け方に、件の女性訪れ給ふ。藤太急ぎ立出でて、中門へ請じつゝ、其の有様を見てあれば、美麗なること前の姿には様かはれり。伝へ承る、天竺の耶輸陀羅女、唐の西施、李夫人と申すとも、これにはいかでか及び給ふべければ、只喜見城の天女の天降り給ふかと、初めて驚く計りなり。扱も龍女宣ふ様は、「最前に申し如く、年比の大敵をたやすく亡ぼし給へる事、吾等が門眷族共に悦び侍ると雖も、数多の物の悉くこれまで現はれ来りて、御恩を報じ申さむ事、いと易き様にて障りあり、されば恐れ多き事なりといへども、君を我が故郷に具し参らせばやとの願ひにて、これまで妾は御迎への為に参りたり。とても芳志を蒙りし上は、御心を置かせ給ふまじ、疾く／＼御出であれかし。」と申しければ、藤太此の由承り、「これ程に大切に侍るなれば、よも我が身の為は悪しからじ。」と思ひ

て、彼の龍女と打連れ龍宮へと急ぎけり。

さる程に龍女は俵藤太を伴ひ、漫々として涯もなき湖水の中に入りけり。ちよかと見れども底もなく涯も見えぬ海底の、煙の波を凌げば、雲の浪静かならず、雲の波を分け行けば水輪際も極まりぬ。水輪際を打過ぎて金輪際及べば、風輪際に近くなり、風輪際をも過ぎしかば、浮世の中と思しき国に出でにけり。これなむ我が住む所と言ふにつけて見れば五じやう峙ち、七宝の宮殿黄金の楼門赫き渡れり。龍女の眷属、異形の異形の鱗は役々に従つて楼門楼閣に徘徊す。我が日域の帝城禁門警固の衛士に異ならず。藤太を伴ひし龍女の門に入らせ給へば、諸々の龍神は頭を傾け礼をなす。門より内には種々の樹木花咲き開けて、一々の花の中よりも七宝の果実満ちたる、極楽世界もかくやらむ。さて楼門を打過ぎて歩む足も香しき玉の階攀ぢ登れば、紫宸殿と思しくて、数千間に造り磨ける宮殿あり。庭には瑠璃の砂、真珠の砂、際もなく撒き満てり。黄金の柱、玉の鏡、七宝の欄干玉の整温かなり。御殿の綺麗さは、莊嚴は目に見る事は申すに及ばず、曾て耳にも聞き及ばず。龍女藤太の袖を控へ、神殿の真中に玉の曲を構へて、是へと云つて据ゑ置かる。暫くあつて音楽を奏する事あり。其の後八大龍王の第一娑伽羅龍王、八万四千の眷属を引連れ、玉座に直り給ふ。龍女も同じく玉座に直り給ふ。玉座に定まつて互の一礼事濃やかなり。時にさうくわんの龍女百味の珍膳を捧げ出る。龍女の御前に据ゑ、其の次には藤太、其の次には龍女に据ゑたり。其の飲食世の常ならず、服するに心よく、香しき事類なし。暫し有りて又金の盤に、沃の杯を据ゑ、銀の銚子に、天のこんずい盛りて出でたり。之も先づ龍王の飲み初め給ふ事三度、其の後藤太の前に持ちて参る。藤太も同じく三度受けた。其の味ひ天の甘露なれば申すにや及ばず、ふらんうつゝらが八万歳を経たりしも、此の酒の徳にこそ有りつらめと、いと有り難くぞ思はれける。酒宴の儀式日本には様変りて杯も廻らさず、思ひざしもなければ、只心のゆく程さし受け／＼飲みけるなり。山海の珍菓を蓬菜の如くに積み上げて饗応し傳きける上に、様々の引出物をせられけるこそゆゝしけれ。藤太心に思ひけるは、「扱も斯程の楽しみは大梵皇帝の栄華と申すとも是れにや及ぶべき、斯程有り難き国土にも苦は侍るか。」と問ひ給へば、其の時龍王の御説には、「中々の事申すにや及ぶ、天上の五衰、人間の八苦、龍宮の三熱とて、何れも苦のなき国は無し、就中此の国に年比重き苦患の侍りしを、御辺此の度神変を振り容易く滅亡し給ひける事、仏神の御助

けに等しく有り難く覚え侍るなり、一死万生の悦びとは、然しながら是をぞ申すべき、この御恩は報じても報じ尽し難ければ、未来永々に限るまじ、御身の子孫のために、必ず恩を謝すべし。」と宣ひて、金札の鎧、同じく太刀一口取添へ、藤太に与へ給ふ。此の鎧を召し、此の剣を持つて朝敵を滅ぼし、將軍に任じ給ふべし。又赤銅の釣鐘一つ取出させ、此の突鐘と申すは昔大聖釈迦如来中天竺に出世し給ふ時、須達長者と申す人、祇園精舎を造りて仏に供養し奉りし時、無常院の鐘の音をば写したる鐘なれば、諸行無常と響くなり。此の鐘の声を聞く時は、無明煩惱常に消滅し、菩提の岸に到るなり。斯かる不思議の重宝なれば、此の国に星霜年久しく保つと言へども、此の度の持物にこれも同じく奉る日本国の宝に為し給へ。」と宣ひければ、藤太此の由承り、「鎧剣は誠に家の宝なり、釣鐘の事はわれ武士の身なれば、さのみ望み申すには有らねども、由来を詳しく承れば、未代我が朝の宝何か是に勝らむ、これ猶以つて有り難し、さりながら斯程の重き釣鐘を、争でか賜はり帰るべしや是ぞ難儀なり。」と申されければ、其の時龍王微笑みて、「いみじくも申されたる物かな、弓矢を取つて強き者を滅ぼす手段こそ、方々には及ばずとも、斯様の物を持扱ふ事は、我が着属の自由なり心にかけ給ふ事勿れ。」とて、乃ち異類異形の鱗輩に仰せて水中に引かされけり。既に時刻も移りければ、藤太心に思はれるは、昔丹後の国与謝の郡水の江の浦島が子とやらむも、少女に遇ひて、偶然に此の常世の国に到りしに、かかる快樂に耽りつゝ往にしへ行く末を忘れて年を経る事三年なり、或る時故郷の恋しさに少女に暇を乞ひ、水江に帰りて見てあれば、住みし故郷も変り果て見知れる人も無き程に、斯く有るべしやと訝しく、能く問へば、それ昔三百余年の事なりといふ人あるに驚きて、遂に空しくなると聞く、かかる例も有るぞかし。我は殊更朝家奉公の身なり、殊更故郷に年老いたる父母のましませば、時の間も見まほしく。」と、早々御暇を申されければ、龍神は猶も名残惜しげにて、様々の興を尽して慰め給ふ。

去る程に龍女は依藤太秀郷を様々に饗心し慰め給ひける程に、漸々時刻も移りければ、藤太は大王に暇を乞ひ龍宮を出でられける。海中をあよむ事刹那の程と覚ゆれば、勢多の橋にぞ着かれける。それより父の許に行き村雄朝臣に對面して、此の程の有様始めより委しく語り給へば、父母不思議の思ひをなし、斜ならず悦び給ふ。「それに就き龍王の引出物に金作りの剣、金札の鎧、赤銅の釣鐘を賜はりたり。剣、鎧は武士の重宝なれば、未代子孫に相伝すべし、鐘

は梵せん物なれば俗の身に從へ詮もなし、三宝へ供養すべし、されば南郡へや奉らむ比叡山へや奉らむ。」と申されければ、父の朝臣此の由を聞きて、「實にも誠に一々の稀代重宝なり、中にも彼の突鐘を精舎に寄進し奉り、当來の值遇を祈らむこそ有り難けれ、諸仏菩薩の御内証何れも一体方便と言ひながら、殊更三井寺の本尊へ奉り給へ、それを如何にといふに、一つは当國なり、又彼の寺の鎮守新羅大明神と申すは弓矢神にて坐せば、子孫の武芸を祈るべし。扱又彼の寺の御本尊は弥勒薩埵にて坐す。此の度の功德によりて、五十六億七千万歳三会の暁、慈尊の出世の御時、見仏聞法の結縁となるべし、其の上南都も北嶺も突鐘既に成就せり、彼の三井寺と申すに今に覺鐘の響きもなし、速かに思ひ立ち給へ。」と有りしかば、藤太委細に承り、さらば三井寺へ参らすべしとて圍城寺へ遣はさる。千常三井寺へ参り、時の長史大僧正に謁して件の趣申しける。

僧正大いに悦び給ひて、寺中の衆徒達を会合し會議まち／＼なり。僧正仰せけるやうは「当寺は伽藍草創の後大檀那繁昌して、仏法最中の道場なれば、覺鐘の響は心に任せて、龍宮より取りて帰りし鐘なれば、天下無双の重宝、未代の名譽なり、兎角の沙汰に及ばず報謝を受け給ふべし。」とありしかば、満座の大衆一同に皆尤もと領承し、「吉日を選んで彼の釣鐘を寄進し給へ、即ち供養をなすべし。」とて千常をば返されける。藤太此の由承り唐崎の濱へ行き見れば、夜の間に龍宮より上げ給ふと思しくて、件の釣鐘坐す。是より三井寺へ引きつけむには、数多の人夫を持ちたまはずば、容易く引きつくまじと案じける処に、明日供養と相定めし今宵、海より小さき蛇来りて、彼の釣鐘の龍頭を銜へ、大講堂の大庭までいと易く引きつけて、掻消すやうに失せにけり。僧正大衆達も奇異の思ひをなし給へり。去る程に圍城寺には龍宮より釣鐘上りつく、今日供養し給ふ由兼ねて諸國に聞えしかば、近國は申すに及ばず、遠國の道俗男女、我劣らじと參詣す。都よりは殊に程近ければ、貴賤老若群集してけり。時の閑白、大臣、公卿、女院、御息所、女御、更衣に至るまで、三会の暁慈尊出世の結縁の為と思しければ、道場に車を軋らし、仏前に踵をつきて、五障の雲を霽らし給ふ。既に時刻にもなりしかば、乃ち供養の儀式嚴重也。当寺導師は当寺の長史大僧正、しゆくわんは天台座主とぞ聞えし。其の外諸寺の明德碩学数千人会座に連なり給ふ。導師高座に上り、発願の鐘打鳴らし、「秀郷の朝臣この善根に依へて、今生にては無比の楽しみを極め、来世にては上品蓮

台に生れ、乃至七世の父母速かに三界の苦輪を出でて、天上の快樂を極め、法界衆生平等利益出離生死頓生菩提。」と、回向の聽聞有り難く、皆感涙をぞ流しける。

聽聞の道俗押並べて隨喜の涙を流しけり。有り難や此の鐘と申すは、祇園精舎の無常院に響くなり、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂の四句の音を写されたれば、これを聞く人おしなべて、無明長夜の夢を醒し、発心菩提の岸に到る。誠に末代不思議の奇特なり。抑当寺草創の濫觴をとぶらへば、昔人皇三十九代天智天皇の御時、此の湖に近き大津に郡を移したまふ。爰に帝御夢の告げましますにより、皇子大友の太子に詔して、染浪や志賀の花園に靈地を占め、一の伽藍を建立し、丈六の弥勒薩埵を安置せらる、其の名を寿福寺と号す。其の後皇子大友事に遇つて崩れ給ひしかば、その御子与多王帝へ奏し申しつゝ、彼の寺を移して、父の家跡に造りつゝ、園城寺と改め給ふ。此の寺の傍に清潔なる岩井の水あり、此の水を持つて、天智、天武、持統三代の帝の御産湯に用ゐる故に御井寺とは申すなり。斯くて星霜を経る事漸く二百年に垂んたり。暗に智証大師と申して有徳碩学の名僧まします、此の人は弘法大師の御甥讚州那賀郡の住人宅成の嫡男也。竹馬の比よりも其の相世人に勝れ、両の御眼に各瞳二つぞおはします。御年十四にて都に入り給ふ。十五歳にて叡山に登り、天台座主義真和尚の門弟として髪を剃り、三密瑜伽の道場の中に、一乘円頓の教法を極め給ふ。其の後仁寿三年の秋の比、求法の為に入唐し給ふ所に、悪風俄に吹き来つて、海上の御船忽ちに覆らむとせし時、大師舷に立出でて十方を一礼し誓請を為し給へば、仏法護持の不動明王金色の身相を現じ船の舳に立ち給ふ。又新羅大明神目前船の舳に化現して、自ら舵を取り給ふ。是によつて御船恙なく明州の津につきにけり。御在唐六年の其の間、国清寺の物外、開元寺の良諳、青龍寺大徳、興善寺の智慧輪、斯かる明徳高僧に顯密の奥義を学び、玄旨を極めたまひつゝ、天安二年にいたつて御帰朝ましくけり。斯くて御法流盛んにして、一朝の綱領四海の倚頼として宝祚の護持を為し給ふ程に、帝より詔して園城寺を賜はりけり。大師園城寺に入らせ給ふ時、一人の老僧立出でて名告りて曰く、「我はこれ教待和尚と言ふ者なり、此の寺に住して大師を待つ事二百余歳。」と言ひ終つて、四至のけんけいを授けて、虚空をさして飛び去りぬ。大師は奇異の思ひをなし、此の寺に住して真言秘密の教法を行ひたまふ。大講堂は八間四面、三重一基の宝塔、七間四面の阿弥陀堂、四足一宇

の宝殿には山王権現勧請す。唐本は一切経七千余卷をば、広院にこめ給ふ。其の外今熊野御社護法善神の御拜殿、普賢堂、青龍院、尊星王塔、大法院、四面の廻廊、十二間の五輪院、総て堂舎の数は六百三十余、仏の数は二千体、清淨堅固の靈地なれば、大師此の寺の井花の水を汲んで、三部灌頂の闍伽として、慈尊三会の暁を待ちたまふ故に、三井寺とは申すとかや。斯程めでたき道場、如何なる事の仔細によつて回祿に及ぶぞといへば、彼の大師御入滅ましくつて後、御門徒の大衆、戒壇興隆の事を申し行ひしによつて、山門の大衆嗷訴をなし、柔和忍辱の衣を著し、志賀唐崎に駆け合つて、或は討たれ、組んで落ち、道場に血をあへし修羅の巷と為す事は、法滅の基と浅ましかりし事どもなり。

下

扱も依藤太秀郷は、下野の国に居住して、国中を治めしかば、其の勢近国に振りけり。斯かりける所に下総の国相馬の郡に將門といふ人あり。此の人は桓武天皇の御裔葛原の親王には四代の孫、鎮守府の將軍良將が子なり。承平五年二月伯父常陸の大椽国香を討つて勢漸く八州を呑み、相馬の郡磯橋を限りて王城を構へ、我が身自らは新皇と号し、百臣を召使ふ。舎弟御廚の三郎將頼をば下野守、同次郎大葦原の將平をば上野介、同五郎將為をば伊豆守、多治見の經明をば常陸介、藤原の春道をば上総守、藤原の興世をば安房守、文屋のよしかねをば相模守に赴任せしむ。斯くて大軍を催して帝都へ打ち上り、日本国の主となるべしとて、其の催し有りけるを、藤太秀郷熟々と聞きて、「實にも誠に大剛の勇士なる上、猛勢を靡け従へり、此の人に同心し、日本国を半分つゝ管領せばや。」と思ひて、相馬の郡に下りけり。彼処にも著きしかば、館へ人を差遣はし、「下野の国の住人依藤太秀郷御れつこの御目にかゝり申し度事侍りて、これまで参りて候。」と申しければ、禁門警固の侍某、此の由を將門に申上げけり。折節將門は髪を見出し梳りて居給ひしが、如何思しけむ取敢ず大童にて、而も白衣の儘にて中門に出合ひ、秀郷に對面し給ふ。元來藤太は目賢き人なれば、此の有様を見留めて、はかしくならずと思ふ所に、將門秀郷を饗さむ為に、椀飯を搔据ゑて是を着む。將門の食ひ給ふ御料、袴の上に落敷散りけるを自ら払ひ拭はれたり。藤太心中に思ふ様、「是は偏に卑しき民の振舞なり、さて余り軽忽至極なれば、日本の主とならむ事、思ひも寄らぬ事なるべ

し。」と、初対面に心変りし、申し語らふべき言葉も出さず、疎み果ててぞ帰れる。それよりも秀郷は夜を日について都に上り、案内申して奏聞申しける様は、「相馬の小次郎將門が叛逆を企て、東八箇国を横領し、剩へ軍勢を催し王城へ討つて上るべしと結構仕り侍るなり、速かに追討使を下さるべし、若し事緩急に及ばば、ゆゝしき朝家の御大事と罷り成り候べし、それに就き候ては、秀郷が身不肖に候へども、一方の大将をも宣下せられ候はば、兎も角も謀を廻らし、誅伐仕るべき由。」申しければ、帝大きに篤かせ給ひて、公卿殿上人を召され、「此の事は如何あるべしとの僉議まち／＼なり。其の上將門叛逆の事、東国より重ねて奏聞申しければ、「此の上は猶予すべからず、秀郷は東国の案内を存じたる者なれば、先づ彼を討手に差下され、其の後大勢の討手を遣はさるべきか。」と有りしかば、此の議尤も然るべしとて、乃ち藤太を禁庭に召され、

「今度梟賊追伐の事、然しなから汝が謀を頼み思召すなり、急ぎ罷り下りて、能く／＼手段を廻らし、逆臣を誅伐し、君豊かに民安からしめよ、軍功は功によるべし、如何様諸軍勢を重ねて後より下さるべし、汝は夜を目につぎて急ぎ下るべし。」と宣へば、藤太宣旨を承り、弓矢の面目何事か是に若かむ。」と、勇みをなして退出す。さらば時刻を廻らさず急ぎ下るべしとて、都をばまだ夜をこめて白川や、栗田口をも打過ぎて、日岡峠に差掛れば夜はほの／＼と明けにけり。四の宮河原を余所に見て、関の山路に差掛り、三井寺に参りつゝ、講堂の御前に頭を傾け、「南無や弥勒大菩薩、此度もし秀郷が敵の為に討たる／＼とも、頼みを掛けし一念の功力によりて、三悪道に返し給ふな。」と祈念し、それより新羅大明神の御前に参り、帰命頂礼大明神、願はくは藤太が謀に御力を添へられ、難なく敵を打平らげ、君も豊かに民栄え、国土安全長久の御世と為し給へ、然らば我々が一門永く当社の氏子となつて、社頭に頭を傾け奉るべし。」と、丹心の誠を抽んで暫く祈り給へば、誠に神慮も御納受まし／＼、御風なうして御前の斗帳も揺き、左右に向へる獅子狛犬も動く気色に見えければ、藤太有り難く尊く覺えて信心再拜す。それよりも藤太は駒に鞭を打つて、東国指して下りける。去る程に内裏には公卿僉議まし／＼と、「今度將門が乱逆について、神仏の擁護を頼まずば、速かに静謐すべからず。」とて、諸寺諸山の碩徳に仰せて、調伏の法行はせられ給ふべしとて、先づ天台座主法性房の阿闍梨尊意僧正は比叡山に壇を構へ、大威徳の法を行はる。金剛寺の淨藏實所は横川に壇を構へて、降三世の法を行はる。根本中堂には碩徳こんまを焚き、美

作の明達は、神宮寺に壇を構へて、四天王の法を行はる。これ皆朝家有驗碩徳なれば、行法何れも成就して、朝敵滅亡疑ひあらじと、頼もしくぞ覺えける。斯くて東国の討手には源平両家伊氏族の中に、文武二道の器量を選んで、大将軍の宣旨を下され、せつとを賜はるべしとて、先づ宇治の民部卿藤原の忠文を召さる。又鎮守府の將軍国香が嫡男上平太貞盛父がぶようをついで、殊更多勢の者なれば、副將軍にぞ召されつる。それ將軍にせつとを賜はり、外土へ赴くには、定まれる儀式の侍れば、主上南殿に出御なる。関白殿はおのの殿に出でさせ給ふ。大臣は九條殿、其の外大納言中納言八座七弁諸司八省、階に陣を張り、中儀の節会を行はれ、せつとを出さる。時に大將軍副將軍威儀を正しくして参内し、礼儀をなして是を賜はり、弓場殿の南の小門より揺いて出らるゝ、敵めしかりし有様なり。

時は朱雀院の御宇、天慶二年正月十八日巳午の刻の事なるに、今日諸大将朝敵追伐の為に、東国へ発向せらるゝ由聞えしかば、近き辺は申すにや及ぶ、遠国他国の道俗男女上下聞き及ぶに従つて、袖を連ね踵をついで、我も／＼と巷に群集す。都をこの平安城へ移されてより以来、未だ四海の激浪もなければ、武士は弓矢を知らざるが如し、今初めて干戈を動かす珍らしさに、馬、物具、太刀、刀、刃も輝くばかりに出立ちければ、何れもゆゝしき見物なり。路次に少しも障りなければ、多くの難所を馳せ越えて、やう／＼二月の初めには駿河の国清見ヶ関に著きにけり。此処にして大将忠文は暫く休らひ、富士の絶景、三保の入海、田子の浦の眺望を見物し給ふ折節、清原のしけふちといへる者つくり大將軍にて侍りしが、此の浦の有様を感じて、「漁舟の火の影はさまざまじうして波を焼く、駟路の鈴の声夜山を過ぐ。」と作られければ、大將も士卒も感涙をなして、喜びの袖を濡らしたまふ。茲に副將軍平の貞盛は、家の子郎従を近づけ、「汝等は何とか思ふ、かくて大軍と同じく路次に日数を経るならば、大事のせんには遇ふべからず、殊更此の將門は朝敵たる上に、我が身の為には親の敵なれば、自余に抽んで、勝負を決せずしては叶はぬ儀なり、彼の藤太は謀賢き者なるが、先陣に向つたり、若し彼一人の高名となしなば、我等弓矢の瑕瑾なるべし、然る時は悔ゆとも益あらじ、いざや此処を馳せ過ぎて、夜を日につぎて藤太が勢に加はらむ。」と宣へば、兵共、「実にも此の儀尤もなり。」と申して、駒を早め打ちにける程に、足柄箱根のさかしき山路を、隴月夜にたど／＼と駒に任せて急ぎけり。

去る程に平の貞盛は、官兵二千余騎を従へ、足柄箱根を夜の中に打越え、天慶九年二月十三日と申すには、武蔵野に著きにけり。こゝにして秀郷の勢と合はせて三千余騎、利根川を打渡して、明くれば二月十四日下総の国磯橋に陣を取る。将門此の由聞くよりも、我が城へ入らせては叶ふまじとて、舎弟下野守将頼、同じく大葦原の四郎将平に、上総常陸の勢四千余騎を相添へ、同じ日の午の刻に辛島の郡北山といふ所に出して陣を取らる。貞盛敵の陣に馳せ寄せ、大音揚げて申す様、「只今爰に進み出でたる兵を、如何なる者とか思ふらむ、近くは目にも見よ、遠からむ者は音にも聞け、人王五十代の帝の後胤鎮守府の將軍平の国香が一男上平太貞盛なり、梟賊の乱逆を静めむ為に、一天の君の宣旨を蒙り、只今爰に向うたり、土も木も我が大君の国なれば、何処か兇徒の住処ならむ、速かに弓を伏せ兎を脱いで、君の御方に参るべし。」と呼ばはりけり。将頼聞いて呵々と打笑ひ、「正しき兄弟を捨てて君に参らば、忠臣とや申すべき、聖代の昔は王位も重くましますらむ、当時将門の威勢に、十善の君と申すとも、争でかたきようし給ふべき、かつうは軍神の御手向に、只一矢受けて見給へ。」といふ儘に、五人張に十五束、劍のやうに磨いたるを取つて、からりと打番ひかなぐり放ちに放ちけり。胸板に弦や塞かれけむ、思ふ矢壺には中らず、貞盛が乗つたる馬の三途に中つてつと負けにけり。馬は屏風を反す如くに倒れければ、貞盛は副馬に乗つたりけり。将頼一の矢を射損じ、安からず思へば、三尺八寸の打物抜いて貞盛を目に掛けて打つて掛る。官軍には貞盛の兄弟村岡の二郎忠頼、同三郎頼高、余五の維盛維茂などとして、一人当千の兵三百余人打つて掛る。敵の方よりも将頼討たすなとて常陸守つるもち、武蔵守興世、坂上の近高以下の兵一万余騎、我もくくと攻め戦ふ程に、山河草木動揺して、ゆゝしかりし有様なり。平親王将門は此の由を聞召し、「左程の奴輩を我が領内に引入れて、駒の蹄をかけさせるこそ奇怪なれ、斯様の奴輩を一々に首切つて捨てむ。」とて、御著長を召されつゝ、葦毛の馬に打乗つて、鞭を揚げて出で給ふ、その有様殊に世の常ならず、身長は七尺に余りて、五体は悉く鉄なり、左の御眼に瞳二つあり。将門に相も変らぬ人体同じく六人あり。されば何れを将門と見分けたる者は無かりけり。將軍打つて出で給へば、将武、將為以下の軍兵一千余人前後左右に従ひ、寄手の真中へ会釈もなく打つて入る其の気色、魯陽が日を返し、項王が三將を靡けし勢ひにも越えられれば、面を合はする敵もなし。されば未の時より申の刻に及ぶまで、討たるゝ官軍八十余人、疵を蒙る

者数百人、其の外半落ち失せて、今は戦ふに術無かりしかば、貞盛は後陣を待ちて戦はむと思ひ、其の夜武蔵の国へ引退きぬ。将門は元來驕れる人なれば、官軍を欺き、何程の事か有るべしとて、そのまゝ逃ぐるをも追はず、勝鬨を作りて城の中へぞ入り給ふ。

さる程に藤太秀郷は、将門の有様を見て、是は人間の振舞には有らず、日本国を合はせて戦ふとも、此の人に勝負をせむ事は叶ふまじ、元より将門は謀短かつして智恵浅き人と聞けば如何にも方便を廻らし、たばかり討たむには如何かと思ひ、貞盛に能く言ひ合はせ、自らは只一人相馬の館へ行かれけり。将門は藤太に對面して様々に饗応さるゝ。藤太諂ひて申す様、「君の御有様を見るに、誠に四天王の御勢ひにも越え給ふ、其の上正しく葛原の親王の御子孫にて坐せば、十善の位を踏み給ふに憚りなし、一天四海を治め給はむ事程近く候べし、物の数に候はねども、此の藤太が身をも一方の御役に召使はれ候はば、弓矢の本意にて候べし。」と誠しかやにやしければ、将門心浅く悦びて申さるゝ、「殊に各の力を頼んで一天を治め侍り、先祖のぶきうを耀かさむと思ふなり、御辺とても先祖を問へば正しく淡海公の流れぞかし、国土太平の後は、君臣和合の政を為すべし。」とて、数献の興に及びけり。理なるかな、将門は我が身悉く金体なり、敵にあつて恐るゝ所無ければ、今藤太が来るをも憚り給はぬは、兎角申すに及ばず、運命の末と浅ましかりし有様なり。藤太は館の南なる寢殿を預りつゝ、朝夕許り出仕しけり。或る時藤太内侍へ出でたりしに、年の齡は二十許りと覚えし上臈の、優に艶しきが、西の對の簾中より見出し給ふ事あり。藤太此の有様を一目見参らせ、夢現やる方かたなく、そゞろに覚えければ、宿所に歸りて前後を知らず臥したりけり。是や誠に夏の虫の焰に身を焦す思ひなれば、由なかりける恋路なりと思ひ返せど、さすがに猶そよと見染めし顔容の忘れもやらず苦しければ、せめては斯くと知らせなば、死ぬる命も惜しからじと、思ひ沈みて居たりけり。爰にまた時雨と申して館より通ひ物する女房あり、秀郷の許に來りて言ふ様は、「御有様を見参らするに、徒事とも覚えず、思召す事あらば、妾に仰せられ候へかし、力に叶ふ事ならば叶へ奉るべし、御心を置かせ給ふなよ。」と懇に申すなり。藤太此の由聞きて嬉しくも問ひ寄る物かな、人の心はいさしら雪の余所にして、わり無き事を語り出し、とても叶はぬ物故に、身を亡き物と成し果てなば、後代の嘲りなるべしと思ひ廻らしけるが、さて暫し我が心誰か百年の齡を越えし人やある、露とならば閻浮の

塵、秋の鹿の笛に寄るも、妻恋ふ故ぞかし、我も此の人故と思はば、捨つる命も惜しからじと思ひ定めつゝ、起き来りて私語きけるは、「恥かしや、思ひ内にあれば色外に現はるゝとは斯様の例や申すらむ、自らが思ひの種をば如何なる事とか申すらむ、日外御前へ参りし御局の、簾中より見出されたる上臈の、御立姿を一目見しより恋の病となり、死生定めぬ我が身の風情、誰か哀れと問ふべきや。」と潸然と泣きければ、時雨此の由聞きて、偽りならぬ思ひの色哀れに思ひ、「さればこそ自らが賢くも見知り参らせたるものかな、其の御事は我が主の御乳母子にておはします小宰相の御方にてましますなり、色には人の染む事もあり、思召す言の葉あらば、一筆遊ばし給はれかし、参らせて見む。」と言へば、藤太いと嬉しくて、取る手も薫る許りなる紫の薄様に、中々言葉は無くして、恋ひ死なばやすかりぬべき露の身のあふを限りにながらへぞする

と書きて、引結びて渡しけり。時雨この玉章を取りて、小宰相の御方へ持ちて参り、「是々の物を拾ひて候、讀みて給はれ。」と申しければ、小宰相何心もなく開きて見給ひつゝ、「これは忍ぶ恋の心を詠める歌なり。」と仰せられければ、時雨さし寄りて、「何をか包み申すべき、云々の方より神前へ捧げ奉り、一筆の御返事をも伺ひて得させよと頼むに辞み難くて恐れながら捧げ奉るなり、何かは苦しう候べき、笹の小笹の露の間の御情はあれかし。」と侘づれば、女房顔打赤めて、中々物も言はず、時雨重ねて申す様、「衷心の分く方なくて恋ひ死なば、長き世の御物思ひとなるべし、天竺のじゆつばが后を恋ひ、思ひの焰に身を焦しける例思し知らずや。」と、漸づに言ひ慰むる程に、女房も流石岩木にあらねば、人の思ひの積りなば、未如何ならむと悲しくて、かの玉章の端に、一筆書きて引結びて出されたり。時雨嬉しく思ひて、やがて藤太の許に來りて渡しけり。藤太取る手もたど／＼しく開きて見れば、

人はいさかはるも知らでいかばかり心のすゑをとげて契らむ

と遊ばしけるを見て、喜ぶ事は限りなし。それより忍び／＼に参りつゝ、わりなき中とぞなりにけり。此の事深く包隠しければ、御所中に知る人更になし。去る程に平親王將門常に此の女房の扮装御覽して、御心に染みて思しけれ

ば、時々此の御局へは通せ給ふが、折節親王此の局におはしける時、秀郷参り合つたり。怪しく思つて物の隙間より窺ひ見れば、同じ男体の上臈束帯にて七人ひとしく座し給ふ。こは不思議の事かなと思つて、其の夜は帰りけり。明の夜また御局へ参りて、様々に睦まじき事も言ひかはして後、藤太、「扱も過ぎし夜この御局に人音のしけるを、誰人やらむと差寄りて、物の隙より見てあれば、さしも気高き上臈のおはしまして候は、誰人やらむ。」と問はれければ、小宰相、「それこそ將門の君にておはしませ、見紛ひたまふにや。」と宣へば、藤太重ねて申す様、「殿ならば只御一人こそおはすべけれ、同じ体配の上臈七人見えおはしつるこそ不思議なれ。」と申す時に、小宰相、「扱は未だ知召さずや、殿は世の常に越え、御形は一人なれども、御影の六体まします故に、人目には七人に見え給ふなり。」藤太奇異の思ひをなし、「さて御本体には御見知り候や。」と問はれて、女房、「夢現人に語らぬ事なれども、御身なれば申すなり、うはの空に思召し、他人に漏し給ふなよ、かの將門は御形七人にて、御振舞かはる事なしと雖も、本体には日に向ひ、燈火に向ふ時、御影映り給ふ、六体には影なし、扱又御身体悉く金なりと雖も、御耳の側に、蟀谷といふ所こそ、肉身なり。」と語らせ給へば、藤太よくよく聞きて、「天晴大事をも聞きつる物かな」是こそ誠に我が生国の大明神御託宣にてあるべし。」と、いと有難くて、そなたの方に向つて、祈念の気色をしたりけり。扱は此の後將門を、只一矢に射伏せむ事は、案の内と思ひとり、其の後は夜な／＼彼の御局へまゐるには、竊に弓と矢を挟み忍び窺ひけり。案の如く又將門彼の御局へ入らせ給うて、打解けて御物語などし給へり。藤太物の隙より能く／＼見れば、実にも六人には燈火に映る影もなし、本体には影のありと言ふについて「目を澄まし見れば、時々彼の蟀谷といふ所動きけり。藤太天晴幸がなと弓と矢を打番ひ、ひよつと射たりけり。元来秀郷は精兵の巧手、養由が百歩の芸にも越えたる上、矢頃は間近し、何かは以て射損すべき、小耳の根と思ふ所を彼方へづんと射通しければ、さしもに猛き將門も仰向に倒れて空しくなれば、残る六人の形も電光石火の如くにて光と共に失せにけり。

さる程に將門亡びぬれば、貞盛秀郷は悦びの眉を開き、打取る処の首並に捕虜共を召し連れ、さゞめかいて上らる、威勢の程こそゆゝしけれ。道遠ければ、王城へは誠の左右は未だ聞えず、官軍は戦に打負け、將門はすでに帝都へ攻入るなどと聞えければ、主上大きに驚かせ給ひつゝ、諸寺諸山に勅使立て、調伏

の法頻りに行ふべき由、宣下せらるゝ。中にも八坂の淨藏實所は、「今度將門が攻上るといふ事は、全くもつて虚言なるべし、若しさもなくば、法驗徒事なるべし、但し彼の首の上り候にや。」と敕答申されけるが、果して四月二十五日、貞盛秀郷の兩人、將門の首を持ちて上洛せられけり。これによつて君も御物思ひを安められ、臣も悦び勇みつゝ、一天四海の人民安堵の思ひをなしたりけり。則ち檢非違使を遣はされ、將門以下の首受取らせて、大路を渡し左の獄門の木に懸けさせけるに、將門一人の首は、未だ眼も枯れず、色も変せず、時々は切齒をなして怒る景色なり、恐ろしいといふばかりなり。これを或從者の者が見て、

將門はこめかみよりも射られけりたはら藤太がはかりごとにて

と詠みければ、此の首何々と笑ひて、其の後色も変じ、眼も閉がりけるとかや。

さる程に内裏には、公卿、殿上人参内し給ひて、今度兇徒退治につき、恩賞を行はる。僧衆には尊意僧正、僧都淨藏實所なり。これ皆武士の賞に抽んでらるゝには、平の貞盛無位より正五位上に任じて將門に任ずべき由の宣旨を下され、藤原の秀郷は從四位下に任じて、武蔵下野兩國を賜はり、貞盛秀郷の兩人を召されて、宣旨を賜はる。儀式誠にゆゝしき、子々孫々弓矢の面目とぞ見えし。さても依藤太秀郷は宣旨を頂戴し、一門を引具して、下野に下りつゝ、本領に安堵し給ふ。其の繁昌は月日に増りて、門外に駒の立所もなく、堂上に酒宴の暇もなし。國中の万民忠ある者をば、望まざるに過分の恩賞を当て行はる。罪ある者をば、速かに是を懲らさしめ、賞罰正しければ、人の懐き従ふ事際限もなかりけり。其の上子孫もゆゝしくて、後將軍に任ず。次に小山の二郎、字郡宮の三郎、足利の四郎、結城の五郎などとして、男子数十人に及べり、敵めしかりし栄華なり。

抑依藤太秀郷の將門を打亡ぼし、東国に威勢を施し給ふこと、偏に龍神の擁護し給ふなるべし。それを如何にと申すに、龍神は女人に変化し給ふなれば、彼の小宰相の御局又時雨と申す女房、いさしら雲の余所にして、秀郷大切に可愛しみ、大事を語り聞かせて、高名を極めさせし事、能く思へば、彼の女の心に龍神入り代り給ふか、覺束なし。其の上三井寺の御本尊弥勒の御恵み深き故、子孫の繁昌相續す。日本六十余州に弓矢を取りて、藤原と名告る

家、おそらくば秀郷の後胤たらぬは無かるべし。敵めしかりし例なり。

## 付喪神

上巻

陰陽雜記に云ふ。器物百年を経て、化して精靈を得てより、人の心を誑す、これを付喪神と号すと云へり。是れによりて世俗、毎年、立春に先立ちて、人家の古道具を払ひ出だして、路吹に乗つる事侍り、これを煤払と云ふ。これすなはち百年に一年たらぬ付喪神の災難にあはじとなり。又新玉の始め、榆柳の火を切り、若水をむすび、衣装家具等にいたるまで、みな新らしく、声華やかなる事、たゞ富貴の家のおこれるよりおこりたると思ひたれば、かの付喪神をつゝしみて、新を賞しけりと、今こそ思ひ合はせて侍れ。

こゝに康保の頃にや、件の煤払とて、洛中洛外の在家より取出して、捨てたる古具足ども、一所に寄り合ひて評定しけるは、「さても我等、多年家々の家具となりて、奉公の忠節を尽したるに、させる恩賞こそなからめ、剩へ路頭に捨て置きて、牛馬の蹄にかゝる事、恨みの中の恨みにあらずや、詮する所、如何にもして妖物となりて、各仇を報じ給へ。」と議定するところに、数珠の入道一連差出で申しけるは、「各斯様になる事も、皆因果にてこそ候らめ、たゞ仇をば恩にて報じ給へ。」と云ひければ、中にも手棒の著太郎進み出でて、「推参なる入道が申す事かな、総じて人は生道者めきたるが見られぬぞ、まかり立ち候へ。」とて、左右なく、緒とゞめのふしの碎くるばかりぞあてたりける。一連手をすりて逃げけるが、あまりに強く打たれて息の緒の絶えけるを、弟子共やうくいたはり扶けてぞ立ちてける。かくて已むべきにあらずとて、各意見をつかゞふに、古文先生申しけるは、「それ造化のききは一氣渾々として、かつて人類草木の形ある事なし。然れども陰陽の銅、天地の爐に従ひて、かりに万物を化成せり。我に若し天地陰陽の工にあはば、必ず無心を変じて精靈を得べし。昔、托磔物いひ虞氏名車となる、これ豈陰陽の変を受けて、動植の化を致すにあらずや、須く今度の節分を相待つべし、陰陽の両際反化して物より形



を改むる時節なり、我等その時身を虚にして、造化の手に従はば妖物と成るべし。」と教へければ、各命をかつぶりける。神のはたにしろしてそかへりける。此に一連道心者とは申し乍ら、余りに無念にや侍りけむ、立歸り鬱憤を散すべきよし申せば、弟子共引止めける程に思ひつゞけ侍り、

一筋に思ひもきらぬ玉の緒の結ばられたるわが心かな

既に其の夜にもなりしかば、古文先生の教への如く、各其の身を虚無にして、造化神の懐に入る。彼等すでに百年を経たる功あり、造主に又変化の徳を備ふ。かれこれ契合して忽ちに妖物となる。或は男女老少の姿を現はし、或は魍魎悪鬼の相を變じ、或は狐狼野干の形をあらはす。色々様々の有様、恐ろしとも中々申すずかりなり。

妖物共、住むべき在所を定めけるに、あまりに人里遠くては、食物の便あるべからずとて、船岡山の後、長坂の奥と定めて、皆々か所に居移り、常に京白河に行て、捨てられし仇をも報じ、又は食物の為に貴賤男女は申すに及ばず、牛馬六畜までも取りければ、人皆悲しむ事限りなし。されども目に見えぬ化生のものなれば、対治するに計なくして、偏に仏神の力許りをぞたのみける。妖物共、肉の城を築き、血の池をたゞへ、舞、酒宴、遊戯、歡樂しつゝ、人間の楽しみをさみし、天上の快樂、あら羨ましからずやなどとぞ申し合ひける。

或時、妖物の中に申しけるは、「夫れ我が朝は本より神国にて、人みな神道を信じ奉る。我等すでに形を造化神にうけながら、彼の神をあがめ奉らざる事、心なき木石の如し、今よりして此の神を氏神と定めて、如在礼奠を致さば、運命久しく保つて、子孫繁昌せむ事疑ひあらじ。」とて、やがて此の山の奥に社壇を建てて、その名を変化大明神と号し奉る。立烏帽子の祭文の督を神主とし、小鈴の八乙女、手拍子の神樂男などさだめおきて、朝に祈り夕に祭り申す事、猛悪不善の妖物とは申しながら、信に傾く志、かの盗跖が五常の法に相似たるかな。

余社の法例に准じて、祭礼行ふべしとて、神輿を造立し奉る。頃は卯月始めの五日、深更に及びて、一条を東へ幸行なす。山をつくり、鉾をかざる。様々の風流美を尽し、善を尽せり。時に閨白殿下、臨時の除目行はれむがために、一条を西に達智門より御参内ある所に、件の祭礼と行きあひ給へり。前驅の輩、

馬より落ちて絶入す。その外の供奉の人々みな地に倒れ伏す。されども殿はちと騒ぎましまさず、御車の内より、化生のものをはたと睨み給へり。不思議なる事には、はだの御守より忽ちに火炎を出す。其の火炎、無量の火村となりて、化生の者に負ひかゝる。化生の者転び倒れて逃げ失せけり。

下巻

今夜、路吹の騒ぎによりて、御参内事ゆかず、返り給ひぬ。未明にこの由奏上せらる。主上おほきに御驚きありて、やがて御占行はる。占文のさす所、御慎み、軽からざる由奏しければ、諸社の奉幣、顯密の御祈禱始めらるべき由定めらる。

抑昨夜殿下の御守の奇特をたづぬれば、なにがしの僧正、御師檀たるによりて、御守のために、手づから尊勝陀羅尼を書き、供養して進ぜらる。御身を離たせ給はずして懸けられける、そのしるしにてぞ侍りける。主上も此の由聞召し、今度の御祈りは、併しながら彼の僧正に委すべき由仰せ下さる。再三の辞み申さるゝと雖も、敕誼背き難くして、すなはち清涼殿に於て、如法尊勝大法行はる。伴僧二十口、皆これ一門の秀才、瑜伽教の達者なり。護摩の煙、禁中に薫じ、念珠の声、禁裏をひたす。然るに第六日の後夜の時に御聽聞の為に、主上出御なるとて、御殿の上を御覽せらるゝに、赫奕たる光明あり。その中に奇異なる天童七八人、或は劔を提げ、或は宝捧をかたげて立ちけるが、同時に北をさして飛び去りぬ。是れ則ち、二明王の眷族、悪魔降伏の為に現じたまふらむと、湯仰の御涙霰襟をぞ湿ほしける。すなはち御聽聞所に出御なり、本尊を拜しまし、結願の後、御布施の儀式はてて、阿闍梨を御前近く召され、仰せ下されけるは、「真言道の奇特、今に始めぬ事なれども、今度の效驗、併しながら僧正が練行の功より起りたる由、敕誼ありければ仏法を賣み思召す觀慮のかたじけなきに、僧正、涙に咽びて御前をぞ出でられける。

さる程に案の如く、護法童子、化生のもの城へ飛びつり、忽ちに降伏し給ふ。「輪宝虚空に転じ、火焰身を攻む、汝等もし生命を害せず、諸人を悩ます事なくして、三宝を帰依し、終に菩提を証せむと思はば、たゞその命をたすくべし、しからずば悉く降伏すべき由。」宣へば、変化の者共、深く憤み畏れて、かたく誓約申して後、教誡に従ひけり。

其の後妖物ども一所に寄り合ひて、冥威恐ろしくて、命の危なかりける事も申し合ひて、いきつき居たりけるが、或る妖物申しけるは、「我等此の間多くの生類を殺し、邪見放逸なるに依りて、忽ちに冥の責を蒙りぬ、然れども過ちを悔ゆる心を顧みて、かたじけな命を助け給へり、早く一旦の栄花をなげうて、菩提の菓実を求むべし。」と申しければ、怪物共、みな一同に発心せり。然るに善知識を尋ぬるに、かの一連こそ道学ともに諸宗に用ゐられたる名匠なれ、此の人を知識とすべし、但し去年の冬、恥を与へたる事こそ口惜しけれども、我等もし罪を悔ゆる心あらば、なんぞ博愛の恵みならむとて、みな彼の栖をぞたづねける。

一連上人は、過ぎにし冬の頃より、ひとへに浮世を厭ひはてて、山深くとど籠り、嶺の松風を友として、十二因縁の眠りをさまし、谷の水音を知識としては、百八煩惱の垢をすすげり。折節古寺の入相の物すくく、かすかに聞えければ、今日も暮れけるになどと、一人口ずさむところに、柴のとほそをほとくとたたく。誰なるらむと思ひて見るに、異類異形の妖物ぞ来りける。こはそも何者ぞ、天魔外道の我が道心をさまたぐるにやとて、深くおどろくところに、「これこそありし器物共のなれる姿にて候へ。」とて、此の程の有様、発心の由来など語りければ、上人のたまひけるは、「其の後、御行方ども間かまほしく候ひつるに、逢ひ奉るつれしさのみにあらず、剩へ、発心し給ふこそ目出度けれ。」とぞ喜びける。なかにも手棒の妖物、殊更とがをおこたり申しければ、上人、「さなのたまひそよ。それ因縁によりてこそ世を厭ひ侍れ、我をすくめし知識にてましますものを。」などとぞのたまひける。

やがて剃髮染衣の形となして、始め沙弥の十戒より、次第に具足戒をぞ進められける。ある時、諸僧、上人に申しけるは、「凡そ諸教の起り、いつれも仏果の大道なれども、成仏の遅速偏に教への浅深による由承る。同じくは深教に入りて、速かに菩提を証したく候。」と申せば、上人宣ひけるは、「小僧魯愚の身なりと雖と、久しく諸宗をうかゞひ、名徳の手に従ひて、東流の教門を叩かずと云ふ事なし。夫れ大聖の教へを設くる事、機の浅深に依つて、諸乘異なりと雖も、みなこれ普門法界の一徳を分てり、何たやすく是非を論ずる事あらむ。されども即身頓悟の旨を談ずるに至りては、偏に真言三密の力にあり。昔弘法大師ひとり此の趣を宣ひしかば、諸宗の英匠疑ひて伏膺せざりき。之によりて南北の諸徳、朝廷に競ひ集まり、旗鼓を争ひ、拳く各迦旃延の跡をとひ、互に

布留那の弁をふるふと雖も、大師無碍弁の言説、懸河流れ滞りなく、三摩地の義趣、明鏡影明らかなり。即身成仏の旨文理極成するに至りて、義龍舌を捲き、智象声を呑む。時に主上仰せられるは、『教文の妙なる事疑ふ所にあらず、然れども、朕なほ現証を見む事を望む。』と敕証ありければ、大師南方に向ひて、三秘密に住し給ふ。肉身忽ちに遮那の真色に現はれて、是に五智の冠を戴き、頂背に、五色の光明を放ち給へば、主上は首を傾けまし、羣臣諸徳、地に下つて拝謝し奉る。暫くありて、本体に還復し、生仏不二の理を示し給ふ。即身現証の疑ひ、この日忽ちに解け、秘密瑜伽の字、此の時より盛んに起れり。各早くこの一門に入りて、頓に菩提を讚すべし。」と語り給へば、諸徳歡喜踊躍して信受せずと云ふ事なし。

彼等生得の法器ともなれば、経王のえらぶ所にならへりとて、西部理智の法門残る所なく授けられけり。上人宣ひけるは、「彼の龍智大士の神呪の妙薬をなめて、八百不老の佳算を保つ事は、全智広智のおそく来りしを待ち給ひしゆゑなり。われ今幸ひに諸徳を得て、法の有りとし有る所を授かり畢り、我が願ひ已に足りぬ。」とて、御齡一百八と申すに、瑜伽念誦の三摩地に入りて不起于座に成仏し給ふ。面門開きて真光を放ち、一宝破れて密蔵界となる。凡そ、自証の成道は等覺十地なほ見聞する事なし、況んや薄地の凡夫をや。然れども真言所修の行者は、加持不思議の方便によつて、まのあたり其の相を見る事あり。諸徳各成仏の外迹を拜して、弥増進の修行をはげましけり。

其の後、諸徳の中より申し出しけるは、「共住は互に懈怠をすくめて勇猛ならしめ、未知を教へて義解を増すには好きかたも侍れど、やゝもすれば開憤のさはりあり。されば経にも、入於深山、思惟仏道を説けり、須く深山幽谷の中に入りて、永く世間の縁務を絶ちて精進修行すべし。」と申しければ、まことに然るべしとて、一旦の名残を忍びて、皆各別にぞ住しける。或は奥山の岩の峽に苔の筵を敷き、或は谷陰の松の下に庵を引結びてぞ行ひける。

修練功積りて、各即身に三昧を証す。一門普門の修行によりて所得の果相各別なり。或は瞿曇仙の真言を修めて、持明悉地の成仏を遂げ、或は中台法性の觀に住して、法仏悉地の果体を開く。凡そ仏果の常相に於て、差別の義門を立つる事は、真言不共の実談にて顕家の嘗て知らざる所なり。

仙 長寿大仙王如来  
天 妙色自在王如来  
金界 法界体性王如来

夫れ非情成仏の義趣に至つては、天台、華嚴の両宗この旨を談ずと雖も、文理共に迂遠にして、未だ玄微をつくす事能はず。然るに真言三密の教旨のみひとり其の実義を判せるもの哉。これによりて余宗には、唯草木成仏と云へるを、我が宗には草木非情、発心修行成仏と題せり。所謂十界の依正は、悉く阿字第一命の徳を具足せずと云ふ事なし。有情もし発心修行成仏せば、非情何ぞ然らずと云はむ。今器物非情成仏の因縁を聞きて、弥三密瑜伽の深奥なる事を信ず。然るに顯宗の学者の曰く、阿含の意に依るに、道路屋宅にみな鬼神ありて、寸隙を空しつする事なし。いまこの器物の妖変を思ふに、必ずかの鬼神の託せらるなるべし。器類、豈、其の性あるべきやと云へり。嗚呼、顯闕深く閉せる哉。夫れ阿字の自性、情器ひとしく具して、闕減する所なし。何ぞ器物独り他性を惜しみて、自分とせんや。もし深意を知らむと思はば、九頭網を逃れて秘密に入れ。

## 鳥部山物語

とにかくに常ならぬ物は此の世なりけり。こゝに先づ頃武蔵国のかたへに、物学ぶさつさなむありける。その司ながしの和尚とかや聞えし人の御弟子に、民部卿と云ひしは、容色いと清げに心の根ざし深く、我が家の事ならぬ、史記などやらのかたき巻々をだに、かた／＼にかよはし読み聞え給ふれば、こと人よりもすくよかに覚え給ひ、かたはら近く召されて年頃仕へまつりぬ。常は唯松風に眠りを覺し、谷水に心をやりて、深き法の水上を尋ね、窓の螢のむつび、枝の雪をならして、法の燈をかゞげつべきさきあらばとて、かたみの人もいともてなすなるべし。さればその頃九重に何の御修法とありて、国々より尊き僧達の参り集ふ事なむ侍りける。此の和尚もその数に召されて上り給ふべき定まりければ、上・中・下、旅よそひとて罵り合へり。頃は夏立つ初めなれば、

木々の梢も茂り合ひ、庭の千草も色そへて、いと涼しげなる宵のまの、月もやがて草葉にかくれ、武蔵野の名残覚えて、紫のゆかりあれば、あとの事など何くれと云ひこしらへぬる中に、短き夜半のうき枕、結ぶともなき転寝の、夢を残して明けはなれむとするころ、あづまの空を立ちて、日数十日余りに都になむつきぬ。何事も衰へたる世といへど、猶九重のかみさびたる様こそ此上なうめでたけれ。かくて程経ぬれば御祈りの事果てぬれど、猶歸るべき程もゆるぎなければ、その事となく月日を送りける程に、年も返りぬ。空の気色名残なくうら／＼かに、雪まの草も青み出でて、おのづから人の心ものびらかに、まいて玉をしける御かたがたは、庭より初め見所多く、みがましぬる有様、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。いつしか都近き四方の山の端霞のよそになり行く頃は、まだ見ぬ花もおもかげに立ちて、同じ心の友どちと打連れ、北山のかたへと志しける道の程に、老いたる若き、たかきあやしき、行き来る袖も色めき合へる中に、さわやかなる車、かたへの木陰に寄せて、つき従ふをのこなどさしよりつゝ、「いとをかしき花のけしき御覽ぜよ。葦交りの草もなつかしく。」など聞えければ、おり給へる、よそほひ、年の程まだ二八にも足り給はぬほどなるが、色々に染め分けたる衣、いとなやかに著なして、眺め給へるやうだい、頭つき、うしろでなどこの世の人とも思はれず。あてやかなる様はかりなし。民部ほのかに見てしより、そゞろに心まどひて、かへさのあとも慕はしきまでなむ見とれたるを、ともなふ人人も、めとがむる程なれば、さすがに人のいひ思はむも浅はかなればと、心にこめて立歸りしより、おもかげにのみ覚えて、昼はひめもす夜はすがらに嘆きあかし、今は心も乱れ髪、いふにもあまる恋草は、つむともつきぬ七車の、又めぐり逢ふこともやと、至らぬくまもなくまどひ歩いて求むれど、一人こがるゝ捨舟のさをさして、いつこと教ぶるよすがもなければ、空しく立ちかへりけるが、四糸の坊門とかや打過ぐるに、公卿のすむ家と見えて、奥深く木立もの古り、何となくなつかしく覚えければ、門のかたはらにさし入りたるに、かたचितとたぐひなきちこの、梅の技に蝶鳥とび違ひ、からめきたるを打著て、散りすぎたる花の梢をつく／＼とながめて、

移ろひてあらぬ色香におとろへぬ花も盛りはみじかかりけり

と口ずさみながら、そばなるかうらんにそと凭りかゝりて、つら／＼とつき

給へる様、肌寒きまでなむ覚えける。つくづくと打ちまれば、夢にもせめてと恋ひ慕ひし、北山の花のえにし、露まがふべくもあらず、胸打騒ぎて、なほ立寄りければ、見る人ありと苦しげにて、やがて紛れ入りぬ。これや如何にとしばしは立ちやすらひはべれど、我のみしれる夕暮の、鐘の響もつれなくて、早日も暮れぬれば、いつまでかくてもと、たどるく打ちかへりぬ。今はひたすら病の床に臥して、和尚に仕へ物する事もおこたり給ふれば、急ぎ薬の事などとかくさたし侍れど、聊かもしるしなし。雨しめやかに降り暮したる夜のいと寂しきに、年比つき従ひしものなむありしが、なやめる枕にさしより聞えるは、「過ぎにし花の夕まぐれ、ほのかにかげを見る月の入り給へる空、くはしく知れるものはべり。何がしの中納言とかやいへる人の御子なり。」とそゝろに語るを打聞きて、重き枕をもたげ、「如何にその人の事いひ寄るべきよすがやある。」と尋ねければ、「さればとよ、その住み給ふ東にさゝやかなる家の垣に、苔むし軒にしのぶ交りに生ひ茂りて物わびしげなるを、過ぎがてにそれと見入りはべれば、主六十あまりにもや侍らむ、埋火の下に、手の裏を打返しかたむきあけるを、よくく見れば、はやつより知れる人にてなむ侍り。さしよりに越し方の事も打語らひしに、かの君の事まで問はず語りしいでいとねもごろにもものし侍るぞや。御なやみもおこたり給ふほどは、しばし彼の家に立越え給ひて、かりにも住ませ給はば、玉だれのひまにも御心を伝へ給ふ程の事はなごやなからむ。」とぞそゝのかし侍れば、民部打ちつなづきつゝほゝゑみて居たる所に、これも和尚に親しく仕へものする式部といふ者さぶらひ来て、「なやみ如何侍る。斯くのみ籠りては氣も疲れいと心も結ほほれなむに、何処にもあれ、さるべき屋ひとつ求めて、心をまなくさめ給へかし。」となれても聞えければ、嬉しとは聞きあれたれど、あわたれたるわざは如何にとおいらかにもてなし、「さればよ、みづからもさは思ひなから、和尚の御心のはかり難さに。」とまみいとたゆげになれば、「いかで悪しくはおぼし給はむ。聞え上げ侍らむ。」とてそのまゝ立出でぬ。とばかりありて又まつて来り。「あらましのこと聞え侍れば、その心に任すべき由のたまひて侍るぞ。早く人して宿の事もし給へ。」といと睦じく語り置きて出でぬ。民部嬉しさに、少しは晴るゝ心地して、具足とりしたゝめ、かの蓬生の宿へ立越えぬ。主いともてなして、日数経るまゝに互に心おかずなりにけり。又かの翁が子に、年いと

若きが、情あるものにて、常に寄り来て慰め侍るを、ある明方かたはらに招きて、はやくの事ども打語らひければ、をのこもいと哀れと思ひて聞ゆるやつ、「やつがれこそその御父なりける人の御許へ年頃参りなれて、よくく知り侍れ。かの児の御事は二人の中に只一人にて、此上なつかしづき給ふなり。御名をば藤の弁と申し侍り。御かたち世にこえ、御心さまも人に優れ給へば、父母限りなくいとほしみ給ひ、おぼろげにては外へも出させ給はず、あけくれはたゞ深き窓のうちにて、和歌の浦なみに心を寄せ、手ならひなどのみ事とし給ふぞや、やつがればかりぞ、よりくはとぶらひ聞えて、つれくをも慰め侍る。ひたすらに思し給ふもいとほしく見奉れば、いひ寄りてこそ見侍らぬ。うけひき給はむは、はかりがたけれど、水ぐきの岡のかやはら靡く許りに、御心づくしの程をも告げ知らせ給へ。」と聞えければ、民部限りなく嬉しと思ひて、いとくうばしきみちのく紙の、少し年経てあつきが黄ばみたるに、

#### 過ぎがてによその梢をみてしより忘れもやらぬ花の面影

月の夜も汐のひるまも、波風のたちぬにつけてかわかぬは小島の蟹の袖ならでも、などかきすさびたるを、かのをのことりて、その日の暮れかゝる程に、西の家にまかりけるに、人々珍らしみあへりて、世の中の物がたり、この頃あることをかきも怪しきも、これかれ打語らひはべるに、君はいと心にくく、秋の哀れ思召したまふにや、白き色紙に菝芒乱れ合ひたる絵を、一なくかかせおはしまし給ふ。さしよりに、「いかに御筆のあとはあがらせ給ふにや、このほどはさる事ありておとづれも聞え侍らず。」などいひあたるに、人人御前しぞきたるほど、例の文とりいで、「斯かる事はいひ出でむも、さすが苦しき事ながら、せちなる思ひに悩み給ふもいとほしく、又あながちに頼まれ侍るもいなみ難さに。」とて、はやくの事どもくはしく語り聞えければ、たゞ顔うち赤めて、とかくの事ものたまはねば、ことわりとは知りながら、「人のかくまで恋ひ悲しみたまふ文を、いかでか空しく捨て給ふべき。情なのわざや。」とかきどきければ、机のかげに少し押開き、尻目にそとみやり給へるを、ついでよしと思ひて、「たゞひと言の御返しを。」とせめ聞えければ、「たゞいつはりの人の世に、行方も知らぬあだ人の。」ともてはなちたまへるを、とかくい慰めける中に、外より来る人あれば、さらぬよしてその夜は空しく立歸り、あ

りしことども民部に語り聞えければ、いよ／＼空になりて、「猶しも聞えさせよ。たゞ一文字の言の葉だにあらば、限りあらむ道のつとめにも如何ばかり嬉しかるべき。」などむかふ／＼と責め聞えければ、又立ちこえて、「ひと日のあからさま事をば、如何思し給ふにや。人つてのみの苦しきはとて、みづからさへ恨み給ふ涙の雨に、よその袂も所せくこそ。あまりに人の情なきも、後は中々あたとこそなれ。御歌の返しばかりは。」といろ／＼に勧めければ、「われも岩木ならねば、人の哀れは知りながら、つき名もさすがつゝましくこそ。」とて、見てしより忘れもやらぬ面影はよその梢の花にやあるらむ

とばかり手習ふやうに書きすさびたるを、やう／＼こひとりつゝ、急ぎ立ちかへり、「御返し。」とて差出せば、とる手も遅しとく押開きて見れば、ふくよかにくつし書きたるが、鳥の跡のやつにて、若々しうよくもつゝけやらぬほど、おひさき見えていと美し。されば猶たへがたさに、又おし返して、

散りもそめず咲きも残らぬおもかけをいかでかよその花にまがへむ

たゞおほかたの色香ならねば、まがふべくもあらぬを、いかなる風のとつてても、など様様にかきくだきけるを、中だち又立ちこえ、とかく聞えければ、此の歌をくり返し詠め給ふが、「よしや人のもりきかば中々なれど、ともかくにも。」とて、

恥かしの杜のことはもらすなよつひに時雨の色にいづとも

何事も／＼悪しからぬやつに、など聞え給ふもいとほしく、民部にとかく聞えければ、悩みいつしかおこたりながら、ねぬなほの苦しきものは、忍の浦のみるめしげくて、日ごろを過し侍りけるが、如何なる人めまぎれにや、ある夜ひそかに児の住みたまふ方へ忍び入りたるに、わざとならぬ匂ひしめやかに打薫りて、いける仏の御国ともいはまほしきに、妻戸の少しあきたるよりみ入れたれば、花紅葉散り乱れたる屏風引きまはし、微かなる燈の下に数々の草紙ひろけて、心静かにつちかたぶき給へるに、「ほれかゝりたる鬢のはつれより、

にほやかにほのかなるかほばせ、露を含める花の曙、風にしたがへる柳の夕げしき、かの北山にて見初めしは、猶ことの数ならずぞ覺えける。おしあけて入りたるに、のどやかにもてなしたるけはひ、見はてぬ夢の心地しながら、傍に寄り添ひつゝ、辛きにも嬉しきにも、涙まづさき立ちて、「ありしながらの心づくしはおしはかり給ふも、猶あさくや。」などおしのごひ聞えければ、人はいとそむきて恥らひ給へる顔の色あひ、ものによそへば露重げなる秋萩の、枝もたわ／＼に咲き乱れたるよそほひ、いとほしくも美しなどいふも愚かなれば、つつし心もなくなりて、日頃の憂さの限りも、逢ふ夜のうちにて語らひ居たるに、なにのつらさにか、別れを急ぐ八声の鳥も、はや声々にうちしきれば、おのが音につらき別れとうちわびて、引別れぬるきぬ／＼の、袖の涙も所せく覺えけるに、有明の月のかたみがほなるも、猶かきくらす心地して、いとなくかしき袖のかをりも、今宵は常ならぬ心地して、心ときめきせらるゝに、屏風少し引きそばめたるに、やをら押しやりて見れば、早いと泣きしをれ給へるなりけり。ねんじあへず、うち泣かれつゝ、かたはらに添ひふして、「これや如何なる宿世のなすわざならむ、御心のまことしあらば、今の情な忘れ給ひぞ。」とより語らふ折しも、月影のほかに南の窓よりさし入るを見て、民部、

いばかり月には影の慕はれむ曇る夜はさへ忘れやらじを

とさぐりもよ／＼と止め難きを、弁の君もいとしめりたる眉おし拭ひ、とばかり見やりて、

如何にせむ涙の雨にかきくれてしたはむ月の影もわかねば

おなじ限りの命ならずば、と命に代へてもしばし止めまほしき今の別れなり。されば昔語にも、「千夜を一夜に。」といひしもさる事なり。まいて秋ならぬ夜の短きは夢よりも猶ほどなくて、こと葉を残す鳥の音に、いと心も空になれば、互に手を取り交し、ほどは雲ぬにと契りおきつと、涙と共に立別れぬ。やがてあふ坂山こえかゝるも、又いつの世にとなげかし。

おもかけよいつ忘れれば有明の月のかたみの今朝の別れに

とむせかへれば、君もたぐひなき哀れに、

かぎりとして立ちわかれば大空の月もや君のかたみならまし

と互にかへり見がちにて立別れぬ。其の後はなほ浅からぬ契りとなりて、よ  
り／＼問ひ交しぬる程に、やう／＼春も暮れぬ。折ふしの移り行くは世の  
中の習ひなれど、今更かへつき夏衣の日もたち重なりて、早あづまの方へお  
もむく頃にもなりしかば、故郷のつとにとて錦を翳す花衣の、色めきあへる  
中に、民部一人人知れぬ物思ひに、おき所なき袖の露、紅の千入も浅きまで  
になり行きけれども、とゞまるべき道ならねば、ともに出立ついなみの中  
にも、今一度しめやかに打語らふ事もがなと、思ひ忘れぬほどに、早あすな  
む都の地を立去るべきよし事定まりければ、今宵ばかりの逢ふ瀬に、涙の淵  
もせき止め難く、遂にかかるつきにもならはで、そゞろこととして物も覚えぬ  
さまなり。中だちとかくこしらへて、二十日あまりの月のやう／＼さしのぼ  
る頃、人をしづめて例の妻戸より忍び入りければ、五月まつ花橋の匂ひならねど、

いつとなき世のはかなさを思ふにもいかゞ越えつき逢坂の関

やう／＼日数経る程に武蔵国に著きぬ。都には立別れ給ひしより、せめて  
枕の移り香も人に添ひぬる心してければ、そのひと日二日は起きも上り給は  
で、袂も朽つるばかり泣き悲しみ給へど、身より外には誰か哀れともいひあ  
はずべき。少し慰むかたとは、かの中だちせしをのこばかりぞたえ／＼訪  
ひ来て、ありしことどもひそかに打語らひ侍りしが、それさへいつしか疎く  
なりて、事とぶよすがもななければ、ひとり心に恋ひ悲しみて、起きもせず寝  
もせぬ床に夜をあかし、昼は閨の中ながらも、そなたの空を眺めやり、吹き  
来る風の訪れもいとなつかしく、山の端近く出づる月のくま澄みのぼるにも、  
「月に影の。」と詠め給ひし、その面影、ひとと身にそひて、恋しうのみ思  
ひまされりければ、かたみも今は仇なれと、恨めしき中にもさすがに又慕はれて、

詠めやる夕の空ぞむつまじきおなじ雲の月とおもへば

とひとりごちて、などがうしも心弱きさまにと、人めを思ひ返せど、いや  
まさりにのみ苦しければ、つや／＼人にも見え給はず。たゞ籠居がちなるを、  
父母はいと悲しき事に思ひて、神仏に祈り、かぢなど様々行ひ給ふれどそのし  
るしなく、たゞあながちに物思ひ給へる気色にて、をり／＼胸せき上げて、い  
みじう堪へ難げにまどひ給ふ。人々いかにと心やましく思へる中に、この児の  
めとなるもの、御枕により添ひつゝ、鬢の髪なでて、「あなうつゝなや。い  
かにさは心つきめ見せ給ふぞ。まだ二葉の昔よりおよすげ給ふまでおほし立て  
参らせて、猶栄え行く末のめでたきを、見奉り侍らばやと思ふにぞ、あす知ら  
ぬ命も惜しまれ侍る。されは何事にもあれ、御心にあらむ程の事、我には隔て  
給ふべきかは。かく日を経て悩み給ふ、かつは御心弱さにこそ。」といろ／＼  
に慰めければ、少し枕を上げ、いと苦しげなる声して聞え給ふは、「その事  
は我もいさゝかおろかには思ひはべらず。心にあらむ程の事、何かはまばゆ  
かるべきなれど、いひ出でてもその甲斐あらばこそ。とてもあへなき事故に、  
人のためうき名とり河のよしや涙に沈み果つともと、深く念じて日頃は過し  
侍りしが、今は玉の緒もたのみ少く侍れば、心の中にはではてなむも、よ  
みぢうたてしさに語り侍る。あなかし。ならむあとにもゆめもらす事なか  
れ。」とて、逢ひ初めし昔よりの事ども打語りつゝ、限りなくむせび給ふ。い  
といたなき御心に、かくまでおほし給ふ事のふしぎにも哀れにも覚えて、と  
もに涙を落しつゝ、「さる事とこそかねて思ひ侍れ。かしこくぞ御心をも問ひ  
たてまつれ。此の世の中になきならひかは。さまでつゝみ給ふべき事にもあら  
ざめれど、御心弱さにこそかく病みくつほれ給ふなれ。」と急ぎ父母につげ聞  
えければ、こよなうけいめいのたまふやう、「さてもいかなる物はぢにか、さ  
までは心にこめけるやらむ。おろかの事よ。その事ならばこゝに迎へむになど  
かはかたからむ。」とて、「人してはたがふ事こそあれ。そこには急ぎあづま  
へ下りて、具し奉れ。」と仰せければ、めのもいと嬉しき事に思ひ、又御枕  
に立ちより、「父母の仰事なむかうむりて、その恋ひ慕ひ給ふ御ゆくへたづね  
に、唯今あづまへ下り侍るぞ。急ぎ具し奉り侍らむ。しばしと思し給ひて、御  
心をも慰め給ひて。」などいさめおきて、夜を日に下りつゝ、かの住みかを尋  
ね求めて案内をこひ、民部に対面して、「かう／＼の事侍るをば、いかに哀  
れとは覚え給はずや。」といふよりまつ涙にむせびければ、きく心地物も覚え

ず、しばらくありて聞ゆるやう、「さればよ、さる事侍りしを、よろづ世の中のつゞまじさに、しるくいひ出づる事の叶はでつち過し、そこにさへ知らせ侍らざりしを、今かうたづね來り給ふ事のおもてぶせさよ。我も都を出でしより、片時忘れ参らす事は侍らねど、誰も心に任せぬわたらひにて、徒らに今日までは過しつね。せちなる思ひのよし聞くもいとたへ難くはべり。いかにして逢ひ見侍らむ。」とて、やがて立出で、昔なやめるころ、いとまめやかに慰めける同じ友の許に行きてたばかりやう、「年頃心尽しに思ひおきつるゆかりの者、此の程都近き所まで上り侍るが、はからざるに病に犯されて、世の中も頼み少なになり行くまゝに、そと聞えあはすべき事のあれば、命のあらむ程今一度とみにつけこし侍り。哀れそこの計らひにて、三十日あまりの暇賜はりて、たゞ一め見もしみえばや。」と嘆くを、「いかで語るべき。」とて、やがて和尚へ聞え上げければ、「ことわりなれば。」とて、御暇賜はりぬ。二人のものいと嬉しき事に思ひて、時しも秋風の涙もよほす音つねに、虫も数々泣きそへて、草の袂も露深く、月をしわくる武蔵野を、まだしのゝめに思ひたちぬ。やう／＼行けば、富士の高ねにある雪も、つもる思によそへられつゝ、

きえがたきぶじのみ雪にたくへても猶長かれと思ふいのちぞ

など胸よりあまる事ども口すさみつゝもて行く程、清見が関のいそ枕、涙かたしく袖のつゝは、とけてもさすが寝られぬを、海士の磯やに旅寝して、浪のよるひるといへるも、我が身の上に思ひ知られて、おほかたならぬ悲しさ又何にかは似るべき。

中々に心づくしに先だちて我さへ波のあはできえなむ

わりなきのあまりなるべし。日もやう／＼重なるまゝに、つち山といふうまやにつきぬ。あくる空は都へと志し喜びあへる中にも、いと心やまじき。「京より。」とて文もて來り。あはや如何にと胸打騒きて、とく聞き見れば、「惱める人日にそひ弱り行きて、昨日の暮れかゝる程になむ絶え入り侍りぬ。」とあるを見るにめくれ心までひて、これやいかにと夢のわたりのうき橋をたどる心地なむしける。民部涙のひまなきにも、「今一度の頼みにこそはる／＼たどり

來しに、ひと日二日を待たで消えにし露のはかなさよ。斯からむとてあらまじにや。」同じ限りの。「とは歎き給ひにけむ。さればわれ故空しくなりし人を、いまはのきはにさへ一見見給はぬ、その心の中おしはかるもうたて覚ゆ。むつきの中より見そなはし給ふ人なれば、いかばかりあへなしと思ひ給はむ。我もこれまで立越えし上は、急ぎ都へのぼりて、便りなく嘆き給はむ父母の御心をも慰め、又なき人の後のわざをも、いとなみ侍らばや。」と聞えければ、「ありがたき御心にこそ。かくまで物し給ふ上は、なにし恨みか侍らむ。たゞ亡き人の命のもるさこそ、とにもかくにもせむかたなけれ。」とて、又泣き沈みけるけしき、いとわりなしともわりなし。民部もたえ／＼はな打ちかみて、「後れさき立つはかなさは、大かたの世のさがなれど、斯かるためしこそ聞きもならはね。」と打嘆きつゝ、あくる日の暮れかゝる程に、都になむつきぬ。父はまいて母はおほろげの人には見え給はぬを、几帳の外まで走り出で、民部が袖にすがり給へば、めのとなどは、かたはらにたれふし、「つらし、心つし。」となげく声、ことわりに忍び難し。やゝありて、父の卿めとなるをのこに回ひて、宣ふやう、「ひと日二日を出でしより、少しは心も慰むげにて、なやみいさ／＼か軽らかに見えしが、又日にそひて重り行き、はや薬など物すべき頼みもなくなりて絶え入りけるを、よびいけなどしけれども、情なく昔語になししなり。今はのきはの心の間、母が歎きのやるかたなさ、たゞおしはかれば、歎きて帰らぬ道なれば、鳥部山のかたはらにたゞひとりのみ送りすて、空しき煙とのほせしは。」とて、又むせかへり給ふを見て、人々声をさ／＼げてさと泣きにけり。民部の君ひとまなる所に入り見れば、空しくぬぎ捨てし衣、朝夕手なれし調度などもさながら残りて、いと涙のつまとなりぬ。又かたはらを見れば、なれたる扇に、「こひむ涙の色にゆかしき。」などいへるふることども数々書きて、

日影まつ露の命はをしからであはできえなむことの悲しき

と書ける筆のあとも、いたうよわり給入るをりぞと覚えて、文字も定かならず見ゆ。民部胸ふさがり、ありし姿のつとそひて、いつの世に怠るべくもあらず。今はたゞ惜しからぬ命なき人の為にしてむ事をひたすらに思ひこめけり。さればうきにたへぬなみだ川、流れてはやく日数もけふは七日になりぬとて、父の卿めのとなどありし所にたどり給ふれば、民部も同じくまつで

けるに、鳥部山の煙それとあかねどいとむつましく、あだし野の露哀れと見るにつけても、君があたりの草の葉に思ひ消えなむ命の程も、中々今は嬉しくて、

さきだちし鳥部の山の夕けぶり哀れいつまできえ残れとか

父の卿、とりあはず、

さきだちて消えし浅茅が末の露本の雫の身をいかにせむ

さて民部は泣くく三昧のかたに行きて、空しきしるしを見るにも、まづ涙にくれてしばしものも覚えず。やゝありて花など手向けつゝ、心静かに念誦し終り、生きたる人にも聞ゆるやうに、「さてもしばしを待たで世をはやうし給ひし事のうたてさよ。いかばかりか我をつらしと覺すらめ。誰も心のまゝならねば、此の世の縁薄くとも、来む世は必ず同じ蓮のうてなと思ふあまり、罪深き迷ひなれど、世々を経て思ひなれにし事の、今更あらためがたければ。」などうち嘆きて、ふところにあやし守刀をひそかにぬきそばめ、今はかうと見えしを、そばなる人早く見つけて、「こはいかに。」といだき止むれば、中納言を初め人々とりつき、まづ刀をば辛うじて奪ひ取りぬ。中納言は泣くく民部に言ふやう、「なきが事は今は甲斐なし。そこにもなくなり給ひなば、なきが嘆きにとり重ね、又もつぎめ見せ給ふか。御ころぞし侍らば、あとのわざいとなみ給はむこそ消えにし者の罪も軽からめ。」とさまぐにいひ止め給へば、本意もとけず。それより武蔵野へも帰らず、北山のかたはらに柴の庵を引結びて、墨の衣も色深く、ねぬ夜の夢もさめけるにや、

あらぬ道に迷ふも嬉し迷はずばいかでさやけき月をみまじや

と詠めて、しばしはこゝにおこなひしが、夕への鐘のつちきそひて、またいつちへかたどり行きけむ、おぼつかなき事にこそ。

## 鳴門中将物語

いづれの年の春とかや、弥生の花盛りに花徳門の御局にて、二條前閼白、大宮大納言、刑部卿三位、頭中将など参り給ひて、御鞠侍りにし、見物の人々に交りて、女共数多侍るなかに、うちの御心よせに思召すありけり。鞠は御心にも入らせ給はで、かの女の方を頻りに御覧すれば、女煩はしげに思ひて、打紛れて左衛門の陣の方へ出でにけり。六位を召して、「この女の歸らむ所見置きて申し侍れ。」と仰せたゞければ、藏人追ひ付きて見るに、この女心得たりけるにや、如何にも此の男すかしやりて逃げむと思ひて、鞍人を招き寄せて打笑ひ、「くれ竹のと申させ給へ。あなかしこ。御返しを承らむ程は、御門にて待ち参らせむ。」と云へば、すかすとは夢々思ひよらで、只すきあひ参らせむとするぞと心得て、急ぎ参りて此の由奏し申せば、「定めて古歌の句にてぞ侍らむ。」とて御尋ねありけるに、その庭には、知りたる人なかりければ、為家卿の許へ御尋ねありけるに、取敢へず、古き歌とて、

高くとも何にかはせむくれ竹の一よ一よのあだのふしをば

と申されたりければ、いよく心悪き事に思召して、御返事なくして、「只女の歸らむ所をたしかに見て申せ。」と仰せ給ひければ、立歸りありつる門を見るに、かきつけやうに失せぬ。又、参りてしかくと奏すれば、御けしき悪しくて、尋ね出さずば料あるべき由を仰せらる。藏人責ざめて罷り出でぬ。此の事によりて、御鞠もことさめて入らせ給ひぬ。その後にかぐしくまめだたせ給ひて、心苦しき御事にぞ侍りけるに、或時、近衛殿二條殿、花山院大納言、大宮大納言公相、中納言通成など様の人々参り給ひて御遊び侍れ共、さきぐのやうにも渡らせ給はず、物をのみ思召すさまにて、御ながめ勝なれば、近衛殿御かはらせを進め申させ給ふ序に、「誠にや、近頃行き方しらぬ宿の蚊やり火に、焦れさせおはしまし侍るなる。尋ね行き見む、かくれ侍るまじものを。唐土には逢来まで尋ね侍りけるためしも侍るを、これは都のうちなれば、安き程のことなり。」とて御み参らせ給ふに、内も少し打笑はせ給へども、そゝろかせ給ひて入らせ給ひぬ。その後、藏人いたらぬくまもなく、もしや逢ふ



と求め歩いて、神仏に祈り申せども、甲斐なし。思ひ侘びて、文平と申す陰陽師こそ当世にはたなごゝるをさして推察まさしかなれ、此の事占はせむと思ひて罷り向ひて問ひ侍りければ、申しけるは、「これは内にも承り及べり。由々しき大事なり。文平うらはこれにて心み侍るべし。火のえうを得たり。かみことなり。今日は巳の日なり。巳はくちなは。此の事を推するに、一旦の隠れなり。遂には逢はせ給ふべし。たゞし火のえうは夏の氣にいたりて御悦びなり。くちなはなれば、もとの穴に入りてもとの所に出づべし。夏の中五月中にかくれけむ所にて、必ず逢はせ給ふべし。」と申せども、これも凡夫なれば一定たのむべきにはあらねども、むげに上の空なりしよりは、この声を聞きて後は、常に左衛門の陣の方にぞ佇みける。五月十三日最勝講の閑白の日、この女ありし様を改めて、五人つれてふと行き逢ひぬ。蔵人余りの嬉しさに夢現とも覺えず。あやしまれじと思ひて、人に紛れて見侍れば、仁寿殿の西のひさしに並み居て聴聞す。御講は果ててひしめかむ時、又失ひて如何せむと思ひて、経後の殿上口に在する所にて、「此の事しかじか奏し給へ。」と語らへば、「唯今中宮一所御聴聞の程なり。こちなし。」と申しければ、力及はず。一位殿宰相のすけに申ししかば、我が御局口にて女房と物仰せらるゝを見あひまゐらせて、畏みて申しけるは、「推參に侍れど天氣にて侍り。しかゞのこと急ぎ奏し申し給へ。」と申しければ、かねて聞えある事なれば、やがて奏し申させ給ふに、女房して、「神妙なり。構へて此の度は不覺せで行く方をたしかに見せ置きて申せ。」と仰せらるゝ程に、講果つれば夕暮になりぬ。この女どもひと車にて帰るめり。蔵人、我が身は又あやしまれじと思ひて、さかゞしき女をつけて見入れさすれば、三條白河に某の少将といふ人の家なり。この由を奏すれば、やがて御文あり。

「仇に見し夢か現かくれ竹のおきふしわぶる恋ぞ苦しき

泣きて叶ふまじき由返すゝ辭ひ申せば、少将申しけるは、「この三年が程愚かならず思ひ交して過ぎぬるも、世々の契りなるべし。今又召され給ふも浅からぬ契りならむかし。やうゝして參り給はずば、定めて悪し様なる事にて我が身も置き所なき事にも成りぬべし。よもあしくは計らひ申さじ。とくゝ參り給へ。」と返すゝ勧めければ、女うち涙ぐみて、御文ひろけて見るに、この暮にかならず、とある文字の下に、をと云ふ文字を唯一つ墨黒に書きて、もとのやうにして御使にまゐらせけり。御文もとの様にて違はぬを御覽じて、空しく歸りたるよと本意なく思召すに、結び目のしどけなければ、あけて御覽するに、この「を」を「文字ありとて、御案あれども御心もめぐらせ給はず。さるべき女房達を少々召してこの「を」を「文字を御尋ねありければ、承明門院に小宰相の局とて、家隆卿の女のさぶらひけるが申しけるは、「むかし大二條殿小式部の内侍の許へ、月と云ふ文字を書きて遣はしたりければ、さるべきもの、泉式部がむすめなりければ、母にや申し合はせたりけむ、やすく心得て、月の下に。」を」と云ふ文字許りを書きて參らせたりける、其の心なるべし。月といふ文字はよさらに待ち侍るべし、出で給へと心得けり。又人の召し侍る御いらへに、男は「よ」と申し、女は「を」と申すなり。されば小式部の内侍も、上東門院に侍ひけるが、罷り出でて参りたりければ、いよゝ心まさりして賞で思召しける。これも一定まゐりはべりなむ。」と申しければ、御心地よげに思召して、したたせ給ひけり。夜もやうゝ更けぬれど、よるのおとゝへも入らせたまはず、宿直申しの聞ゆるは、うしになりぬるにやと、御心を痛ましむる程に、蔵人忍びやかに、此の女参り侍る由奏し申しければ、嬉しう思召されて、やがて召されにけり。漢武の李夫人に逢ひ、玄宗の楊貴妃を得たるためしも、これには優り侍らじと御心の中もかたじけなく、さまゞ語らひ給ふ程に、明け易き短夜なれば、曉近く成り行くに、此の女身の有様をかきくとき、細かにはあらねど、心に任せぬ事の様を奏し申しければ、まづ歸し遣はされにけり。御心ざし浅からず、やがて三千の列にも召し置かれて、九重の内のすみかをも御計らひあるべきにて侍りけるを、まめやかにげき申して、「さやうならば中々御情にても侍らじ。淵瀬をのがれぬ身の類にもなりぬべし。唯この儘にて、人のいたく知らぬ程ならば絶えず召しにも従ふべき。」由を申しければ遂にもとのすみかへ歸されて時々忍びて召されけり。彼の少将は隠者なりけるを、あらぬかたにつけて召し出されて方に御情をかけられて、近習の人

数に加へられなどして、程なく中将になされにけり。包むとすれどおのづから洩れ聞えて、人の口のさがなさは、そのころのもてあつかひにて、鳴門の中將と申しける。鳴門のわかめとて、よきめののぼる所なれば、斯かる異名をつけたりけるとかや。凡そ君と臣とは、水と魚との如し。上としてもおごりにくまらず、下としておそねみ乱るべからず。もろこしにも楚の狂王と申す君は、寵愛の後の衣をひくものを許して情をかけ、唐の太宗と申すかしこき御門はずぐれて思召しける后をも、臣下の約束ありとて下し遣はされけり。我が朝にも斯かる古きためしもあまた聞え侍るにやあらむ。今の後さがの御門の御心もちるの御かたじけなき、中将の許し申しける情の色、何れもまことに優にも、有り難きためしにも申し伝ふべきものをや。君とし臣としては、何事にも隔つる心なく、互に情深きをもとすべきにこそと昔より申し伝へたるも、ことわりに覚え侍りけり。

## 化物草紙

兵衛府なりける人、七月許りに簾捲き上げて、端にながめ臥したるに、更けゆくまゝに風涼しく、萩の葉のうちそよくも秋知り顔なる程、もの哀れなるこゝちして、月無き頃なれど、星の光さやかなるに、十三許りにやと見ゆる、丈立のいみじく細き男なめり。又たとしへなく横さまへ広く肥えて、ひきくとしたると二人出で来て、相撲をぞとる。いと不思議に覚えて、つくづくと見れば、互にいしゆふかげにて寄り合ひ寄りのき、度々とれど勝負なし。何者ならむと心も得ねば、あれは誰ぞといふ声を聞きて、荻すゝきの茂れる中へ急ぎ入りぬ。いと不思議なれば、待めして見すれど、すべて人も無しといふ。いと心得難し、此の人やもめ住みなれば、いつも只眺め勝ちにて、一人のみ明し給へば、又の夜もよべの様に、見出しておはしますに、夜深くなる程に同じやうに二人出で来て、又相撲をとる。事のやう化物にてこそ覚えて、側にありける真弓をやを取りて、ひしひしと二人かけ合ふ所を射たれば、手答へして倒ると見えけり。人を呼びて火を燈して見るに、すべて無し。門は差したれば、いづくへか行かむ、こゝかしこ見すれども無し。いと不思議に覚えて、夜

明けてみづから倒れし所をよく見給へば、いと大きなありとだにと、二人とり合ひて死にけり。これが仕事にこそといと不思議なりけり。

九條わたりに荒れたる家にかすかにて住む女ありけり。人のもとよりかち栗をおこせたりけるを喰ひ居たるに、向ひたる炭櫃のあるより白々としたる手を出して、乞ふやうにしければ、いと不思議なれども、手のいたいけしたる程に、さまで恐ろしきこゝちもせで、一つ取らせたりければ、引入れて又さし出し、乞ひければ、度毎に二つづつ取らせて、四五度して後見えざりけり。不思議に見えて、つとめて其の下を見せければ、杓子といふ物の白く小さきおちさはまりてありける。とらせし栗もさながらそばにありける。いと不思議なりけり。

これも女どち住みけるに、人静まりて唯一人念仏申して居たりけるに、たし柵のありける遣戸のあきたるより、耳高き法師の頭少し出して、のぞきて引入れ、度々しければ、いと恐ろしくて、盗人などのかまり居て、寝るを待つかなど、せむかたなくて、男まねがたのよろぼひ居たるが一人ありけるを、起して見せけれど、人も無し。又程なき所なれば、人などの出づべきやうもなければ、心得ずおぼえて明けにけり。又の夜た同じ様に見えたる法師のぞきければ、かへす不思議に思ひて、つとめてよく見れば、いつの世のにか、ふり腐りたる銚子の、柄も折れたるぞありける。これが化けけるぞとて、捨てて後はのぞくものなかりけり。

或人の昼寝をしたりける傍に、提げに水を入れて置きたりけるに、蠅の落ち入りて死なむとしけるを、また或人の取上げたりければ、此の蠅飛びて昼寝の人の鼻にふと入りにけり。此の人驚きて汗水になりて、唯今限り無く広き海に陥りて死なむとしけるを、物の取上げつると語る。いと不思議なりけり。

これも昔ある山里に住む独り女ありけり。家の破れたるを取直す物も無し。やう／＼秋風も身にしみ、心細く覚えけるまゝに、門田の面に立出でて、打眺めつゝ、驚かしにても来て、わらはが夫になれかしとぞいひける。かくて過ぎ行く程に、或る夕暮に門の方より採み烏帽子著て弓矢持ちたるもの、宿からむといへば、宿して、とかくいひよりて、其の夜は語らひ明しぬ。かくて夜かれなく通ひけるが、ある暁起き別るとて、飄々として立出づれば、そら行く鳥も目馴れぬ、我が身のさまも、あらはれぬべしといひけり。いづくを泊りとしもおぼえぬ気色も心得られず、又此の独り言も怪しく覚えて、長き糸をつけて、

歸るをりに繋ぎて見れば、そろ／＼と歩み／＼と、止まりたる所を見れば、田中にある驚かしといふ物にてぞありける。かへす／＼おそろしくあさましく覚えけり。化けあらはれぬとや思ひけむ、其の後は見えざりけるとなむ。

## 花みつ

尊氏將軍の御時、既に一天下親子になり給ひしかば、尊氏都にこらへ難くして、筑紫をさして落ちさせ給ふ所を、菊池大勢にて追ひかけ奉る。尊氏の御勢僅に一千余騎には過ぎざりし。されども御運いかめしく、高名大きに勝れたり。其の故は赤松の妙善律師則祐といふ人、手を碎き合戦し、高名大きに勝れたり。されば赤松は播磨十六郡を賜はりて、入國のいこくはつ申すに及ばず、一族若党其の数を知らず。こゝに岡部といふ新參の者一人侍り、器量骨柄人に勝れて文武二道の兵なり。しうしんのぎもよく心に相叶へり。しかれば播磨西八郡を賜はつて、草木を靡かしたまひけるが、一人の子をもたずして、ある時心に思ひけるは、申子をせばやと思ひ立ち、馳て女房は法華寺に参り、岡部は書写山に參籠申し、深く祈請を申しける。七日に満ずる夢に答める花を一房賜はるに、青き葉の風に散ると見て、夢はさめにけり。さては子を賜はらむ事は疑ひなけれども、妾がはかなくならむよと、思ひながらも下向する。岡部が見る夢にも盛りなる花一枝賜はるとありければ、青き葉の風に散ると見る程に、われに子を賜はる事は疑ひなけれ共、葉の散ると見る事の心もとなけれど、思ひながら下向する。程なく女房懐妊して産の紐をぞ解きにける。男子なりければ斜ならず喜つて、名をば花みつ殿とぞつけたりける。

かかりける所に、赤松殿、岡部を召して仰せけるは、「われ三年三月の大番を仰せ下されたり、某上るべけれど、御辺某が苗字を名のりて御番勤めよ。」とありければ、「主の苗字を許さるゝ所面目これに過ぐべからず。」と、急ぎ都へ上り御番を受取り、日数を送りゆく程に、傍輩の方より、「暫く在京の程召使はれ候へ。」とて、優なる女房を一人遣はしけり。心ざま人に勝れければ、岡部在京の程愛して比翼連理の思ひをなしければ、程なく子を一人まつたり。比は九月十三夜の事なれば、月によそへて月光とぞ名づけける。

大番も過ぎければ、月光同じく母上を相具して下り、始めて家を作り、あたらし殿とぞ申しける。花みつが母にも劣らずもてなしけり。やう／＼月日を送りゆく程に、花みつ十歳になりける時、岡部思ふ様、赤松殿は久しくわが殿の御一族なれば、大殿久しくわが殿の奉公仕りけり、二人の者共を相具して其の時ゆひがひなく振舞ひたらむ時は、主の恥、我が家の恥ぞかし、思へば山寺へも上せばやと思へども、万の事共案じける時、書写山へまゐらばやと思ひ、花みつをば輿に乗せて別当の御房へぞまゐりける。別当守護代御上りとて座敷を飾り、宝物を調へ待ちける程に、花みつの輿をば縁近くかかせければ、別当も同宿も怪しく思ふ所に、年の齡十歳ばかりと見えたる児の色白く美しきが、色小袖にこ精好の大口たわ／＼と著なし、薄化粧したるが輿の内より出で給ひければ、別当喜びて、やがて坊中の児達を請じ、座敷の体美々しく見えけり。杯三献に及びければ、少人を初めとして打乱れ、既に酒盛になりければ、別当既に酩酊して、酒を飲み得ず。岡部心に思ふやう、花みつを児に請へかし、請はればこのまゝなりとも置くべきものと思ひければ、別当に酒を強ひて、「今一つ聞召せ、御所望のこと御座候はば、何事にても承り候へ、奉公申すべき。」といひければ、別当、酒たふ／＼とつけて、「法師は別して何も所望にも候はず、只今これに御座候少人は、定めていづかたへも御約束候はむずれども、暫くの間、別当に御預け候へ、後見申したく候。」と仰せければ、岡部一往は辞退しけるが、再遍に及びければ、仔細なしと領承しけり。別当余りの嬉しさに三杯飲みて、花みつ殿に思ひざして、其の杯を祝著して、われ又飲みて岡部にさしけり。色々の芸能をつくして、既に酒盛も過ぎければ、岡部花みつを呼びて、「汝はこのまゝこれに在るべし。」とて、若党小廝を相添へて置きけり。さる程に岡部下向して思ひけるは、今は月光もいかに羨ましく思ふらむとて、吉日を選みて同じ坊へぞ上せける。さる程にこの児達は成人するに随つて容顏人に勝れ、芙蓉のまなじり鮮かに、青黛の眉麗しく、丹花の唇つくしく、翡翠の髪ざし、誠に以て濃やかなり。見る人は申すに及ばず、聞き伝へし人も、心を懸けずといふ事なし。されば情も色深く、心ざまも正しくして類なし。書写は三百坊と申せども、一千余人の老若おしなべて此の児に心を寄せざるはなし。さる程に花みつ殿の母上は本台にてまします上は、四季に従つて衣装色々をつくして、折節の雑餉何に乏しき事はなし。月光殿の母上はいまだ何事も心に任せざる事なれば、引きかへたる気色なりければ、人の心の薄情さは皆花みつ殿に

ぞ靡きける。花みつ殿十四と申せし春の比、母上生死無常のならひなれば、既に危く見え給へば、花みつを近づけて、「我ともかくにもなるならば、定めてあたらし殿此の家に移り給ひて、月光を世に立てらるべし、左様になるとも相構へて威勢争ふべからず。只汝は思ひ切つて法師になつて妻か後の世をとぶらば、誠の孝子と思ふべし。」とゆひ含め遂に空しくなりにけり。

案の如く月光殿の母上は本の家に移りて、よろづ思ふやうなり。斯かりける所に京都又乱れ、天下乱世となりしかば、国土の軍兵共京へ上りければ、赤松殿も上洛あり、岡部も御供申して上りけり。多くの日数つもりしかば、継子継母の事なれば、花みつの方へは月に一度も何事かありとだにも問はず、たま／＼小袖風情の物を仕立てて上する時も、つきなる小袖を上せけり。月光殿の方へはよき小袖を数をつくして上せけり。これは坊主の御方へ、これはこしの御方へとて、雑餉かまへ送りけり。人の心のつたなさは皆月光殿と賞翫す。されば花みつ殿は何事につけてもよろづ物あぢきなくして、一日二日と過ぎ給ふ。岡部都より下りけるに、女房語りけるは、「花みつ殿は坊主の御方より暫くの間不興あるべし。」と語りければ、岡部思ふ様、継子継母の事なれば、空言にてもあるらむと思へども、まづ／＼女の心を破らじと思へば、寺へ人を遣はして月光が方へ文を上せていふ様は、「急ぎ此の使と下るべし、花みつには思ふ仔細あり、此方より申さむ時に下るべし。」とありければ、花みつ殿、「我らこそ兄なれば、まづ文をも賜はりて下るべきに、月光が方へ御文ありて下さるに、何ぞ怨めしや、仰せ事のうたてさよ。」と言ひければ、月光申す様は、「定めて母の讒奏にてや候らむ。」とて、打涙ぐみいへば、花みつ殿にも、「さは候はじ、もしさもあらはよき様に申させ給へ、聽て某も下りたく候、下らせ給へば心安くて候。」とて打涙ぐみて、さすが人目も恥かしければ、露に争ふ袖の上、打添ふ母の面影の、今更いとと恋しくて、わが住む部屋に帰りつゝ、さめ／＼と泣きければ、余所の袖までもあはれにて、皆感涙を流しけり。月光も兄の心もとなさに、泣く／＼里へぞ下りける。岡部は月光が成人したるを見るにつけても、花みつかくこそあるらむ、猶も大人しくぞあるらむ、彼の母の草の陰にても、不興といふ事をさこそうたてく思すらむ、所詮寺へ上りたれば、定めて事の様は知るべし、別当に大方の事にて言ひ許して見せむずるものを、と思ひて、聽て月光を打連れて上りけり。別当いであひ、雑餉とりはやし、自余の児達も座敷に直られけれども、花みつ殿はさしいづる事なし。別当

花みつに仰せけるは、「機嫌を窺ひ御身の事を申し許し進らせむ。」と言ひ慰めてありけり。岡部、所詮只今急ぎて上るも、只我が子のゆかしきにこそあれ、疾くして別当の此の事ゆひいだして許せとあれかし、思ふ事なくて酒をのみて歸らむと思へども、別当も心中に此の事をのみ思ひけれども、岡部殿の機嫌打解けぬ体を見、心をとりかねてゆひ出さざりけり。

岡部思ひけるは、無慙や此の子は別当の気にも誠にちがひけるぞ、此の者の事を一ことゆひ出されざる事よと思へば、酒も心にそまずして座敷を立ちければ、花みつは父の恋しさに鱧板の隙より次第に見送りて見れば、岡部も涙ぐみて、無慙や此の子われらを恋しと思へばこそ、彼処の陰よりも覗きて見るらむと、こゝかしこの隙より見るほどに、鱧板の隙より目と目と見合はせけり。岡部さればこそ此の子よと思へども、何といふべき様もなければ、さながらにて歸れば、児遙かに見送りて、稍久しく立ちて、遂に泣く／＼部屋へ帰りて、つ／＼案じて思ひ給ふ様は、われは父の不興のみならず、坊主の御心にもちがひ、憎まれ参らせてありけるものを、たとひ我が親は人のゆひなしにより不興と宣ふとも、坊主だにとりもちて御説言あらむに、などが許されざるべけれども、坊主の御氣にちがひ申すによりてこそ、これ程にうたてしくあるらめと思ひ入りければ、われは今母親はなし、父親はあれども不興の咎を蒙りて、師匠にも憎まれぬる上は、うき世にありても何かせむ、とにもかくにもなるより外はと思ひ、召使ふまつわう丸を呼びて、「大ふし／＼二人のこしの方へ、此の夜この月の面白さに社に参り申し、面々諸共に月を眺めて、御心をも慰めばやと思ひ立ちて。」と宣へば、二人同じく、「易き事。」といふ儘に、二人が一人は前に、一人は後に立ち、まつわう丸を引具して、如意輪堂に参りけり。折節人もなかりしに、比は八月十五夜中の事なれば、茅店まさに明らかにして、板橋おのづから静かに、松風颯々と吹いて谷川の声りん／＼と響きけるは、言語道断の次第なり。皆もろとも心に心を澄まして、いと信心に念誦し、その後はこし方行く末の物語どもまで言ひ出して、涙を流し、仮令月影も兒の袂に浮ぶ程に見えければ、二人の法師怪しく思ひて、兒の心を慰めむとて、「何事にても候へ、われ／＼かくて候上は御心安く思召せ、心を残さず承り候へ、御里の様の事は、今一旦の人の申しなしにてぞ候らむ、やかて思し直さるべし、其の外は何事かを御心にかかせ給ふべき、いかやうの御事なりとも、我等に深く御心を残させたまふな。」と申せば、兒も暫く打案して、「今は何をか包むべ

き、母にて候ひし人世にありし時は、坊主も人々もわれ／＼をいかゞとし給ひしが、今此の頃は人々の心も変り候、面々様ばかりこそ、われらを不便と思召し候へ、そののみ御嬉しく候、情にて候。」とて、かきくどき宣へば、二人諸共に袖をぬらしけり。

稍久しくありて、「所詮面々に申したきこと候、聞召し入れ候はば申すべし、一大事の事にて候。」といへば、「何事をか仰せを背くべきと、一命をすつる事にて候へ、露塵とや思ひ候べき。」と、誠に思入つたる体に申せば、「さては嬉しく候、誠の御志とはかやうの御事を申し候へ。」と、ねんころに喜びて、「たとへば弟の月光討つて賜はり候へと、これこそ一大事の御用とは申し候へ。」といへば、二人返事に及び難く、赤面してあり。兎、「さればこそこれはよもと思ひつるものを、心易くゆひ出したる口惜しさよ、此の事漏れて聞ゆるならば、坊主にも里にもさこそあらめ、今はなかの坊へも帰るまじ。」といへば、とかくする程に、「夜も更けゆき候に、皆々御帰り候へ、御名残をしくは候へども、とても長らへて添ひはて申すべき身とも思ひ候はねば、われはこれよりいづくの浦曲の末、山の奥までも、身をすこし候べき、さすが棄て難き命にて候へ、長らへて候はば互に見え申すべし、もし露の身のならひにて、消えぬと聞召し候はば、後の世を頼み入り候。」といへば、此の兎は一定自害をすべき、さなしとて此の人を失ふべきにあらず、火に入るも水に入るも前世の因果なり、二人の兎をば孰れとも思はねども、そも此の兎を無体に失はむより、彼の月光をこそ兎にも角にもなし参らせむとて同心し、思ひ切りて、「さらば仔細なし。」と領承し、花みつ殿涙を流し、「さこそ面々、不得心に思召し候はむ、御心中ども恥ぢ入り候。よしそれも今はいらぬことなり、さてもいつといへば、兎は我が所へ十六日に定めて来り候はむ時、われ声もせずしてゐ候べし、帰り候はむ所を討たせ給ひ候へ。」といへば、「仔細なし。」と領承す。さらばとて皆々夜こめて帰りけり。二人の法師は一所にゐて、「さてもうき世の習ひとて、斯かる憂き目を見む事よ、さりながら力なし、後の世をこそ申ひ申すべけれ。」とぞ言ひける。兎はわがやに帰りけり。露消えむ花の朝顔いつまでと、はかなき命ありあけの、月も傾く名残にて、月日を待つこそ悲しけれ。

さる程に十六日の暮方に入相の鐘もつく／＼鳴り、月影も山の端に忍び出てもやらざるに、二人の法師は用意して、わざと具足は著す、打刀ばかりにて、花みつ殿の局の前に立つ。花みつ殿は月光殿の姿に身をなして、暫く叩き給ひ

ければ、内より声もせざりければ、「余所へ御いでか。」と、独言をいひ帰り給ふ所を、大ふは余りの悲しさに走りより、足をむんと抱きつく。し／＼は思ひ切らではとて、肘のかゝりを二刀さしてすて奉る。二人の者泣く／＼歸りて、兎も／＼我は情なき事をしたるものかな、法師の身にて兎を殺害する事は例なき次第なり、但し後の世をとがらひ申すべしとて、泣き悲しむ所に、こはいかにしつる事ぞや、花みつ殿を今宵人の殺したるぞとて、上下騒ぎければ、二人の法師これを聞き、見紛ひてぞあるらむと思ひながら、行きて見れば花みつ殿なり。さては此の兎にたばかられてこそとて、二つともなし、自害するより外はなしと思ひ切りて、二人の法師は、「今は何をか隠し申すべき、花みつ殿をば我等二人が殺し申すなり、いつぞやの頃本堂にて我等を頼み給ふやうは、弟の月光を書してくれよ、其の仔細は余りに母のうたてしく我に当り給ひ候事の憎ければ、子を殺して思ひ知らせむとありければ、かく仕り候。」といへば、別当何事かわが心中にvari候べき、さこそ／＼思はせ給ふらむ、此の老僧をさへ打棄て給ひ、自害をし給ひ候はば、悲しみの中の悲しみを、何となれとか思ひ給ひしやらむ、今は只いかにも共々に此の人を弔ひ申すべけれ。」と宣へば、これ又た／＼なかなり。

かかりける所に月光殿、「此の事は面々の道理なり、花みつ殿と我と比べれば、月光をこそ失はむと思召し候心中御ことわりなり、我におきては更に怨みとも思ひ候はず、今は只われらもとも々にいかやうにもとがらひ申すべし。」と、泣く／＼宣へば、「これ又理をわけて言ふものかなとて、自害をばやみぬ。たゞ一筋にぎやうをしたてまつりて、その後発心修行をも仕り候べけれと思ひ直し、二人の法師別当とも死骸をとり、孝養せむとしける。泣く／＼別当申されけるは、「此の兎十歳といひしとき親父に請ひ申し、十六歳の今に至るまで露思がなく育て奉るに、かやうに憂き目を見せ給ふ事の悲しさよ。」と欺きたまへば、一山の老若は申すに及ばず、賤しき者までも皆感涙を流しけり。さる程に文共数多あり。一の文は坊主の御方へとあり。見れば幼少の時より今まで人となされ参らせ候へば、朝夕御手をも引きまゐらせ候と思ひ、又後の世をも申ひ申さむと思ひ候ひしかど、かやうにことの外なる有様、誠に生々世々の御怨みとこそ思ひ候へとて、二首の歌あり、

花はちり跡はさびしくなりぬればしもうらめしき心こそすれ

さこそなほ月をぞ人のもてあそぶ花はあだなる物と思へば

又一つの文は大ふ、しゅう殿へとて、さても御手にかかりかやうになり候こと、後の世をば頼み入り候とて、二首の歌あり、

久方のおま照る月に名をとめて散る花みつとたれか言はまし

二つあらば一つの命のこしおき君がなさを思ひ知らばや

又一つの文は月光殿へとあり。又もなき兄弟にかやうになりゆき候へば、さこそ思はせ給ふらむと、そのみ心にかかり候とて、一首の歌あり、

花の雪風に散りなば月ひとり残らむ世こそ羨ましけれ

又一つの文御父の方へとあり。言葉はなくて歌ばかり、

をしまれぬ身は山陰のさくら花散るともたれか哀れとは見む

斯様に書きおかせ給ひける程に、此の由を里へ告ぐる程に、岡部さればこそ不思議の事いできけると思ひて、急ぎ寺へ上りければ、是非の次第なか／＼言葉に及ばざりければ、孝養嘗み、空しき野辺の夕煙となし、月光、大ふ、しゅう殿、まつわう丸ともに行きがた知らずなりにけり。別当も又うき世にありても何かせむとて、ある山深く閉ぢこもり、行ひ澄しておはしけり。さる程に岡部も花みつには死して別れ、月光には生きて別れ、彼はせむ方もなければ、髻を切りて猶も子ども行末の悲しさに、別当の住み給ひける山の奥を尋ねぬきて、花を摘み香を焚き薪を採り水を汲み、亡者の菩提をとぶらひけるは、現世後生の然るべき善知識とぞおぼえける。

月光、大ふ、しゅう、まつわう丸四人の人々は、高野山へ上り奥の院近く閉ぢこもり、難行苦行してむにんの御あとをとぶらひけるこそやさしけれ。昔より今に至るまで継子継母程うたてしき事はなしと言ひ伝へたり。さりながら順

縁逆縁皆仏菩薩の御方便なれば、此の人々の発心修行しけるも、誠に頼もしく有り難くこそ思ひはんべりけれ。

末の露もとの雫や世の中の後れ先だつならひなりけり

よもの海浜のまさこを数へつゝ君が千年のありかずにせむ

## 美人くらべ

上

古の事かよ。都に隠れなき丹後の少将殿とて時めける人あり。器量骨柄人に勝れ、詩歌管絃何につけても暗からず、御年二十に余り給へども、御台所ましまさず、都広しと申せども、御心に入りし方なくして、遠国波濤まで御尋ね候へども、未だ何れとも定まり難し。爰に五條の宰相殿の御娘御二人おはします。姉御は御年十六になり給ひしが、其の頃世に類なき美人にて坐す。母上に後れさせ給ひて、継母御にかかりて坐す。又其の妹十四にならせ給ひしは、後腹の御子なり、是れも美人にてまします。姉御には劣り給ふと聞えし。姉御をば野もせの姫、妹を紫蘭の姫とぞ申しける。丹後の少将殿は、兄弟の姫君の事聞き及び給ひ、只一目見たきと思召し、姉野もせ姫の乳母、靱負の局の方へ、縁を尋ねて、内証仰せ遣はさる。又妹紫蘭姫の乳母紫竹の局の方へも、内証仰せ遣はされ、一目御覧ありたきとの御事なり。靱負の局は、少将殿よりの内証申し来りしを、継母御に申すも如何あらむ、父御に申すべきやと思索し居たり。又妹の乳母は内証申し来りし事、母御に申し聞かせ候へば、母御は悦びて申させ給ふやう、「丹後の少将殿と申すは器量世に勝れ、諸芸達し、時めく人なり、是は思ひの儘なる婿殿なれば、急ぎ見せ参らすべし、清水詣でに擬へて見せ参らせむ由申しつがひ候へ。」とて則ち乳母方より少将殿へ其の通り申し遣はしけり。靱負の局は之を聞き、聽て父御へ申しければ、父宰相殿仰せられけるは、娘を見するといふ事如何なり、何れも物語での時分知

らせ申すべき由、其の方が心得の由にて、申し遣はすべきとの御ことにて、則ち申し遣はしけり。さて丹後の少将殿は、彼の姫君達の清水詣でを今や遅しと待ち給ふ。斯くて弥生十八日の事なりしに、宰相殿の北の方御娘御二人召し具し、御輿十挺許り遣り続けさゞめかいて清水詣でありけり。丹後の少将殿は此の由を聞召し、女の姿に出立ちて、先に立ちて参り給ひ、観音の御前の傍に、輿を立てさせて彼の人々を待ち給ふ処に、宰相殿の北の方御輿より下り給へば、次に野もせ姫御輿より出で給ふを見たまへば、桜重の上に萌黄の袿、紅の袴踏みしだき、中門より歩み給ふ御姿、御髪は袿に等しく御顔容の美しさ、目元口付、姿いとらうたく言ふも愚かなり。広き都の其の内に斯程の美人は、遂に目馴れたる事もなきと思召し、少将は是れをこそと思はれけれ。又其次に妹の紫蘭の姫御輿より下り給ふ見給へば、花山吹の上に、薄紅梅の袿、紅の袴踏みしだき、是れも顔容姿美しき類少なき装ひなり。然れども姉には劣たると少将殿に思召されけり。扱少将殿はそれより御下向あれば、姫君達も臆て御下向ありけり。二人の乳母面々に思ふ様は、今日の美人比へには、何れが勝り何れが劣りたるならんと、少将殿よりの便りを聞かまほしくぞ思ひける。去る程に少将殿は、野もせ姫を迎へむとて、先づ御母上に此の事申させ給へば、母上は聞召し、「五条の宰相殿の姫は、事の仔細あれば叶ふまじき由。」仰せられけり。少将殿は此の由聞召し、「さて是は如何すべきぞや、たつて申せば不孝なり、また此の姫の外浮世に迎へむと思ふ人なし。」とて深く思ひに伏し沈み給ひけり。かかりける処に、少将殿の乳母に正木の局申すやう、「御心地は何と坐すぞ、野もせ姫の御事に於ては、自ら叶へて参らせむ、急いで御文を遣はされ。」とぞ申しける。少将殿は此の由聞召し、御枕をあげさせたまひ、「嬉しくも申すものかな、さすれば文を参らせむ。」とて、紅の薄様に引重ねてかくなむ。

清水のそこにて君をゆめばかり見しおもかげの色はわすれじ

花ならぬ人に心のつるひてにはの蘆のほめかすらむ

斯様に書き給ひて、乳母の正木に遣はされければ、正木御玉章をもちて、五条の宰相殿へ参り、鞞負の局に見参申したき由申しければ、折節妹の乳母と紫竹の局あり合ひて、「何方よりの御使ぞ。」と問へば、「丹後の少将殿より参り

候、この玉章を野もせ姫へ参らせて給へ。」と申す。「暫く御待ち候へ。」とて、野もせ姫へは参らせずして、御台所へ此の由かくと申しければ、御台所は此の文をそと開きて見給ひ、扱は清水にての美人比へに負けたりとて、乳母も共に安からず思へども力及ばぬ次第なり。御台所宣ふは、「先づ其の使を此方へ召せ。」とて中の庭へ呼び寄せられ、使に御台所申されけるは、「あの野もせ姫は、腰より下に大瘡出で来候て、時々死に入り給ふなり、顔許りこそ人にて候へ、同じくは紫蘭の姫を仰せ懐けさせ給へ、形は野もせ姫には勝りて候。」と申されければ、此の使申すやう、「さて浅ましき事にて候ものかな、其の由をこそ申し候はめ。」とて帰りければ、袖を控へて、「よき様に御申し候はば、祝ひを申すべし。」と申されければ、「いかで、私にては申すべき。」とて使は歸りて少将殿へ此の由申し上げければ、少将殿宣ひけるは、「紫蘭の姫へ相馴れて、其の日の中に十善の位には即くといふとも、宿縁無ければ叶ふべからず、野もせ姫だに相馴れば、如何なる山の奥、野干の住む野の未なりとも、諸共に住むべけれ、早々行きて思ふ人の返事を取りて来るべし。」と宣へば、使重ねて来り、野もせ姫の乳母鞞負の局に、彼の玉章を参らせければ、鞞負の局は、野もせ姫に此の由斯くと申して、玉章を参らせければ、野もせ姫乳母に仰せけるは、「扱是れは何とあらむ。」と宣へば、乳母申すやう、「此のほどの美人比へに勝たせ給ふことのためたさよ、御兄弟とは申しながら、継母の御事なれば、常々憎ませ給へば、妾如きの者まで腹の立つ事のみにておはせしに、少将殿への縁の道、思ひの儘なる御事なり、はやく御返事あれ。」とぞ申しける。やがて姫君返し、

「わが袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらね乾くまもなし

古言ながら御返事申しまゐらせ候。」と書きて、送らせ給ひけり。使返事を取りて、少将殿へ参らせければ、少将殿斜ならず思召し、開きて御覽すれば、古き歌あり、其の心はわが恋は知る人もなし、又思ふ人にも言ひも出さず打語るべき友もなし、沖の石なる程に、人こそ知らね心の中は乾くまもなく、此方にも思ふなりとの心なり。少将殿此の歌を御覽して、「先づく美しき筆のすさびかな、又斯様に相思ひなる事かな。」とて愈浅からず思召し折々忍びくに通ひ給ひて、少将殿よき折柄に母上に申し候ひて、内へ入れ奉るべきとの誓ひを立てさせ給ひ、深く契りをこめ給ふ。斯かりし処に継母御前此の事聞き給

ひ、紫蘭の姫を差置き、野もせ姫に契りをこめ給ふ事の腹立ちさよと、胸を焦し給ひ、乳母の紫竹の局を召して宣ふは、「今夜野もせ姫を失はむと思ふなり、武失を召せ。」とぞ仰せける。「承り候。」とて、武夫二人具して参りければ、御台宣ふ様、「如何に武夫共、言ふべき仔細有り叶へて得さすべきか。」と仰せければ、武夫承り、「是は今めかしき事を仰せ候者かな、仮令火の中水の底までも、御説をいかで背き申すべき。」と申し上げければ、御台斜に思召し、「別の事にてはなし、野もせ姫を、深く人知れず失ひてくれよ。」と仰せければ、武夫申す様、「余所の御方にては候はばこそ、三代相伝の君を失ひ奉るべきや。」と申しければ、継母御前大きに怒り給ひ、「さればこそ、初めより言ひし時何事にては叶へ申すべき由申せし程に、頼もしく思ひて斯程の大事を言ひ出しつるに、時に當つて虚言を申しける。」と荒々と宣へば、彼等心苦しめて、「兎も角も御意次第にて候。」と申す。その時継母斜に悦び、彼等に酒を差め、砂金を取らせて賺し給ふ。扱武夫申す様、「何として亡び申すべきぞ。」と申しければ、「今宵紫蘭の局に具せさせ、花園に出で月を眺めよと申すべし、其の時荒けなき様にてしどろに走り出で、中有に取つて行け。」とぞ仰せける。月も早羊の歩みに暮れゆく、有明も東の山の端に出で殊更さやけし。紫蘭の局は野もせ姫を勧め申し、いざや月を眺めむとて花園庭に出でければ、約束の如く件の武夫走り出で、丈なる御髪を粗悍なる手にて掴み、中有に取つてぞ失せにけり。乳母の靱負の局、「是れはく。」と言へども、早行方知らず成りにけり。扱武夫は姫君を具して、近江の国勢多へ参り、既に橋の上より落し奉らむとせし時、野もせ姫仰せられけるは、「如何に武夫共、性あらば物を聞け、継母御に頼まれ、今自らを失はむ事、当座の依怙なり、邪なるにははされて、咎なき自らが命を取らば、などか天罰逃るべき、又助くる事汝等が為に自らは主なれば、義を重んずるに似たるべし、然らば天道の冥利に叶ふべきぞ、自ら命惜しくて斯く言ふには有らず、汝等が余り不得心なる者共なれば、人間の五常を言ひ聞かするなり、此の上は汝等が心に任せよ。」とて袂を顔に押当て、潸然とぞ泣き給ふ。猛き武夫も此の道理を承り、涙を流して申す様、「実にく誤り申したり、此の上は御命助け参らせむ、何方へも見えぬ国へ忍び候へ、都へ帰り継母御へは、勢多の橋へ沈め申したる由を申すべし。」とぞ言ひける。姫君は夢の醒めたる心地して、夜もほのく明けぬれば、とある家に立寄り亭主を頼み、上に召したる小袖を脱ぎ給ひ、麻の狭衣上に召し更へ、綾菅笠にて顔隠し、召しも習

はぬ草鞋はき、杖つき給ひ行方何処ともわかずして、よろく歩み給ふは目も当てられぬ有様なり。斯くて都には、野もせ姫の見えさせ給はぬ事は、天魔の業かとして、父宰相殿の御欺きは言ふも愚かなりけり。継母も虚泣して歎き顔ぞし給ひける。痛はしや野もせ姫は、勢多より東を指して下り給ひしが、習はせ給はぬ事なれば歩みかね給ひ、十町計り行きて、とある所に暫く休らひ給ひけり。頃は葉月十日の事なれば、初鴈の鳴きて行きけるを御覽じて、斯くなむ、

かりがねはしばしとまりて旅の空越路のかたを物がたりせよ

わが住みし都へゆかばかりがねよこのありさまを物がたりせよ

斯様に打詠めておはしける処に、信濃の国より、熊野へ参りて下向申す尼君、三十人許り連れて通りけるが、此の野もせ姫を見参らせ、「如何なる人にてましましせば、只一人かかる路中におはしますやらむ。」と申せば、姫君泣くく宣ふやう、「我は都の者にて候が、主の勤当を蒙りて候、何処とも知らず迷ひ出で露の命と消えむ程を待ち候。」と宣へば、尼君近く立寄りて見給へば、御年十五六ばかりにて、誠にいつくしき御顔容、色雪の肌、翡翠の髪さしまで、三十二相の御容貌、類少き姫にてぞ候ひける。尼君思ふやう、いかさま只人にてはよもあらじと、愛しさ限りなし。さても如何なる人ぞ、試みばやと思ひて、

あはれなる言の葉みればもるともにたもとの露を払ひこそせぬ

と有りければ、姫君もかくなむ、

露の身のきえても失せて斯かる世につき言の葉をきくにつけても

斯様に口吟み給へば、尼君申しけるは、「さて何方へ心ざして行かせ給ふぞ。」と問へば、姫君、「何処へなりとも具しておはします。」と宣へば、是れこそ熊野の御利生なれとて、長持より綾の袴を取出して著せ参らせ、わが身は馬に乗り、我が乗りたる輿に乗せ参らせ下りけり。さて姫君は、鏡の山を通り給ふ時かくなむ、



近江なるかゞみの山はくもらねど恋しき人のかけはつづみし

近くなるうみとほければ都なる人の姿はいかでうつらむ

とうちすさみて、美濃の国府に宿り給へり。風身に染み給ひければかくなむ、

旅の空ふく浦風の身にしみていと都の人ぞこひしき

又不破の関に著き給ひて、

秋の野に虫のこゑくさへつれば心とまらぬ不破の関かな

斯様に打詠め給ふほどに、信濃の伏屋に著き給ひて御覽すれば、五間三間のしゆてんあり、七間そへどのに中門を造り添へ、総して家の数は七軒造り竝べたり。誠にきわなる人百人許り出入しけり。南面には池を掘り、鴛鴦、鴨、浮つたり。池の汀には、柳、梅、桜、行来久しき姫小松、草花は、牡丹、芍薬、葵、撫子、桔梗、刈萱、女郎花、其の外花の数を調べ、四季の色を揃へたり。裏に入りて見給へば、銀の金物したる脇息に、金の銚子、提子を竝べたり。側には古今、万葉集、千載源氏、伊勢物語、万の草紙を取り竝べ、又、双六の盤に至るまで、見事は飽くまで多けれど、御心にも染まず、只都の事のみ思召すなり。さて都には父宰相殿日数終るにつけて、愈姫君の事歎き堪へかね給ひて、花園に立出でおはしまし、色々の花は見つらむ、語れかし、わが思ひ子の行方聞かまほしさとて、かくなむ、

あだなりと思ひし花の咲きたちていかにこのみのなりてゆくらむ

斯様に詠じ給ひて、南無十方三世の諸仏、願はくは野もせ姫が寿命安穩に守り給へと、天に仰ぎ地に伏し祈誓し給へば、継母御前は佗びたる気色にて、夢を掃り目に塗り、俯伏に伏して、目顔腫らしてぞ偽り給ひける。帝王も哀れと思召し、御幸ありては弔ひあり、誠に歎くは理なりとて、

おとにきく言の葉だにも哀れなりまして身の上さこそあるらめ

と遊ばし、是れまでの御幸も姫ゆゑぞかしとて、

をしきぞよきのふけふまで撫子の花は夜風に散らしこそすれ

帝王仰せける様は、「斯程までさこそ思ふらむ、唯後世をよく弔へ。」とて、還御なり給ふ。宰相殿は宣旨忝しとて、御弔ひの儀式にて、尊き僧を供養し、様々の御弔ひ目を驚かすばかりなり。野もせ姫の祖父御三條殿を初めとして、一門の公卿達、御弔ひの座に連り給ひ、惆悵としたる御有様にて、悼みの歌など遊ばし給へる中に、彼の継母御前の目に夢を掃りて塗り腫らし給へる目は、何とやらむ変りたれば、人々皆顔を不審さよと言はぬばかりに見ぬ人は無かりけり。御弔ひも過ぎぬれば、父御は所詮自書をやせむ、又発心をやせむと、思召すこそ哀れなりける次第なれ。

下

さる程に丹後の少将殿は、野もせ姫の事を聞召して、憧れ悲しみ給ふ事限りなし。せめての事に姫君の常におはせし所に入らせ給ひて、琴弾き鳴らしかくなむ、

ひきならず琴の音きけばもろともたもとの露をはらひこそせぬ

又鏡のあるを御覽じて、

ますかゞみ曇りはてなばいかにして迷ふ心のやみを晴らすむ

斯様に口吟み給ひて、誠に、心凄げにおはしければ、継母思召すやうは、男女の契り、何れ劣るべきならねば、自らが姫を参らせばやと思ひ、人して申されけるは、「野もせ姫に離れ給ひて、さこそ思召し候はむ、又紫蘭の姫を召し置かれ候へ。」と申されければ、中々聞きも敢えず、「恐ろしの女や。」とて、御返事もなし。少将殿思召すは、妻の野もせ姫、まだ浮世にあるやらむ、又露とも消えて亡せ給ふらむ、祈誓をせばやと思召し、住吉に参り七日籠り

給ひ、南無住吉大明神、願はくば夫妻の野もせ姫の行方知らせて給へと、五度の頭地に投げて祈り給へば、七日に満する暁方の御夢に、神救有りけるやう、

君がこふ人はこれより国遠くあづまの方をたづねても見よ

と御夢想ありければ、少将殿夢打醒めて、

あづまにはいく国々のあるものを恋をするがかいかにしなのか

斯様に御返しをしつると思召しつるうちに、御夢醒めて、さては此の姫未だ世にあるやと嬉しく思召して、愈祈誓し給ひて、都へ帰り、御所を密かに只一人忍び出で、清水の辺にて、山伏に出で立たせ給ひ、摺の直垂を召し、御髪を乱し、兜巾被き給ひ、坂東方へ赴き給ふ。先づ近江に著き給ひて、

逢坂の関にも心とめられずあはれ恋路のいそがしの身や

斯様に打詠じ急がせ給ふ。去る程に姫君は、信濃の伏屋にて月日を送り、都の御事恋しさ限りなく、父宰相殿、未の少将殿の事のみ、思ひ出して、なき言葉に打怨みさせ給ふ。

空搔曇り時雨して

峯の木枯しけしくて

梢寂しくなりはてて

錦と見えし紅葉はも

思ひの中に散り失せて

訪ふ人も無き悲しさに

思ひ続けて清水の

流れて澄まぬ物ゆゑに

逢坂越えて近江なる

海の底にも捨てられて

憂き目を独り見るぞ憂き

大津の浦の怨みねに

甲斐もなくして東路の

不破の関にも留まらで

落つる涙と諸共に

流れ来りて信濃なる

独り伏屋に旅寝して

都の方を遥々と

思ひやるこそ悲しけれ

なみに夜昼身に添ひて

哀れと言ひしたらちをの

果無く我を失ひて

如何に心をつくし船

漕がれ行くらむ笹蟹の

糸縊り難き事故に

今宵の契り深くこそ

常に契りて来し人の

無き面影も忘れず

心ひとつに焦れ居て

遣る方も無き池水に

汀に遊ぶ鴛鴦の

うきねに鳴きていたづらに

杉の板間の明け来れば

思ひ乱れて白糸の

くる人更に渚なる

水の中なる濁りあひ

淀むことなき身の物憂さよ

と打詠め明暮過ぎ給ふ。此の世にまだあるを知らせ給はず、父宰相殿、姫君の御孝養をなされ、百日に当る時、六万本の卒堵婆を立て、五郎の大乗経を供養し、様々の御甲ひ有りしなり。さて少将殿は大津の浜にて、舟の便りを尋ねたまふ処に、翁の舟さして来りたるに、召されてかくなむ、

乗りて行く舟とおもひのあはれこそ水の上にはこがれ行くらむ

翁、今の御詠歌面白く覚え候とて、感じけり。さて日暮れぬれば、丹より上り給ふ時、翁申すやう、「今夜は尉が家に御泊り候へ。」と申しければ、少将殿嬉しく思召して、御泊りあり、七間造りの家に請じ、金の杯、銀の銚子取出し、酌取には十七八ばかりの女房飽くまで気高く出立ちて少将殿に酒すゝめけり。夜も明けければ翁申すやう、「御尋ねの御方は東にとこそ承りて候へ、何処を指しておはしますぞ。」と申す。「何処を指すとも無けれども、只出家の習ひにて候へば諸国を志し候。」と言へば、又翁、「如何様只ならぬ御心にて遠き旅人と見えさせ給ふ。」と申せば、少将殿いと恥かしく思召し給ふ。翁重ねて申す様、「御身は正しく恋路に迷ひ給ふと覚えたり。尉も若く候ひし時恋をして、十年の間身を徒らになして候ひしほどに、恋せむする人をば、如何なる天竺震旦までも、行きて訪はばやと思ふなり。これより東は津軽の涯、蝦夷が島、南は南海、補陀落山、西は鬼界高麗、けいたん国までも、北は越路外の浜まで、此の国々を御尋ね候とも、御供申さむ。」と申せば、少将殿翁を礼し、嬉しさ限りなし。ある松原を御覽して、

わが思ふ人やきたりしこの程にせん松原さきに尋ねて

とありければ、翁もかくなむ、

年をへて路のほとりのおいたれば人もこずゑのたれを松原

さて其の後柏野にとまり給ひ、明くればせきとにて少将殿、

たづねゆく人には逢はでこのほどに心とゞめよ美濃のせきもり

又翁もかくなむ、

恋路にはとゞむる人もなきものを逢はむと思ふ心のみして

さて尾張の国に著き給へば、雪降りて冷かりしに、少将殿かくなむ、

をはりなる熱田の宮も雪ふれば水もこほりてつめたかりける

夏こそはあつたともいへ冬くれば水も凍りてさむくなりけり

さてそれより、遠江の国橋本に著き給ひ、宿の体を御覽すれば、東に入江の魚の寄るを待ち、南は南海遙かにて、海人の小舟並べり。西は遙かの東へ通ふ人あり。北は琴弾き鳴らす松立てる中には、宿々の遊君のあれば、軒を並べて面白や。前に入江には、反橋を架けしに、少将殿、

おきつ波つゞみ打ちよるはしもとに琴ひきそふる峯のまつかぜ

波のおと峯の松風身にしみて心のとまるはしもとのやど

さる程に習はぬ旅にあくがれて、思ひ続けさせ給ふ。住吉の夢を頼みて尋ねれど、逢坂山に逢ひ見ねば、いと心の炭竈の、焦るゝ夜半の寂しきに、君もや来るを白糸の、夜も打ち解け給はねば、乱れくる夜の近江なる、伊香の海のかなれば、罪の報いに我許り、みるめもなく何時となく、恋をのみして塩竈の、澄までも底に見えずして、斯かる思ひを駿河なる、あさましかりし宿りして、心は空に憧れて、袖は涙に濡れながら、胸は燃えつゝ焦るれば、何時とも知らぬ恋をして、過ぐる我が身もみの尾張、何と鳴海の浦々を、尋ね行けども甲斐ぞなき。恋と見る目のかたければ、慰むことも渚なる、岸の岩根をなきてのみ、波の夜昼汀にて、都の方を遙々と、思ひ遣るより遠江、浜名の浦に引く網の、迷はざりせば斯くばかり、憂き言の葉も露の身も、何にかゝりて君がつる、おもひ鳴尾の今は只、甲斐も波間の事なれや、こゝに忘れて信濃なる、只更科と思へども、逢はねば鹿の首をぞ鳴くと、斯様に吟み給へば、翁もかくなむ、

恋路にはいかでか袖のぬれざらむかばかり物は思はざらまし

見そめても通ひそめずばかくばかり欺かじものをさよの中山

駿河の国宇津の山にて、少将殿かくなむ、

あをやぎの糸うちとけて寝られねば思ひ乱れてねをのみぞなく

とありければ、翁もかくなむ、

みわたせばよもの梢もみどりにてあばれぞまさる宇津の山みち

清見が関にて少将殿、

空晴れてさやけき月をながむれば心の関もはれてこそゆけ

さて其の夜の夢に、姫君紫裏の白き単衣に、紅の袴ふみしだき、花園に立出  
でたまひて、心凄げにて、

都にてこひしき春はきたれどもわれに見馴れし花人ぞなき

斯様に言ふと思しくて、少将殿の返しに、

恋しさに逢ふうれしさもえぞ知らぬおつる涙にこゑのむせびて

また姫君、

あし引の山がくれして訪ふ人もなきぞ悲しきひとりふせやに

斯様に言ふと思しくて、おどろき給ひて少将殿

あふと見る夢づれしくてさめぬれば逢はぬつづくのつらめしきかな

と有りければ、姫君の御夢にもこの如く見え給へり。又少将殿富士の高嶺

を見給ひて、

年をへむ逢ひみぬ恋をするがなる富士のたかねをなきとほるかな

さて斯様に尋ね来り給ふとは、姫君知らせ給はず、都の事を思ひて、花の一  
本、鳥の音までも、都に変わらざりければ、かくなむ、

鳥のねも花も霞もかはらねば春やみやこのかたちなりける

さる程に姫君微睡み給ふ夜の夢に、母御前此の世の姿にて、「さのみな焦れ  
給ひそよ、今三日が内に悦び給ふ事あり、自ら九夏三伏の夏の花は涼しき風と  
なり、玄冬素雪の夕には風吹く方の垣となり、暗き道には燈火となり影身に添  
ひて悲しむなり。余り汝が事を深く悲しみ候へば執心の罪深かるべし、後世を  
は弔ひ候へ。」とて潸然と泣き給ひてかくなむ、

なでしこの花をば常に来てぞ見るあさぢが原の草のかげより  
さて姫君、夢のうちに、

なでしこの花をば常にいさゝめてなどはゝさきに散りてゆくらむ

さて夢醒めて打驚き、涙を流して悲しみ給ひて、

なき人の姿をゆめに見えつればさむるうつづくのつらめしきかな

さて少将殿、塩屋なる海小舟に召され、照澤の方を御覽じて、

ここのみち暗きをなげく我なれやてるさは水に心すまさむ

と言へば、翁も、

恋の路いかゞはさのみ暮すらむ相見てのちはいとゞてるさは

斯様に打詠し急がせ給ふに、信濃の伏屋に著き給ひて、翁宣ふやう、「此の程君が恋ひ悲しみ、遙々尋ね給ふ人は此の伏屋に坐し候ぞ、此の翁をば如何なる者と思ふぞ、我はこれ日本の弓矢の守護神、住吉の明神なり、我昔凡夫なりし時恋をして身を焦したる故に、神と現はれ、津の国難波の浦に跡を垂れ、恋する人をば斯く憐みを運ぶ故に、是れまで具して来りたり、汝独りに限るべからず、汝が尋ぬる人はあの棟高き内にましますぞ。」と宣へば、其方見遣る間に搖消す様に失せ給ふ。其の時不思議さよ有り難き事かなとて、

住吉の神ともさらに知らずして目なれけるこそはかなかりけれ

さて大明神の教への儘に、棟角高き内へ入りて御覽じければ、姫君は夢にもしめらで、都の事を思召して、

夏びきの糸ほどだにもとふ人のなき悲しみをいかゞ忘れむ

と打吟み給へば、少将殿は姫君の御声と聞き給ひて、胸打騒ぎ、嬉しき事限りなし。少し立寄り笛を取り出し、吹き鳴らしてかくなむ、

なつびきのいとあはれなる恋をしてわれこそ来ては訪はむとはする

と詠じ給へば、姫君是はそも夢現とも覚えぬものかなと、胸打騒ぎかくなむ、

あやしきよわが聞きなしか都にてこちくと見えし笛のねかとよ

と詠じ給へば少将殿、

都にてこちくと見えし笛のねを泣くく吹きて尋ねきにけり

と宣へば、姫君さては誠の夫にてましますぞや、有り難き事かなと思ひ、

尼君に此の由申させ給へば、やがて尼君忌垣の隙より見給へば、御二十余りなる山伏、誠に気高く優しげに見え給ひて、「いかなる公卿殿上人にて渡らせ給ふぞ、只今の笛の音怪しく思ひ奉る、もし姫君の馴染み給ふ人にて候やと見参らせ候なり。」と宣へば、姫君誠に恥かしげにて、「哀れに立たせ給ふ。客僧此方へ入らせ給へ。」と宣へば、「恥かしく候へども、君を恋ひ是れまで尋ね参りたり。」さてあるべきに有らざれば、御内へ入らせ給ひぬ。さて洗足参らせ、やがて烏帽子、直垂取出し、御装束参らせ、御休み給ひける。姫君物越に、

都をばいつから衣たちそめて冬にかゝりてきたるなりけり

と有りければ、少将殿の草臥ならせ給ひて、

都をばもみぢの錦きてしかど日かずつもりて冬ころもきむ

と有りければ、又姫君、

山伏のころもを見るにいかなれば泣きて来れば袖はぬれけり

さて尼悦び給ふこと限りなし。二人の人々も夢の心地にて、互に物も言はず、涙に咽びたまひて、少将殿かくなむ、

あはざらむ時こそあらめ逢ひ見ては何の思ひに袖ぬらすらむ

と有りければ、姫君、

ことわりやいかでか袖のぬれざらむ逢はぬころを思ひつゞけて

さて伏屋に四五日おはしければ、信濃の国の主は是れを聞き、少将殿へ参り、斎き奉り、程なく上洛まします。三千人を召し連れ、少将殿の御供申されけり。又姫君の御供の女房達下婢に至るまで、御輿三十挺昇き続けて夥しく坐す。少将殿宣ふ様は、「尼君、斯かる田舎におはして何かせさせ給はむ、都

へ御供申さむ。」とて、姫君の御輿等しく用意し、尼君を乗せ参らせて都へ連れ上り給ふ。少将殿斯様の次第を奏聞申されければ、「哀れなる事かな、さ程心深く信濃の伏屋まで尋ね行きける不便さよ、此の程の思ひを慰め給へ。」とて、丹波の国にて三郡、元の本領に添へて下し給ひぬ。少将殿御悦びは限りなし。又姫君の父宰相殿の御悦び言ふも愚かなり。かの不得心なる継母御前を、失はれむと有りしかば、野もせ姫言ふは、「仇をば恩にて報ずる習ひあり。」とて、様々帝王へも宰相殿へも、御詫言あり。此の上は姫次第なりとて、御宥しありければ、野もせ姫より継母御前へ扶持し、辺近き処に置かせたまふぞ有り難き。さて少将殿は御悦びの為に、姫君を相具し、住吉へ参り給ひて、百日御籠りあり、御宝殿作り参らせて、御下向ありけり。それより悦びかさなり、若君を二人、姫君一人出で来させ給ひ、行末繁昌し給ひけり。彼の継母御前は一年もましまさず、自害して失せ給ふ。これは情なく当り給ふによつて、その天罰遁れずして、我と空しくなり給ひ、名を聞くだにも悲しさよと、人に疎まれ、亡き後までも悪しき名を残し給ふ。又彼の尼君の事帝聞召されて、則ち本国信濃の内、所領を賜はりけり。是れを見、彼を聞く時は、只人には情あれ。此の物語を見む人は、能くく心得分け、只慈悲情を掛け給ふべきなりく。

## 福富草子

人は身に応ぜぬ果報をうらやむまじきことになむ侍る。むかし福富の織部とて、長者一人侍りけり。いかなる過去の宿縁にや、身に生れつきたる芸ひとつさぶらひけるが、習はざるに奇特をあらはし、はからざるに名を發して、世の人、神の如くにぞ思ひける。其の芸浅ましくいぶせければ、上中下の人までもよく聞き知りて笑ひを催す事なりければ、自ら公方にも聞召し、もて興じおはしませしけることなごめならず。されば富めるが上に富み、樂しきが上に樂しみて、棟に棟を争ひ、蔵に蔵を建てて、五のたなつもの、耕さずして、庭にみちくたり。

それが都にほくせうの藤太とて、いと貧しきもの侍り。こは織部にひきかへて朝夕の煙も竈に絶え、とつのみち草しげりつゝ、築地にあらぬ柴垣や、幔幕

ならぬ薦たれに、衣寒の床を明しかねつゝ、軒も垣をも、この為にこぼちとりて、あまり寒さの風を入れける。夏はあきましき麻の衣古びて、破れ団扇にて蚊を払ひ、軒の夕顔のはなやかなるを、なぐさめにて、あかしくらすめる。幼かりしより契りし人あり、藤太には十あまり姉にや侍りつらむかし、たけ立すくよかに、顔つき荒まじく、口広ければ、人、鬼姥とぞ申しける。鬼姥或曰つまのほくせうに向ひて申しけるは、「土農工商の遊民は、ひとつゆゑつける芸の侍りてこそ、名を四方にかゝりやかし、世渡るものにてさぶらへ。あなあさまし、そこはいかなる昔の戒行のつたなき、高身になす能のおはせぬ事よ、いと口惜しとも口惜しや。うち読みはしり書き、吹きはやし給ふことこそならずとも、あの鄰の福富が一芸ばかりの事は、習はば何とかならはざらむ、さらば彼処に行きて、如何にも打敷きて、心を尽し、師匠と仰ぎ、弟子ともなり給ひて習へよ、神変ある世ならば、あれ程にこそおはせずとも、世渡るばかりのたつき、などかならざるべき、すぐれて興に物し給はば、隣の宝はこなたにみちはへるべけれ、たとひ生れ付きたりといふとも、なさざる芸の長し侍るはあらじ、玉は研くに光あり、ともかくにも習ひたまへ、それをつけひき給はずば、御名残はしくさぶらへども、姥には御暇出されば、顔のつややかなるほどに、いかなるはしも定めはべらむ。」と、せかする。ほくせう理に折れて、鄰に行きいんぎんに畏まり、しかくの事といふ。福富出で合ひて、「ようそのたまふものかな、我等もその朝夕の友なり、侍らまじかりしかど、道は行いて教ふる事なければ、おりたちて勤め参らせずして、かう月日過ぎ。」など、いとなさけくしつ言をへ懇にもてはやすへし。ほくせい畏まり、「さてもさても有難の御よしみにぞ物し給へ、日比月こゝる鬼姥がせめ侍りつれど、斯かる大事の御能を、左右なう他の家には伝へ給はじと、推し量り思ひ侍りしかば、鬼姥が諫めをも用ひずして、過ぎこし年月の悔しさよ、かう憐み坐しけるを、姥に語り喜ばせはべらむ。」と、手をつかねてをる。織部の心の中には、今更ついでつやと、憎きものから、をかしさねんじつと、抑此の一芸は、大事の薬の侍りて、服し、さてつとむる事に侍り、是が家の秘密なり、あなかしこ、人に語り給ふな。」とて、何か有らむ、ふりたる巻物取出でて、薬のちやつさやうをこまくと語る。ほくせう、「さも侍らば、とても御よしみに其の御薬、先一度の芸勤める程賜はれよ、鬼姥が余りに、せはしく申し侍るもつるさければ、近き程に一度ふり出で、先づ手柄をつかまつり侍るべし。」と、しきりに侘

びる。福富さらばとて内に入りつゝ、黒く丸めたる薬二つ取り出でて、「是かまへて、すぎ腹にすかせ給ふな、少しおなかをつくるひて、其の芸をなさむと思ふ二時許りこなたに、塩湯ぬるくとして用ひ給へ、必ずすふしぎ待るへし、若し遅くともさのみいらち給ふな、余りに芸のおそなはり侍らば、鹽に水汲み入れて、ぬ所をひたし、息を吹き給へ、止めたくば、息をのみ給へ。」と教ふ。ほくせう喜びて、かの薬を額に捧げ、暇乞して帰る。鬼姥待ち兼ねて、「如何にく、習ひ給へりや、教へ給へりや。」といふ。ほくせうほゝゑみして、しかく」と語りければ、姥喜ぶ事限りなし。今日の内に、さしも有るべき上の方へ行きて、言ふべきやうは、「福富の織部が師匠に、藤太のなにがし、何とやうに御好み候へ、御好みに随ひて出し侍らむと高らかに案内し給ふべし、試みにこれにて聞きたう侍れど、僅に一粒の薬なれば、惜しう侍るぞかし、はやく出立ち給へ。」とせがむ。かくて妻戸の隅のかはこより入りたる烏帽子かきの帷子、きぬこの袴とりだして、ほくせうにつちぎせつゝ、「露も臆し給ふな、こしうし首さし仰ぎていひ入れ給へ。」烏帽子の塵払ひ、鬢なでつけ、前に立ち、後に廻りていふやう、「烏帽子き給ひたれば、はじめて姥が親の許へ婿入し給ふやうに覚えて侍るぞや、なうく、よい殿やく。」ほくせうは教への儘に二粒の薬を服して、道すがら腹すぢばり、ひきつりて神鳴の如くなりけるを、念じつゝぬ所をすゑて急ぐ。

今出川の中將、わかき殿にて興じ給ふとも知りたるにや、かしこに行きて、しかく」と案内す。中將殿、「いと興あることかな、此の間はつつ気にて、學問も怠りおはしつるに、いとよかむなり。」と、かのほくせう御庭に召させて、鞠のかゝりに、わらぶた据ゑて、あつもの大御酒とりくもてなし給ひて、御はし近う出で坐して、今やと御耳を傾けておはす。御みすの内には御妹の内侍のかみ、おばの尼前、御台所、各集ひおはしましける。藤太腹は痛けれど、食物にのみ心入りたる、をかしや、さもしや、あまり腰のひきつり、おなかの痛むに堪へずして、立ち出でむとしけるが、取りはつして、おとはらひ侍れば、水はじきの如し。白洲は、さながら山吹の花の散り敷きたるやうにて、井出の築もかくやらむとおほす。俄に風吹きたちて、御殿も、御階も、匂ひ満ちて浅ましといふ許りなし。もゝ尻をすゑて、走りて逃げむとしけるを、座敷の隨身おりたちて、笞杖振り上げて打ち伏せつゝ、いと黒きぬとこを引きあけられて、つめるを、烏帽子髪引立て、やうく御庭をおひ出す。(下手のおならこき奴

や、斯がる狼藉、打てやく、破れし頭より、御かわくたりに血をあへして、立田川の秋に異ならずかし。九献にこそ酔ひつらめ、じゆくし臭さもまして侍るぞかし、あら臭やく。(ひらにうちひき裂かれたる烏帽子、片つぶりに著なし、袖も袂も赤に染みて、はぶくかへりぬ。昼中の姿あらはつかしや、道すがら目なしどり、のきの雀おぶ童も、手さし指さして笑ふ。叩かれたる腰の骨も、すりむけし膝の頭も、堪へがたければ、町や棚では、尻もかけまほしけれど、浅ましげなれば、人寄せもつけず、腰ひきねちく歸るさま、何になぞらへむ。(おちほの町よりのぞきて笑ふところ、あれを見てはこたれさせな、ねんくねん不思議や、いかう臭きは、もししなどの風や吹きつらむと思へば、いぶせき匂ぞや。)

鬼姥斯かる事とも知らず、日も長けぬるまゝに、門に立ち、延び上りく大路を見やりて、待ちこがるゝに、二町許りのあなたに来るを見つけて、すはやこゝへ人あまた具してかへりおはせるは、御送りの人々にや、おほやけにいかに興じおはしましつらむ、近づくまゝに、赤き小袖をうち著て帰り給ふよと思へば、いと嬉し、なほ待ちこがて内に走り入りつゝ、いふやう、「あな見苦しき此の程の古小袖よ、今よりは長者になり給ふべければ、斯かる破れ衣よも召さじ、嫂にも孫にも何しに著すべき。」と、引落し火吹き立てて、めらくと焼き棄てつゝ、孫をしやといへど、聞きも入れず、嫂はさこそよるこべいなほいぶかしうて、くびさしのべて待ち居る。あなけぶたく、煙は姥にやほれつらむ、しつこの煙や、そちへ行けく、ほくせう辛うじてかへりぬ。赤きベツかと見しは、つぶりにあへせし血なりけり。真黄な袴は、たれたるものなり。手触るゝことならねば、杖にかけ、顔はしかめ、鼻はふたぎて、呆れ居る。藤太は著類焼かれて裸になり、ふるひわななきて、いひわけするも聞えず、我と身をいたきてすくみ居る。黒くふくつみたれど、ほくせうの名におへる姿ぞかし。北とのの妙西は、とぶらひ来つゝいふことの葉なや、南無阿弥陀、南無阿弥陀とて歸るもゆゝ。

鄰のおこつは、せうしやうたつ物のやれよりのぞきて、笑止がれど、おみどのおたりに目をぞつくる。かくて其の夜もあくる日も、おなかの痛みなごりありて、ゆふべの煙はる所に立ち、野辺の虫の音はおなかに鳴く。降りみ降らずみ、うち時雨れたる空の様にしよんちよとしけり。ほかみさしつゝ、こときりくいたむ、あなはらくといふ声も、いきの下なれば、鬼姥は憎けれど、

## ふくろふ

さすがにわりなき中なれば、皺多き手をあつためて、腹をさすれば、ほとの内より浅ましきかをりいでて、何やらむにや〜とするもむつかしや、せむかたなきに、うつ伏しに伏せて、せなかに上り、いかにとりつきて、腰の骨を踏み、負ひたる孫はいぶられて、何心なく笑ふ。尿にやよだれにや、鬼姥かせなかりやすくだり流しかけ、ふとも〜しくめくは、ほくせうが腹癪をはやあかりつるにやと覚ゆ。なほ憤りやまで、川辺に出でて身を清め、麻きりかけて南に向ひ、「南無帰命頂礼三所権現、つまのほくせうに恥見せし福言の織部を、命のうちに取り給ひて、憂き目を見せさせおはします。」と、鈴こと〜しうおしもみて、のろ〜しう祈る。其の信心神にや通じけむ、熊野の方より嘴ふとの鳥一つ飛び来て、麻の前に羽をたれて鳴く。さては願ひかなひたり。姥は帰りけり。日にそひ夜にそひていと〜よわり、今は廁の通ひさへならざれば、高き足駄を足に著て、庭にもこよひ、砵の盤にもたれて、散らすこと夥し。喉かわきて湯水をこふこと隙なれば、「姥たまへ、姥たまへ。」童のやうにまあへて呼ぶ。呑める湯水はそのまま下す。かくていたうやつれ、ふくやかなりつる顔はせも、瘦せ〜と眉のほどいと〜黒み落ち入りたり。かくて命も危かりぬべしとて、典薬頭和氣清磨がり行きて、しか〜といひ嘆きければ、慈悲の家には上下いとはずとて、馳ていであひて、事の様子たづねて、薬てうじてたびしにぞ、鬼姥もすこし息をのべたり。さて福言がたばかりけるよと思ひあはせて、憎さのみ増しに増しければ、如何にもして恨みむと、かけて待つ程に、人の情けは合ふ中とて、織部うちつき夢見悪しければ、夢解く人に解かするに、七日の物忌、門閉ちて人に逢ふべからずといふに、あなきうつつ、た〜斯かる事は、神社の伝じ変へ給ふとて朝とく物に詣でける。鬼姥聞きつけて人さ〜のくまくり待ちかけて、織部を見るよりも、ひし〜とつかみつく。そのさま魍魎鬼神もかくやあらむ。いと恐ろしとも恐ろしや。福言はさすがに男子なれば、姥が手をもぎはなちて、逃げ延びけれど、追ひかけて頬のあたりを噛みつく等し。かくて帰るさまは人噛犬よりすさまじ。目は倒まに切れ、口は耳の根まで広〜りて、いきま〜く蛇体にななりつらむと、道来る人は、鬼の人喰ふこと、あな恐ろしとて、逃げ侍るもあり、また珍らしとて、見る人も侍りけり。

中昔の事なるに、加賀の国かめわり坂の麓に、ふくろふといふ鳥あり、年を申せば八十三。ある日の雨の中つれ〜に、ふくろふ心に思ふやう、我此の年になるまで栄華を極めず、所詮栄華をせむと、鳥の九郎左衛門、鷺の新兵衛を近づけて、「いかに皆々聞き給へ、あねはの松山とりの院にて、月竝の管絃のありし時、鷺姫の琴ひき給ふ御姿、しづ心なき恋となりて、心も心ならず、包むに包まれず、いやましの思ひ草となるま〜に、彼の御方へ玉章ことづけて給はれ。」と申しければ、鳥の九郎左衛門、鷺の新兵衛、詞をそろへて言ふやうは、「仰せにて候へども、彼の鷺姫の御事は、七つ八つの年よりも今日に至るまで、上見ぬ驚さまの御口説き候へども、終に御返事もなき由、うけたまはり候、我等如きの者が御文つかひを申すとも、いかで御返事あるべきぞ、只同じくは山雀のこさく殿を御頼み候へ、それをいかにと申すに、をきなき時よりも同じ所にて御育ち候へば、殊にかしこき方なれば、定めて一往の御返事あるべき。」と申しければ、ふくろふげにもと思ひ、山雀の宿へゆき、「いかに山雀殿聞き給へ、粗忽なる申し方にて候へども、あねはの松山鳥の院にて、月竝の管絃のありし時、鷺姫の琴ひき給ふ御姿を一目見しより、由なき恋となり、身のやるかたもなく候。及ばずながら世の嘲りを顧みず、彼の御方へ玉章を送りまゐらせたく候。わりなき申し事ながら、文伝へてたび給へ。」と、打歎き申しければ、山雀申しけるやうは、「鷺姫の御事は上見ぬ御方より御心をかけさせ候へども、終に御摩きもなき由、うけたまはり候へども、余りに〜御心のうち痛はしく候ま〜、御つかひ申すべし。」と申しければ、ふくろふ喜び、文さま〜と書きにけり。

さて〜何にとりてか、高天の原に余所ながら見染めしよりこの方、何とやらむ心の内の乱れ髪、思ひの種となりけり。入江に近き蟹小舟、こがれて物や思ふらむ、何しに君をみ熊野の、音無川の淵瀨にも沈みはつべきとは思へども、君に名残やをし鳥の、思へば、命存へて、神や仏の恵みにも、頼む仮寝の声を聞き参らせむ。その為にかき集めたる藻塩草、現にも見る旅寝の小車の、廻り逢はむと思ふ君、思ひし言の葉草こそ、譬む方もなかりけり。されば浮世のその中に限りあらざる事はなし。物によく〜譬ふれば、み山の木の葉、空



の星、岸つつ波と真砂をば数へば限りありぬべし。その外唐土、天竺、我が朝、鬼界、高麗、契丹国、三千大千世界の畜類も、虫獸に至るまで数へば限りありぬべし。法華経は一部八卷二十八品、文字の数は六万九千三百八十四字に積れり。大般若経は六百卷、文字の数は五十九億四十八万字に積れり。東方朔が九千歳龍智和尚が一千歳、浦島太郎が七百歳も、限りある由承り候へ共、君を思ひし事は限りなし。物によく／＼警ふれば、春の花、秋の月ぞと、織姫か、皆鶴か、小野の小町か、毘沙門の妹に吉祥天女か、松浦姫、紫式部か、小式部か、和泉式部か、小督の局、大織冠の乙姫、玄宗皇帝の三千人のその中に、第一の妃楊貴妃、源氏六十帖の女房達、この外遊女数々多しと申せども、君に及ぶ人はなし。されば古き歌にもよまれたり。「情には賤しき袖はなきものをからさで宿れ宵の月影。」とよみおかれけむも、斯様の思ひよりも始まれり。上は玉楼金殿、下は賤か伏屋まで、野にふし山を家とする虎狼野干の類まで、情はありとこそ聞け。一切の生類のその中に、この道知らぬものはなし。かやうに申すことの葉を、只大方に思すなよ、御返事なきものならば、浮世は不定のならひ、互に消えて参らせて、今生にての怨念、又來世にての怨み、生々世々に至るまで、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人、この六道を歩かむ時、微塵程も離れずして、くるり／＼と追ひ廻り、憂きもつらきも後の世にて申すべし。もし此の事上見ぬ驚さまへ漏れ聞え、死罪に及ばむ其の時は、死出の山、三途の川をこす時に、手に手を取組んで刹那が間に打渡り、閻魔の庁に参りつゝ、阿羅刹に苛責せられむ事共、怨みと更に思ふまじ。扱々此の事申し伝へむその為に、生滅滅已の鐘を聞き、八声の鳥を打過ぎて、是生滅法の鐘、朗々と打響き、はや東雲に立明しつゝ、終にいつとも見えもせず、君故誠の咎もなき神や仏を怨みつゝ、君故身をもやつれそひ、人目を包む事なれば、哀れと問はむ方もなし。斯かる思ひをしななる浅間の獄に立つけぶり、胸よりや立ちぬらむ。花に三春の約あり、いかで情をかけざらむ。されば浮世の習ひには、風に靡く篠竹も、胡蝶に親しむ習ひあり、水にうつもるゝ浮草も蛭に一夜の宿をかす、虚空を照らす月だにも、桂男に宿をかす、一通り一村雨の雨宿りも他生の縁と承る、一河の流れを汲む事も、他生の縁と聞きぬれば、及ばぬ恋をする人は、神も哀れと思すらむ。数ならぬ我が袖の、乾くまもなき浮草の、苔の袂も朽ちぬべし、まつことわりも枯々になりゆく袖も白雲の、立ち迷ひゆく有様にて、筆を止め申すなり。かやうに書き認めて、山雀のこさく殿に渡しけり。

その後ふくろふ仏神三宝に祈誓申しける中にも、み山の薬師へ願書を認めてこめける。「南無薬師瑠璃光如来、彼の鸞姫へわか玉章の誠にとつき、よろしき御返事を賜はり、それがしに笑みを含ませ給ふものならば、薬師の御宝殿を金銀を鑲め、黄金の瓔珞、瑪瑙のゆき桁、玻璃の柱、錦の戸帳、水晶の切石、金銀の砂を敷き、池には玉の橋をかけ、極楽浄土をまなぶべし。」と、頭を地につけ祈誓申さる間、山雀こそ彼の宿へゆき、いろ／＼の物語を始めつゝ、その後申しいだしけり。「誠にこれまで参る事、別の仔細で更になし。たとへばかめわり坂の麓にふくろふ、そもじさまを恋にして、あけくれ袖をぬらさせ給ふ。つゝむに包まれずして、それがしを御頼み候程に、参りて候」とて、かの御文をとりいだし、まゐらせければ、鸞姫これを受取らず、山雀のかたへ投げ返す。山雀とりあへず一首の歌をよまれたり。

ふくろふの我を頼みし玉章を空しくいかで返しはつべき

とよみければ、鸞姫返歌に及ばす、山雀にいふやうは、「誠によく／＼聞き給へ、年比上見ぬ御方よりさま／＼の御ことの限りあらねども、御返事も申さず候へども、そもじの御使にましますば、事かりその水茎も、いかではかなく洩らすべし。」とて、御返事をぞ遊ばしける。

あからさまなる御言の葉、誠に水茎のあと打置き難く、詠め参らせ候。さては数ならぬ身に心をかけさせ給ふかや。返事に及ばず候へども、文の中恐ろしく思ひ参らせ候て、事仮初の申し事にて候へども、我が身は賤しき者にて候へば、そもじは葛城山の神のゆかりにてましますば、誠にからず思ひ参らせ候。みづほのあはの仮初に、末も通らぬ物故に、仇名立ちては何かせむ、なか／＼人には始めより、問はれぬ怨みのあらはこそ。さりながらそもじとこんやの機縁薄くして、契りし事もよもあらじ、来む世すぎて又來む世、天に花咲き地に実なり、西方の弥陀の浄土にて契りなむ。と書きとゞめ、山雀に渡しけり。山雀斜ならず思ひつゝ、急ぎ歸りてふくろふ殿にぞ奉りける。ふくろふ戴き開いて見るに、おりたしなみたる言の葉なり。山雀もさも曲なげなるふせにて歸りける。

さる程にふくろふ余りに事の物憂さに、木の葉かきよせ枕とし、少しまどろむところに夢をぞ見たりける。「われは山の薬師なり、さても鸞姫の方よ

りよき返事にて候を、それを知らずしてさとらむことの不便さよ。こむよ過ぎて又こむよとは、明日の夜の事なり、天に花さきとは、月星いでさせ給ふことなり、地に実なるとは、ほのかにあかくなきことなり、西方の弥陀の浄土とは、これより西の阿弥陀堂の事なり、それにてあすの夜の月いで候はぬに逢はむ。」と、超こさせ給ふと夢に見て、かつばと起きていふやう、「こそしるしなり。」と思ひ、俄に支度して阿弥陀堂へぞ行きにける。その間、かの所に夜もすがら待ちにける。夜中の時分に少しまどろむところに、鶯姫十二単を引飾り、めとの女房ひきつれて、阿弥陀堂へぞ行きにける。ふくるふ、まどろむ姿を見てけおこし、そこに一首の歌をよまれたり。鶯姫の御歌、

思ふとは誰がいつはりのうそぞかし思はねばこそまどろみぞする

とよみければ、ふくろふ返歌に、

よひは待ち夜中は怨みあかつきは夢にや見むとまどろみぞする

とよみければ、鶯姫此の歌をきこしめして、打解け顔にて御物語いたしまぬらせむと、比翼連理の契りをぞこめければ、ふくろふ余りの嬉しさに、中にもかやうに鶯姫の寝物語のやうは、蚕のしわざや藻塩草、火屋のけぶりにあらねども、はや浦風に打靡き、さめめ言さまなり。そのちふくるふも、「扱々此の程の君に心をつくし舟、こがるゝことの悲しかりしに、終にあふみの鏡山、むかふ心のうれしさよ、又そもじは音に聞きし滝の水、かやうに落ち合ひまぬらせむとは、夢にも更に知らざりし、悠々と御物語申したく候へども、人目を忍びまぬり候、はや／＼帰りまぬらせむ。」と、十二ひとへの襟をひきかへ、はや帰らむとせし時、ふくろふ余りの悲しさに、泣く／＼歌をよみ侍りける。

片糸のくるほどならばとまれかし深きなさはよるにこそあれ

とよみければ、又鶯姫の御返歌に、

かりそめにふしみの野への草枕露ほどとても人に知らずな

とよみすて、急ぎ宿へぞ帰りける。もろ／＼の鳥ども此の由を聞き及び、鶯姫の方へ腰折なりとも一首おくりまぬらせむと、思ひ／＼に歌をよみ侍りける。

君ゆゑに身を墨染にそめなして深山鳥となるぞ悲しき

我が恋をたがしら鶯の願ひには君と岩屋にふたり住まはや

四十から今この年になりぬまであはぬ恋にぞ身をやつしぬる

うそ姫を思ふ心は深草の野辺にいつまでねをや鳴きなむ

数ならぬ雀の多き声よりもわが一声に靡けうそ姫

見しよりもその面影にあこがれて躍りまぬれど逢はぬ君かな

此の君のなさを深くかつぶりて末たのもしく臥すよしもがな

うそ姫の情をほろとかけられて世になき鳥と人はいはれむ

思ひきやつれなき君を恋にして夜半にかたみをとつてこうとは

その後壁に耳、岩の物言ふ歌のならひ、此の事上見ぬ鶯さまへ洩れ聞え、ふくろふの方へは鷹のこころを討手に向けられけり。然るにふくろふは早く木の陰におちにけり。料簡なくしてうそ姫を害し給ふ。此の由ふくろふうけたまはり、起臥なげき沈みける。目もあてられぬ風情なり。せめて腹を切らむとて、刀に手をかけ給ふ所を、ふくろふの緑類みみづくのきすけ意見申しけるは、「腹を切り候はむより、鶯姫の亡き跡を御とぶらひ候へ。」と申しければ、ふくろふげにもとて思ひとまり、その後弥陀を頼みて梓にかけにける。まつ神おろしをぞ始めける。「上は梵天帝釈、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、王城の鎮守八幡大菩薩、春日、住吉、北野天満大自在天神、伊勢天照大神、山には山

の神、木には木魂の神、地にはたうろつ神、河には水神、熊野は三つの御山、本宮薬師、新宮は阿弥陀、那智はひれう権現、滝本は千手観音、熱田の観音、富士の浅間大菩薩、信濃には諏訪上下の大明神、善光寺の阿弥陀如来、南無三宝の諸仏を請いおどろかし候ぞや。

さてく今生の花の縁、かやうに散りはてまめらせ候べきとは、夢にも更に知らざりしに、思ひもよらぬ梓の声の水手向けかたじけなや、誠にく偕老同穴のかたらひも、縁つきぬれば甲斐もなく、比翼連理の言の葉も、かれくになるさゞめ言、誠にさんてんの中のたかゑほしに、申したぎ事の海山語りてもく尽きせじ、かつく其の時名残惜しきこと、後世の障りになり候ぞや、さてもく不思議なる事にて、かやうに候や、さりながら思ひ切り、これくも思ひ候へども、九泉にかゝりまめらせ候間、夜六度、昼六度、十一時の苦しみ、御推量したまへ、語るははてもなし、閻魔の前を忍びて、これまでまゐりて候ぞや、いざや魂弥陀の浄土へいそぐべし。その後ふるふ猶々歎きまさりけり。はや浮世によしもなく、元結切りて西へ投げ、高野の峯にありつゝ、奥の院にて髪を剃りそれより三熊野にまゐり、三つの御山を伏し拜み、その後諸国をめくりつゝ、かやうに成り果てぬるも、誰ゆゑぞ、露と消えにし鸞姫の、菩提をとほむためなれば、恨みと更に思はぬなり。

## 富士の人穴草子

抑承治元年四月三日と申すに、頼家のかうのとの、和田の平太を召して仰せけるは、「如何に平太、承れ、昔より音に聞く富士の人穴と申せども、未だ聞きたるばかりにて、見る者更になし。さればこの穴に如何なる不思議なる事のあるらむ、汝入りて見て参れ。」と仰せければ、畏まつて申す様、「これは思ひもよらぬ一大事の御事を仰せけるものかな。天を翔くる翼、地を走る獣を獲りて進らせよとの仰せにて候はば、いと易き御事にて候へども、之は如何候べきやらむ、如何にして人穴へ入りて、又二度とも立返る道ならばこそ。」と申上げければ、頼家重ねて是非共と仰せありければ、御意を背き難くて、二つなき命をば、君に参らせむとりやうしやう申し、御まへをこそ立たれける。義盛の宿所

に参り、「聞召せ、平太こそ君の御望みを承りて、富士の人穴へ入り申し候。」と申す。義盛、聞召し、「それ大事の御望みや、しぜんの事のあるならば、死せむず事は一定なり。人を連れれて行くべき道にあらず、唯一人入りべき。」とて、涙を流し給ふ。稍ありて、義盛仰せけるやうは、「あひかまへて平太殿、高名したまへ、我々が一門の名ばしくだし給ふな。」と仰せければ、「承り候。」とて、涙を浮べてありける処に、あさいなの三郎来りて、此の由を見るよりも、四尺八寸ありけるいか物造りの太刀を佩き、はゞきもと四五寸くつるげ、膝の上にかき乗せ、平太をはたと睨んで、「汝ほど、男がましき者、世にあらず、日本国の諸侍の見る所にて、泣き顔人に見する事こそ未練の次第なれ、あれ程の臆病者を一門の中に置けば、それにひかれて臆病になると申すことある、そこもとまかりたて。」と申す。平太聞きて、「如何にあさいな殿、臆病なりとも、人穴を見ずば、まかりかへるまじきなり、御心やすく思召すべし、あさいな殿。」とていでにけり。あさいな聞きて、からく「と打笑ひ、」されども平太殿、はしる馬に鞭と云ふことあり、千人に染むる紅も、染むるによつて色を増す。なにがしもみつぎたくは思へども、たゞ一人さされたるあひだみつがぬなり。あひかまへて、此の度は高名をして、我々が一門の名を挙げ給へ。」と云ふ。平太その日の装束は、いつよりもはなやかなる。肌には白き帷子の脇深くとかせ、みなじろおりて一重、中白の直垂の裾を結んで肩にかけ、袴のくゝりを高く結び、白銀の胴金に、赤木のつかに金覆輪かけさせ、だみたる扇を差しそへて、赤銅造りの太刀二口重ねて佩き、明松十六もたせ、人六人連れて、君の御前に参りて御暇申し、諸国の侍達へ暇申す。『三日と申す午の刻に帰り申すべし、それ過ぎ候はば岩屋にて死したると思召せ。』と申す。すでに岩屋に入りけり。諸人これを見て、「天晴弓矢とりの習ひ程、世に哀れなる事はなし。とえ、皆々申す許りなり。さて岩屋の中へ一丁許り入りて見れば、口より火炎を出したる蛇すのこをかきたるが如くなり。それを飛び越えく行きて見れば、腥き風吹きて、恐ろしき事限りなし。傍を見れば、年のよはひ十七八なる女房、十二一重を引重ね、紅の袴をふみしだいて、三十二相をくそくして、たけなるかんざしは、せいたいかたていたに、こほろぎのすみをすりながしたる如くなり。白銀の機あしに、黄金の杼をもつて機を織り給へり。かりようびんなるこわねにて、「何者なれば、我が住みかへ来れるぞ。」とありければ、平太承り、「鎌倉殿よりの御使にて、三浦の一族、和田の平太と申すものにて候。」と申す。女

房聞召して、「たとへ何の御使なりとも、自らが前をば通すまじきなり、それ犯して通るならば忽ちに命を取るべし、これより帰り給へ、自らばし恨み給ふなよ。それを如何にと申すに、汝は既に仏法にてきをなしたりしもるやのだいしには九代の未なり。」と仰せも果てぬに、岩屋の奥より風吹き出で、一もみもんで吹くかと思へば、たちどころもたまらず、岩屋の口へ吹き出されて、大童に吹き乱されて、やう／＼立ちあがらむとする所に、岩屋の内よりからびたる声にて、「汝が年は十八歳なり、三十一といはむ春の頃、信濃の国の住人、和泉の三郎と申す者にかたらひて、故なき謀叛を起して、うたれむ事は一定なり。」と呼ばはりて、雷電しければ、恐ろしき事限りなし。

さて岩屋より罷り歸りて、鎌倉殿へ参り此の由を申し、岩屋の不思議とも様々に申しければ、鎌倉殿、岩屋の奥を見む事を所存に思召し、「国の内に空所四百町の所あり、御判をなして、岩屋の奥を見たらむ者に、下さるべき。」と、ふれちやうありければ、皆人申しけるは、「命ありてこそ、所領も望みなれ。」とて、更に入るべきと申す者なし。斯かりける所に、和泉の国の住人、新田の四郎忠綱と申す者、此の事を承り、心の内に思ふ様、「所領千六百町持ちたるなり、今四百町賜はりて、まつはうますわか二人の子供に千町づゝとらせばやと思ひ、鎌倉殿へ参り、御前に畏まりて申しけるは、「忠綱こそ御判をなして、富士の人穴へ入りて見申し候はむ。」と申す。鎌倉殿聞召され、御悦びは限りなし。忠綱宿所に歸りて、女房に語りけるは、「頼家の救を蒙り、富士の人穴に入り申すべく候、岩屋の内にて死したるとも所領二人の子供に、千町づゝとらすべし、松杉を植ゑしも、子供を思ふ習ひなる。如何に諸国の侍達の、忠綱憎しと思ふやらむ、よしそれとても力なし、我等に限らず欲は人の習ひなれば、ふかくにはあらず、人穴見ざらむ程は歸るべからず。」新田が其の日の装束には、肌には白き帷子の脇深くとかせ、きせいかつの大口の直垂の裾を結んで肩にかけなし、打烏帽子に鉢巻し、袴のくゞりを高くよせ、もうぶさ造りの太刀に、白銀の鞘巻したる腰刀、つま紅の扇を差し添へ給ふ。伊豆の国の住人、工藤左衛門の尉亮盛をぐそくして、明松三十もたせ、「七日と申さむに帰り候はずば、岩屋の内にして死したると思召し候へ。」とて、すでに岩屋に入りにけり。五丁許り入りて見れば、何ものもなし。太刀を抜きて、四方を打払ひて見れども何ものもなし。また五丁ばかり行き見て見れば、日本の如く月日の光あらはれたり。又二丁許り行き見て見れば、すこし松原へ出でにけり。その地の色は五色なり。

こゝに川あり。只今人の渡りたると思しくて、足の跡見えにけり。この川渡りて見れば、東に堂あり、それを通りて見れば、只今人の渡りたるとおぼしくて候。二丁ばかり打過ぎて見れば、八つ棟造りの唐の御所あり、ひわだふきにぞしたりける。さて柱をば錦を以て包みてあり。御所の内へ立入りて見れば、心も詞もおよばず。軒の玉水の落つる音は、琵琶をひくにぞ似たりける。風音は簫、箏にも似たりけり。とる事をもきくときは、しやうしむしやうの夢醒めて、面白きこと限りなし。蓮華の開くを以て昼と知り、萎むを以て夜と知り、さて丑寅へすこし道あり、見れば黄金の光堂有り、錦を以て天井を張り、同じく金色に錦をもつてつゝませ、又黄金の鈴をさげにけり。鈴さやづる音は、妙法蓮華経、序品第一より始めて、一部八巻二十八品相違なく唱へける。鈴の響を聞けば、祇園精舎の鐘の声も斯くやらむとぞ覚えけり。猶丑寅へ行き見て見れば草も敷けり、又北の方を見れば、池あり、池の中に鳥あり、鳥の上に閻浮提金の黄金の光堂の八つ棟造りあり。心も詞も及ばれず。さて島より陸地へは八十九間の橋あり。一間に一つ宛、鈴をさげられたり。何れも黄金の鈴なり。一番の鈴が妙法蓮華経と唱ふれば、それははじめて八十九の鈴とも、一部八巻二十八品の文字の数を、一字もおとさず唱へけり。その中に鈴一つさやづる妙法蓮華の経文なり。ちうらせつによ、三十番神、この御経の功力を以て一切衆生を悉く九品の浄土へ迎へ給へと唱へけり。池の水色五色なり。新田、島に近づきて見れば、内よりからびたる声音にて、「何者なれば自らが住家へ来れるぞ。」と仰せあつて、立出でたまふ御姿を見れば、その丈、十丈許りなる、頭に十六の角を振り立てて、口より吐き出だす息は、百丁許り上りける、舌は紅の如くなり。新田これを見て、恐ろしき事限りなし、大音拳げて申すやう、「鎌倉殿よりの大臣には十三代、和泉の大納言にて十二代、新田の四郎忠綱と申す者なり。鎌倉殿よりの御使にこれまで参りて候。」と申す。大蛇聞召し、「されば頼家は、汝を遣はし、自らがそうかうをみする事、ひとへに頼家が運の極めと思ふなり、さりながら汝が持ちたる太刀を自らに得させよ。」とありければ、新田承つて、四尺八寸の太刀を大蛇に参らせける。「刀をも得させよ。」とありければ、黄金作りの刀を鞘をば爰に留めて、身許り抜きて奉る。大蛇太刀と刀を六ごんに御納め御悦びは限りなし。その後宣ふやう、「されば頼家は、日本の主なればとて、しれたることをするものかな、されどもこの太刀を得さするあひだ、しやうじのねぶりも醒ぬべし。」と、御悦びあつて、毒蛇の御姿をひ

きかへて、十七八の法師の姿になり給ふ。大菩薩、仰せけるは、「日本の衆生は、地獄、極楽をば音に聞けども目に見る事あらじ、いざや六道を見せむ。」とて、赴き給へり。「如何に新田承れ、地獄ふきやうは六人有り、第一番には箱根の権現、第二番には伊豆の権現、第三番には白山の権現、第四番にはみづから、第五番には三島の権現、第六番には越中の国の立山の権現、之は無間地獄の主にて在します。さればふきやうにはなされたる者は助かり難きなり。先づ寶の磧を見せむ。」とて立ち出で給ふ。こゝに磧あり、此の磧に二つ、三つ、七つ、八つ、十二、十三許りの幼き者共が、幾千万とも数知らず並び居たり。かの磧に幼き者が、石の塔を組み上げておけば、悪風出でて吹き散らす。それを集めて組まむとすする所に、傍より火炎出でて、石も磧も焔に燃えければ、幼き者共ほのほ苦患の悲しみに、逃げむとすれども逃げもやられず、父よ母よと叫べどもその甲斐もなかりけり。さて焔に燃えて白骨となる。やゝはる／＼ありて、地藏菩薩は錫杖をもつて掻き寄せ／＼て、もんに曰く、「けんさいみらいしゆはつこつ、おんこん、ふそくによらい、いちこん、ふてう、たさいしよあく、たうと。」このもんを唱へ給へば、もとの形になりけり。新田申しけるは、「あれはいかなる罪のものにて候。」と申す。大菩薩聞召し、「あれこそ娑婆にて、親の胎内に宿り、九月がほどの苦しみを母にさせて、親となり子と成りてその報恩をもおくらずして、空しくなりたる者が、あくを受けて、九せんさいなり、母の流す涙たまりて血の池となるなり。」又すこし行き過ぎて見れば川あり。三途の川とは是れなり。かの川のはたに、其の丈、十丈許りのうば御前おはします。眼は車輪の如く、上の歯が八十系、下の歯が百二十系なり、水晶に異ならず。罪人の衣裳をはぎ取りて、ひらんしゆのきにかけ給ふ。ほんぢは大日如来の化身なり。此所を過ぎて見れば山あり。死出の山とは是れなり。登るにも劔、とゞまるにも劔なり。登るべきやう更になし。斯かりける所に、呼ばはる声こそ、凄まじく聞えける。新田これを聞き、「あれは如何なるものにて候。」と申す。権現聞召し、「あれは人間死ぬれば、必ず神魂、魂魄とて二つの魂ありて娑婆にて心ざしをするとき、魂魄がはりの上にあがりて、山路を距てたる神魂につぐるやうは、今日娑婆にてふつじをするなり、急ぎくじやうしむに申して、ぜんのだだにつけたまへと云ふ。神魂聞きて請取り、帝釈にまゐり、今日娑婆にてふつじをつかまつり候が、然るべくは、極楽へ迎へ、ぜんのだだにつけ給へ。」と申す。又こゝに罪人共に、重き石をつけて獄卒と

も鉄杖をもつて、呵責し、劔の山へ登れ／＼と責むるなり。新田これを見て、「あれは如何なる者にて候。」と申す。権現聞召し、「あれは娑婆にて商ひを致し、馬、牛を不便と思はず、重き荷をつけ、責め殺したる者なり、能く／＼娑婆にて触れよ、物云はぬとて重き荷などつくべからず、其の馬卻つてあはうらせつとなりてせむる事、一百さいのあひだなり。」又傍を見れば、罪人を鬼共が、なつきより八尺の劔を打貫して、劔の山に登れ／＼と責むる。なつきよりも流るゝ血は紅の如くなり。「これは親、主の命をそむき、所々にすみけるものなり。いかにも親、主の為に後暗く振舞ふべからず。」また西の方を見れば、波水の打ちて、罪人共多く通り候はむとすれども、更に行くべきやうなし、鬼共鉄杖を以て、散々に打ちはつて、通れ／＼と責むるなり。「之は何にて候。」と申しければ、「あれこそ娑婆にて物参りなどをする者に、せきをすへ、きつくあたりたるものなり。能く能く心得べし、只、人は慈悲を心につけべし、肝要なり。」又ある罪人を鉄の縄をかけて、ふし八十三のりをりほねに長さ三尺ばかりの釘を打ちて、呵責するものあり。「これは娑婆にて、けんたしよくもちたるものなり。娑婆にてふれよ、けんたしよくをもつ事勿れ、罪深き者なり、能く／＼心得べし。」又こゝに六道あり。六道の辻に衣を著したる法師あり。此の法師の御前に罪人共集まりて、助け給へとて並び居たり。彼の法師にはなされたる者をば、鬼共がさいなみ、地獄へおつるなり。新田、「あれは如何なる法師にて候。」と申す。大菩薩聞召し、「あれこそ六道のつけ地藏菩薩とて、慈悲深き仏にておはします。汝娑婆に帰りて、南無地藏菩薩と唱へ申すべし、必ず極楽にむかひ給ふなり。」新田承り、「六道とは何事にて候。」と申す。権現聞召し、「地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道とて、六つの道あり。」と仰せけり。又こゝに罪人のありけるが、中には男、右左には女なり。彼の二人の女のかしらは、ひとのごとく、五たいへいなり。男を吞まむとて、紅の如くなる舌を振り立て、又二人して奪ひ合ふ。「これは娑婆にて二途をかけたる男が、二人の女に物を思はせたる者なり、返す／＼も二途をかけたる事勿れとふれよ、三百年の間、苦しみを受くるものなり。」又ある罪人を見れば、目の玉を抜きて、足を鋸にてひかれおる者あり。「之は親の枕を踏み、又親を踏みなどしたる者なり。すこしも親、主などを疎かに思ひ候はむとする者は、聽てんとうの御はつと蒙り、死しては無間地獄におつる者なり。」又こゝにある罪人に、長さ一尺の釘を打立てて、さいなまるゝ者あり。「これは親、

主の為に、後暗き者なり。仮初にも親、主などを疎かに思ひ申すべからず、心得べし。」又ある罪人に縄を千筋許りつけて、ひつはつていたり。新田、「あれは如何なる罪人にて御座候。」と申す。権現聞召し、「あれこそ、上野の国に鎌田の荘に臼井の尼とて有りけるが、人の善くなる事をば猜み、悪しくなるをば悦び、朝夕下人などにもよく物をもくれず、伺事にも肝を入り、叩きさいなみ、つらく当り、堂々寺々へも詣らず、僧法師の一人も供養する事もなし、朝夕せいの嘗み許りかせぎ、みりより許り思ひ、しびの志少しもなく、死ぬべきを知らず、わが儘にふとつに参りたる者なり、人の善根などを致せるを聞きては、後の世を厭はむより、当座のせしやうをすきよかしなどと、けつくおしべしたる尼なり、少しの者の罪をこそ、十わうのさんだむにこそかゝれたり、この尼をば直に無間地獄へ墮さる。」新田承り、「男の地獄へおつることは稀なり。只多くは女が地獄へおつるなり、されば女の思ふ事ぞ、あくこつより外は心に持たぬなり、女の胸の間には、愚癡妄念より外はもたぬ者なり。こつむしの泣く涙積りて、月の障りとなるなり。されば男の女に近づかざる日が一年に八十四日なり、斯様の事をも弁へずして、善根を致さぬ事こそあはれなり。女に生るゝ一人は、悪人より外は生れざるなり、能くく心得べし、たゞじひを、朝夕物事に哀れを思ふべし。」又ある傍を見れば鉄の山の上に、墨の色なる入道居て、千万共数知らず並び居たり。天には鉄の網を張り、獄卒共か火を焚きて、この入道をひつばつて、あぶる事限りなし。「彼の罪人共如何なる者にて候。」と尋ね申しければ、権現聞召し、「あれは娑婆にて乞食致し、万の人を貪り取り、たうとげに見え、我が儘に振舞ひたる入道なり。あの苦を受けて五十劫をふるなり。新田よくく承れ、能もなからむ出家などは、田畑を作り、年々の年貢をちとへさくはい、其の残りを以て、しんめいをすぎ、人にも少し施し善根をも致し、堂々寺々などへも参り候はむと、稼ぐべきものなり。浮世許りの住家、後の世は、あの世と思ひ合はせて、後生を願ふべし。」又こゝに火の車に乗りて来る者を、鬼共が請取りて火の牢へ入れて、四方より劔を以て、さしとほしせむる者あり。新田、「これは如何なる者にて候。」と申す。権現聞召し、「あれは遠江の国々、そてどの宮の禰宜なりしが、神には香花をも手向け申さず、神の所領をば貪り取り、妻子を扶持し、祭などを致し候はず、それを少しも心許なく思はず、我が儘に振舞ひ、みやうり許り思ひ、神の御ぶうくうを少しも致さず、神の所領をつやし、恩をも送り申さず候者なり。」

又傍を見れば、舌を二尋ばかり抜き出され、をめき叫ぶ罪人あり、「これは娑婆にてありしとき、地獄おそろしきとて、帰りたるものなしと云ふ者なり、大無間におとさるゝなり、かやうの事を聞きては口を閉ぢ、耳を塞ぎ、聞くべからず、よくく心得べし。」又こゝに衣を腰に巻きつけて、むげんのはたを這ひ廻り、ふみはづしておちむとする法師あり。「これは娑婆にてありしとき、仮名の一字も知らずして、物識り顔をして、仏法には入りたれども、海の魚の塩に染まぬ風情とやらむ、内心には、人の目をくらまかもし、当座の事ばかり思ひ、後生の道をば、ゆめく思ひよらず、物事にうるんの身にて、我が儘に振舞ひたる法師なり。」又、ある傍を見れば、瓔珞の鈴をつらね、輿に乗りたる女房の、金色のはたをさかせて、大日の風に任せて、諸仏達、十二の菩薩達のさかくをとゝのへ、おのくやうこつしたまふなり、天地を翻し、浄土へ参る女房あり。新田、「これは如何なる女房にて候。」と申す。大菩薩聞召し、「あれは常陸の国と、奥州の境、磐城の菊多の郡、上田にある女房の、富貴の家に生れ、五戒を保ち、三宝をたしなみ申し、心に慈悲をもち、さむげなる者には衣裳を取らせ、ひだるげなる者には食を与へ、仏の御前には、香を盛り、花を摘み、念仏一三まひにして、せきやうをひき、後生を大事と思ひたるものなり。娑婆にてふれよ、仮初にも悪しき事を云はず、慈悲をもち、後生を一大事に思ひ申すべく候。今生はたゞ夢の如し、遂に住家は地獄なり。」又こゝに衣を著たる入道を、鬼共が火を焚きて、四方へひつばつて、あぶるなり。「これは娑婆にて、人の志を受けて、るさいをいたし、人より先にその座を立ち、経をも読まず、座禅得道をもいたさず、ねむさとて寝たる出家なり、能もなき出家は、せめて心のたしなみが肝要なり、よくく心得て人々にふれよ。又ある罪人を鬼共がふせて、口をひきさきく、口の内へ朱の血を汲み入れけるところあり。飲まじとすれども、鉄杖をもつて、打擲するなり。これは娑婆にて酒などを飲み残して、しせをも知らず、大地へうちこぼしたるものなり、物事によくくしせを思ふべし、後生の障りとなるなり。」又こゝに罪人を、両の眼を錐にて探みさいなまるゝ者、幾千万とも限らず。「これは人の眼をくらし、盗みをいたし、空事など申したる者なり。如何に新田承れ、釈尊の遊ばしたらむ御経を一字も口に読みたらむ者は、成仏疑ひあるべからず、今生にては物の一字も知らずして、たゞ暮す人が盲目となるなり。又女房の月の障りに成りて、腹をあふるべからず、大無間におつるなり。能くく心得べし。」罪

人を雪降り積り、氷の如くきらめく池へ、打入れておけば、あら寒むやとて、をめき叫ぶ罪人あり。「これは山賊、海賊をして、人の衣裳をはぎ取り、物事に心の曲りたる者なり。かやうの苦を受けて、五十劫をふるなり。」又こゝに尼のありけるが、腹や腰骨に釘を打たれて、目鼻より血を流しをめき叫ぶ尼あり。「これは若き時、尼になりて、後悔して、男をして、髪をおやし、子をまうくるものなり、娑婆にてふれよ、尼ならば心のたしなみ肝要なり。」又ある女房に腰の骨に釘を打たれて悲しむ者あまたあり。「これは男多くしたる女なり。ぞうして男をしたる数程、腰骨に釘を打たるものなり。」又傍を見れば、十二重を飾りたる女、岩の上に立ちて腹をひきさきく、くひすてて、骨許り残りて、をめき叫ぶものあり。「これは娑婆にて、傾城をたてて、万の男をむさぶり、あるひは僧法師をおとし、顔をさらし、人々によく思はれむと許り思ひたるものなり、娑婆にてふれよ、きみばしたつるなよ、罪深き事なり。」またある所を見れば、女房のありけるが、顔ばかり火炎のうちへ差入れて、焼け焦るる女房あり。これは娑婆にて、飯を盛り申せしとき、人のくるをいとひて、いたびつのうちへ顔を差入れて、もちあけずして惜しや〜と思ひたる女房なり。かやうの苦を受くるものなり。飯もなくば、くはせずとも、人の来らむをばとめて、物をも食はせ、茶をも飲ませ、もてなし候べし。」又こゝに女の有りけるが、髪長さ百丈ばかりにおやして、髪のうちには火炎に燃える女あり。「これは人の髪長さを羨みたる女なり、夢々かやうの事を思ふべからず、罪深き事なり。」又女の頭に釘を隙間もなく打ちてをめき叫ぶ所あり。「これは我が髪のおつるを悲しみたる者なり。」又子を一人も持たざる女房が、無間におとさるゝもあり、能く〜後生を願ふべし。」又ある罪人に鉄の串をさして、鬼共か火を焚きてあぶるものあり。「これは親にもなき者を親として、育てられたる者が、その報恩をも送らずして、いたつらになしおきたるものが、この苦を受くるなり。」又こゝに罪人を手足を切り割き、をめき叫ぶものあり。「これはよつもなき木茅のつらさを切りさき、万のものの命をとめ、朝夕殺生ばかり致したる者が、かの苦を受けて五十さいをふるなり。」又ある傍を見れば、こゝに餓鬼あり、腹は太鼓の如く、首は糸より細く、頭はしやみ山の如く、泣かむとすれども声出でず、食物を目の前に置けば、火炎に燃えてくらはれず、物ほしや〜と思ひて、五十劫をふるなり。「これは財宝を持ちながら、なきよ〜、欲しやと思ひ、われらも食はず、人にも物をもくれず、あけくれせち

べんをして、物ごとにいやしきばかりに心を持ちたるものなり、たゞ人は富貴の家にあらば、人にも施し、善根をもすべし、此の世にあるときの形にて、夢にも見ゆるなり、よく〜心得べし。」又ある罪人の口に米を含ませて、口を縫ひ塞がれて、鼻の腔より米をこぼし、をめき叫ぶ者あり。「これは人の米を盗み、わが身一つとも思はず、妻子などにくれたるものなり。鼻の腔より出す米を見れば、鉄のまろがしなり、たゞ人はかりそめにも心の曲りたるものは、成仏する事なし、よくよく心得べし。」又爰に罪人の口を引きさき、両の頬に長さ八寸の釘を打たれて、悲しむ者あり。「これは人によりあひ、人の噂をいひ、又は人の中を云ひさまたげたる者なり。少しも人の上を悪しく云ふ事勿れ、罪深きものなり。」又こゝに草紙多く見えたり。新田、「これは如何なる草紙にて候。」と申す。大菩薩問召し、「あれは三河の国にひつたの郡に在りける者、我が善根を草紙に書いて置けり。この夫婦の二人の爲にとて、九品の浄土に、黄金の光堂を建て給ふなり。」

総じて、一百三十六地獄を悉く見せ給ひけり。畜生道の苦患浅ましきことは申すに及ばず、天を翔くる翼、地を走る獸に至るまで心安き事なし。又こゝに罪人に重き荷をつけて、長さ十二丈許りの劔の上へ登れ〜と責むる所あり。登らむとすれども、寸々に切れて落ちて行くなり。新田、「これは如何なる者にて候。」と申す。権現問召し、「あれは故なき人をかどいてつり、わが身許りとも思はず、妻子を扶持し、その親兄弟に欺きをさせし者なり。かりそめにも人のものを盗り、後暗きはかやうの苦を受くるなり。」又或る罪人を見れば、腰より下を血潮に染め、腰を釘にて打たれ、前よりあはつらせつ劔をもつて、斬りおとす。見れば女なり。「これは娑婆にて、男によく思はれむとて、懐妊する事を口惜しく思ひて、子をあらし捨てたる女がこの苦を受けて、一万三千年苦を受くるなり。」又こゝに顔ばかり人の如くにて、五体は馬牛のやうなるものにてあり。「これは娑婆にて、或は、兄弟、親、親類等に思ひをかけたる者なり。畜生道へおとさるゝなり。かへす〜かやうの心持あるべからずと云ひ伝へよ、又殊に尊き出家などを、おとしたる女房なり。よく〜心得べし。又修羅道の苦患は、あけくれ人をきりはり、人に斬られ、敵を斬り斬られ、こゝこゝと申すに及ばず、苦しみを受けて二千歳を経るなり。」

さて、閻魔の庁を見せむとて赴き給へば、銅の扉の内に大王おはします。この堂をはじめとして、数多の御堂あり。十一一代に一つ宛なり。善根をする者

をば、くしやうしむつけとり、黄金のふたにつけ給ふ。罪人をもちやはりの鏡にひさむけて、御覽すれば、七歳の年より作りし罪の曇りなく、鏡の内に明らかに見ゆるなり。争ひ申すに及ばず、そのさんたむのあひだは、鬼十王の御前に畏まつて待ち申す。「罪の深き者をば、急ぎこなたへ渡し給へ、受取り申さむ。」と声々に申す。その時、罪人、頭を地につけて申すやう、「娑婆にありし時より、一心に頼み申すなり。われを助け給へ。」と申す。十王仰せけるは、「はかなの者共や、なにとて、娑婆にて仏の御名を唱へ申さぬものか、かやうに責むるも、別のものにてはなし、汝が作りし罪咎今かへりて身を責むるなり。」と一々に仰せけり。「さりながら娑婆にて子の一人も持ち申したるが、甲ひなどをもいたしやせむ、待つべき。」と仰せけり。さりながら、娑婆にて、子の一人も持たぬ罪人をば、鬼共が受取りて、地獄へおとすなり。又傍を見れば、臼に入れて搗くもあり、報いの罪によりて、斬りさいなまるるものもあり。或は火の牢へおしこむる所もあり。火の車に乗せらるるもあり。又大紅蓮のこほりにしづむもあり。劔の山へ追ひあぐるもあり。又釜に入れて煮るもあり。劔の先にて刺し貫き責むるもあり。弓矢をもつて追ひ廻し、色々様々、その身その者の罪によりて、地獄、餓鬼、畜生道、修羅道へおとさる。また中にも物を知らぬそうほうしが、人さたばかり尊げに振りをして人の施物を受けたる者が、とりわけ地獄におつるなり。出家によく／＼伝へよ。又死にたらむ人の後をば、よく／＼申ふべし、必ず七日々々を待ち給ふ。それにも申はねば、百箇日、又一周忌まで待ち給ふ。それにも申ひ申さねば、鬼共が申しけるは、「か程に罪深き者共を、さやうに御待ちあらむには、いつまで待ち申すべし、受取り申さむ。」とて、声々に申す。十王、いかにしても不憫にて候程に、鬼の手前へ渡すまじきと思召し、「七年忌をすることもあり、待ちて見よ。」と仰せけり。畏まつて、待ち申す。それにも孝養することなければ、十王仰せけるは、「もし十二年忌をすることもありやせむ、待ちて見よ。」とて待ち給ふ。その間に、罪人娑婆にて申ひするやらむと、今や／＼と待ちにける。それにも孝養せざれば、十王力及ばず、罪人を鬼の手前へ渡し給ふ。その時、罪人共、十王を恨めしげに見参らせ、「血の涙を流し、我を助け給へ。」と申せども叶はず、作りし罪の報いなれば、地獄へこそおとされけり。大菩薩聞召し、「如何に新田承れ、善根をすること、心に染まぬ者が鼻に釘を打たるなり。又男の善根を致すを女房が腹を立ち無益と云ふ、その氣にまかせて、善根を致さぬ者が、

火の車に乗り無間へおつるなり。女房の首に鉄の綱をつくるなり。かやうに苦を受けて五十劫をふるなり。夫婦の中に、一人無道心なる者あれば、それに引かれて地獄へおつるなり。女の愚癡無道心をば、やがて捨つべし。いかにもよく／＼承れ、この世は一だんの夢の世なり。後の世は地獄なればおるかに思ふべからず、善根の道に入り候はむ事をすこしも惜しみ思ふべからず。」大菩薩仰せけるは、「十王さんたむをも見せ、いざや極楽浄土を見せむ。」とて赴き給へば、爰に黄金の掛橋あり。「この橋は千人の渡り候」とて、新田をひきくして渡らせ給ふなり。即ち浄土へ参るなり。光明くわくやらんとして、鮮かなり。花の輪、四方の梢を竝べ、いきやう薫じて面白き事、詞にものべがたし。仏のつばを見せむとて、阿弥陀のつば、釈迦の住家、薬師の住家、勢至の住家、地蔵の住家とて、仏の住ませ給ふ所を、いち／＼に拝ませたまひけり。「汝に拝ませたる地獄、極楽を、みづから草紙にかきて取らすなり、左の側に納める事なしと云ふ者に、此の草紙を見すべし。あひかまへて、みづからばし、語るなよ、これを背きて、語るならば、汝をも、頼家をも、命を取るべし。三十一と云はむ時まで、この草紙を頼家に見すべからず。いさや日本へかへさむ。」とて、七日と申す時、岩屋の口へ出で給ふ。そのま／＼くれにうせ給ふなり。

儲、新田、君の御前に参りければ、大名小名、やう集まりて、死したる者の甦りたる様にさゞめき渡り、君の始め、上下おしなへ、よろこび合ひ給ひけり。新田、岩屋のやうたい申さむとすれば、大菩薩の御罰も当るべし。申し上げまじき由、存じ申し候て、ち／＼と申し候へば、鎌倉殿仰せけるは、「いかに新田神妙なり。儲、岩屋の内には、如何なる不思議やある、とく／＼申せ。」と仰せけり。新田申さむとすれば、大菩薩の御罰も蒙るべし。申さねば君の命をそむく、又かねてより申さむと申したる甲斐もなし、命をば大菩薩に取られ申すとも、語らばやと思ひ申し、岩屋の不思議、いち／＼に申しける。まことにふるなの弁舌とやらむもかくやらむとぞ、みな／＼申されける。新田岩屋の事を申しもはてめに天に声ありて、呼ばはりけるやうは、「みづからがそうこつを語るあひだ、蹴殺すなり、おなじく頼家が命も取るべきなり。」雷も鳴りをさまりて、くれにうせにけり。

此の草紙を聞く人は、富士の権現に、一度詣りたるに当るなり。能く／＼心をかけて疑ひなく、後生を願ふべし。少しも疑ひあれば、大菩薩の御罰も蒙る



なり。いかにも後生一大事なりと思ふべし。御富士南無大権現と八遍唱へべし。

## 辨の草紙

夫れ前仏は早去りて、二千余歳の春秋に過ぎたり。経巻は残ると雖も、世衰へて学ぶ人少し、後仏は未だ世に出でずして、種々の魔法来りて人を悩ます。中有の間にまどひ夢醒め難く、剩へ乱世となりて、法師は袈裟法衣を忘れ、俗はしやう多ひたゞれと云ふ事なし。僅に心ある人、誰かこれを慨かざらむ。爰に何の比、常陸の国行方の郡とかや、竹原左近尉平昌保と云ふ人あり、武芸人にすぐれ、武云並びなき人なりけり。その先祖を尋ぬるに、桓武天皇より六代の後胤、平將軍貞盛卿末孫流れ来りて、常陸の大丞平の貞国の次男にてぞおはしける。学問を好みて、夏は閑窓に螢を集めて夜を明し、秋は槇の屋の隙漏る月の影を待ち、四季転変の折々には、敷島の道をたしなみ給ひける。ある時、如何なる御心やおはしけむ。人間の盛衰を案じ出して、こと古りたる譬なれども、蜉蝣のあだなる命も、朝顔の出づる日を待つ間も、皆、これわれらが様なりと思ひえて、発心の志深くなりて、古へ、鳥羽院の御世に、佐藤兵衛憲清髻を切りて、剃髪染衣の姿となりて、西行上人と名乗りしも、羨ましく思へども、父母の御心、北の方の御歎きをさすがに思ひ煩ひつつ空しく月日を送りける。御子あり、三歳にならせ給ふ。又その秋の頃より北の御方只ならず、いとと思ひの催しなり。ある時北の御方に向ひまゐらせ給ひて、「且つ聞き給へ、浮世の無情は定めなきものなれど、中にも弓馬の家に生れては、夕日の落つるをも跡さべからず、此の年月願ふ道におくれ侍らば、後生いかゞはせむ。」とて、幼き人の髪をかきなでて、「此の若は武士の家に生れ侍り、きこゆるまは人ゆるさじ、若し生れ来らむか、男ならば法師になりて、我が後の跡をもとはせ、御身もたすかり給へ。」と、懇に言ひし。まことにいまはしきなどなりけり。かやうのはかなし事の積りにや、其の冬の比、国に兵乱惹りて討死し給ひけり。父母の御歎き、北の御方は云ふに及ばず、一門一族他家の人までも、皆惜しまぬはなかりけり。

さて、新玉の春にもなりて、北の御方、御産泣くくし給ひけり。世に清

らなる、玉の男にてぞおはしましける。歎きの中の悦びにておほしたて、かしづき給ひけり。七ツにならせ給ひける程に、未だいたはしながら遺言なれば、下野国日光山の座主の御坊へのぼせ参らせたまひける。生ひさき見えて、形いと美しく物したまひければ、座主の御坊おるかならず、らうたくし給ひ、人皆かしづき奉る。御手習物ならはしの為とて、西谷の円実坊昌譽僧都の許へうつし奉らせ給ひける。学文の敏く賢く、筆取る事たゞしからず、五歳ばかりの坊に住み馴れ給ひて、ありがたきまで、をとなひをはしましけり。然るに僧都老いの浪の寄せ来たる積り、又病のおかせるむくいにや、限りの様にならせ給ひける。此の児の御様をつくぐと見まゐらせて、「いとをし、我永らへ侍らば、さりとともと思ひ侍りしが、今は早空しくなり侍りなむ、なき跡にも、心に入れて御経読ませ給ひて、御手習愈るべからず、誠に後世の継にてこそ侍れ。さりながらも。」とて、東谷の教城坊昌長僧都をかたらし寄せ参らせて、枕近くよせ奉り、「老僧はかくなり侍りぬ、此の児らうたくし給ひて、出家、学文遂げさせ給ひて、一山のかざり、父の御跡、われらが後世をもとはせ給はり候へ。」と、かき口説き宣ひければ、誠に哀れにこそ。いなみ難くて、請取り参らせ給ひけり。此の昌長僧都と申すは、慈悲深重にして、三衣の破るゝを悲しまず、行業不退にしては、一鉢の空しきことを憂へず、一心三觀に思ひをかけ、一念三千の心をすまし、世にありがたき人なりけり。かくて此の児十二にならせ給ひ、故昌譽僧都の御跡したまゐらせ給ふこと、いと哀れなる程なりけり。とかく慰めまゐらせて、東谷につつるはし奉りて、御名を千代若丸とぞ申しける。いづに優しくぞおはしける。論談けつちやくし給ふ声は頻伽声ともなずらへ、ひかに唱歌の御声は、又東雲に鶯の寝床をさらぬ木ずゑにて、ほのかに音信れたるとや聞ゆべからむ。一山のもてあそびにも、先づ此の児を先立てまゐらせばやと、上下心を惑はしけり。和歌の道にも心を入れ、思ひ深くぞおはしける。ある折しも明けがた深く一声音信れば、人こそ泣くや誰とかと目を覚し給ひて、

「梅が香にこそはれけりな鶯のまだ東雲に一声は鳴く花の色に聞きそへてこそ。」と仰せられれば、さもありぬべき事と皆人感じ奉りける。中にも勝れて筆取る事並びなし。人々申しけるは、まだ難波津のはかぐしからぬ時よりも、あくまで故はあるかしく、おろかならずほめ奉りける。折節ことの会席にも、御手習のすさみ書きにも、はかなき歌のみを好ませ給ひければ、御父のいまはし

かりし事、其の人々申し出し慰め申しけれども、御心のならはし、又いかなる愁へのつみにや、一首はかくこそ詠ませ給ひけり。

まちこゝの花も甲斐なく散り行けば身のはかなきぞ思ひ知らるゝ

とあそばしければ、これはあまりなる御心のいまはしとて、誹らはしげに申す人もありけり。

さて僧都の御坊中禅寺とて、なほ山深き靈社おはします。この御嶽をこそ、世にことぶける黒髪山とぞ聞えける。勝道上人かの御山に千年の靈像をきざみ立て、御堂をば弘法大師建立したまひて、ふだらく山と額を書き給ふ。寔に南方無垢の成道と見えにける。かの山に在りて、三歳籠り居て、勤経せらるゝ例ありけり。千代若殿は寺中におはしますべき由宣ひけれども、いかなりける御心やおはしけむ、同じく關伽の水をも汲み、花をも摘まむ。」と宣ひて、籠らせ給ひけるとかや。この所の様を云へば、腰は高山峨々として前に湖水を湛へたり。源氏物語に猶かひなしとや塩ならぬ海と詠みしも、此の所の様なるべし。春陽坊專順の歌に、

厭ふらむ黒髪山にかけつつす湖の鏡の霜と雪とを

ひゑんの柱に今にあり。十住心院心敬の歌には、

頼もしな三歳籠れる法の師をさぞなあまてる神もまほらぬ

三歳の物籠りをよませ給ひけるにや。又雲護院道興は、

雲霧も及ばで高き山の端にわきて照りそふ日の光かな

さてまた発句に、折しも秋の半なれば、

水海に錦をあらふ紅葉かな

そこなる人の脇にて、

江に影ひたす秋の遠山

と申されけるとかや。その外古人の歌ども、皆漏らしけり。されども新田刑部大輔源尚純卿、歌の浜と云ふ南の岸にて、

越の海にありといふなる歌の浜あはせて見ねどまけじとぞ思ふ

万葉集に容れられし名所には、紅葉の浦、やしほの滝、老松、わか松、寺が崎、日輪寺、上野島あり。岩ふる浜、千手の岡その景筆にも写し難し。さてありく千代若殿十五にならせ給ひけり。御髪剃らせ給ふべき由仰せられしを、一山の老若惜しみまゐらせて、御髪をそぎたてまつりて、戒有たせ参らせて、辨公昌信とぞ申しける。尼削ぎの髪の房やかに、御顔に散りかゝりて美しき、眉の現はれしを、たとへて言はば、是れや霞の間よりかは、桜の匂ひたると、紫式部か書きたりし言の葉や、さなからと見えたり。かくて山籠りの久しかりし御慰みの為にとて、東谷に下らせ給ひける。兒童子睦ましく語はせ給ひける御心愈しなし。或時池の汀も荒れ果て、花園山も荒れ果てければ、岸の岩をも立て直し、法師ばら召し集め給ふ中に、太輔公と云ふ人あり、様宜しく、賤しからぬ法師なり。そことも知らぬ風の吹き来て、障子を吹き破りける隙より見奉るに、御目を見合はせ、ほのかに笑はせ給ひし御顔はせは、秋の月雲間より洩れ出でたる様にやと見奉るに、如何なりける御心のよせやありけむ、御言葉をかけさせ給ひし嬉しさは、たとへむ方もなかりけり。我が宿に帰り来て思ひ染め奉る心の程こそ哀れなり。かくて僧都の御坊もの籠りこと終りて、東谷に下らせ給ふ。其の年も暮れ、明くる春の頃、辨公御父の十七回を弔はせたまひける。敵めしき法座を飾り、御位牌を立て、仏前に参らせ給つて、花奉り焼香して、世には此の例もありけるや、十六にして、父の十七回をとふ事と、見ぬ親を慕ひ参らせ、御涙を一目つけさせ給ふに、御様を見参らせて、高きも賤しきも、人は子なりけりとて、皆人歎きけり。さて太輔の君、思ひの催しけるにや、かの御かどのあたりを愁苦辛吟しけるを、辨公召使はるゝ童目敏く見咎むる故ありて、この次第を尋ぬるに、ありし障子の隙より、思ひ染め奉る此の年月の苦しきども、こまやかに語りければ、「あはれ実にもこそと思はすらめ。且つ聞き給へ、花につけ、紅葉に結びたる消息はとり入れも苦しからず、人目を忍びて巻き入らるゝ消息数多侍りし身の病にまかりなる事も侍りき。さりな

から御身の白地に御物語り、誠にあはれに思ひまゐらせ奉る。御文ばかりは苦  
しからじ、たしかに認め給はり候へ。」と、いひ捨てて帰りけり。嬉しく思ひ、  
我が宿に帰り来て、薄様引重ねて、歎くあまりしらせ初めつる言の葉も、思ふ  
ばかりはと云ふ古き歌をも思ひ出で、ほのかに認めて、奥に一首の歌あり。

ほのみつる花の面影身に添ひてきえむ命のゆふべをぞ待つ

召しありし時、人目も隙もありければ、御前に開きて参らせければ、「むつ  
かしの文な見せぞ。」と仰せられけるを、さし寄りて、事の仔細を懇に申しけ  
れば、「あはれの事や、さる事のあらは、今まで知らせざりし事。」と宣ひて、  
巻き返し涙ぐみ給ひけり。ある物語に多びす心のむくつけし、思ひくつをれて  
やと書きたりし言の葉ども、思召し合はせ給ひて、いと哀れにぞし給ひける。  
暫しありて、御言葉はなくて、

風のつて待つまもあらでうつろはば花のとがとやいふへかるらむ

此の返し密かに伝へければ、嬉しさ限りもなかりけり。かくて忍びく  
隙をつかゞひ、終に語らひ奉る。凍り居し胸のつらさも打ちとけて、夢許りな  
る春の夜の、千夜を一夜に思ひしも、甲斐なく立別れなむとせし時、有明の月  
は朧に照りもせず、曇りもやらず、乱れてかゝる黒髪の際より、眉のいとほ  
かなる御様にて、いかゞ思召しけむ、幽かに、

今よりはおもひおこせよ我もまた忘れし今朝のきぬくの袖

御裳にとりつき奉りて、

ながらへてまた見む花とたのまねばよせを待つまの露ぞ悲しき

と聞えて、よしさらば別れしと、朝の床のうへの枕ぞ形見、またやうちね  
むもさすがに、人目を忍ぶならひなれば、鬘のおち髪の一筋、一筋ありけるを  
拾ひて、畳紙に入れ、我が宿に帰り来りて、美しかりし御顔ばせと、あかぬ別

れの物思ひ、何れを何れともわきかねて、そのまゝ起きも上らず、七日と云ふ  
につひに空しくなりけり。此の事聞召されて、哀れにや思ひけむ、童を召し  
て、「煩ふ事やありしか。」と問はせ給ひければ、「此の年月の物思ひ、わづか  
なりける御物語に、いとゞ思ひの勝るにや、五六日は露をだにも口に、何しか  
あつかふ人もなきにや、果なくなりし。」と申しければ、「哀れのさや、いつの  
世の何の夕べには、此の哀れおもはむ。」と言つて、衣引被ぎて、人目を忍  
び給はぬ様にや、臥し転ばせ給ひける。されども、「いかに。」と慰め申しけれ  
ば、さらぬ体にし給ひけれども、何くれの果物をだに触れさせ給ふこともな  
かりければ、僧都の御房、狼て騒ぎ、一山の大衆足を空にして、物怪にやとて、  
様々の修法などせさせ給ひ、療治など加へ奉る。おどろくしくはなければど  
も、日々に重り給ひけり。匂ひやかに美しき御姿の、いとう面痩せて哀れなり。  
ある時人をよきて、かの童を御枕近く候はせて、「あこはしらじ、古、奈良の都  
に、侍従と云ふ童あり、とその身えらなりけるにや、ある人、語らひかしづき侍  
りしを、さはらずる人ありて、その人なげき、終に空しくなりけり。此の事  
を侍従哀れに思ひて、悲しみに堪へかねけるにや、和泉川に身を投げて、底の  
水屑となりけり。僧都範玄はその心も知らず、哀れに思召して、一首の歌あり、

何事の深き思ひに和泉川底の玉藻と沈みはてけむ

とあそばしけるとかや、千載集に入れられたり。昔は人の思ひを哀れむ事、  
斯様にありしことなり。」と仰せければ、童、承つて、「こは浅ましき事を仰せ  
らるゝ物かな、未だ生れたまはぬ先だにも、後世を頼むと仰せ置かれし、御父  
の御志、又御母上の御歎き、いかゞはせさせ給はむ。」と申しければ、「いさと  
よ、思ひ立つことはなし。」と仰せられ、やみたりけり。されども、日々に弱  
りもて来て、限りの様にならせ給ひける。僧都の御坊は申すに足らず、同谷に  
法門坊綱誉僧都其のよしみおはして、病窗かの床にも去らず勞り給ひける。さ  
れども老少不定のならひ、古言にも遅れ先立つ花は残らじとの例にや、水無月  
十四日、昌長、綱誉の御手をひしくと取り、御眉のいとたゆげなる御眼を  
開き、いと嬾々として御母上の恋しさなど仰せられて、程もなく消え入る様に  
失せ給ひける。昌長、綱誉は申すに及ばず、一山の大衆、狼て騒ぎ、さながら  
五月のくれ闇の如くにして、夢に道行く心にや、ものにみなあたりける。御母

上に伝へ申しければ、そのまゝ起きも上り給はず、「昌保に離れまぬらせしは、又この数にもあらざりしを。」と歎かせ給ひける。道理にぞ人皆申し奉る。

さてあるべきにあらざれば、清滝寺尊蒙法印と申す貴き聖を頼み奉りて、一時の煙となし奉る。果なかりける事どもなり。様々の御弔ひ、七日々々に限らずし給ひける御欺きの余にや、昌長僧都、伝法灌頂を執り行ひ、壇上に御位牌を立て、過去幽霊平昌信頼生菩提と廻向し給ひける御志、道理にもと、袖を濡らさぬはなかりけり。次の日又綱譽僧都も灌頂執行し、「過去幽霊一つ蓮花に上らせ給ひて、我等が終の行く道には、観音の御手の内の蓮台にとりのほせ、都卒の内院に引取り給へ。」と、法施し給ひし御志、又すぐれて人皆哀れに思ひ奉る。召使はれし重と、髻切り、出家して、御骨を首に懸けて行方も知らず出でにけり。其の外、召使はれし人々、深き思ひに引籠るもあり、谷に転び落つるもあり、あはれなりし事どもなり。又爰に、真鏡坊昌澄と云ふ人あり。愚かなれども、筆執る業を得たり。辨公かの法師を召して、天台の四教五時の名目を書くべき由宣ひけり。その夏の比、此の山に峯あり、神護慶雲元年に勝道上人この山を開白し給ふに、本宮と中禅寺南社をあげおき給ひて後、智光行者に密約し給ひ、かづらきのれいくつを写しふみわけ給ひけるとかや。弘法大師、其の後、滝尾の霊社を作り立て、品々の仏像を彫み置き給ふ。慈覚大師下り給ひて、新宮を建立し給ひ、千手、弥陀、馬頭の霊相を彫み立て、満願寺と云ふ寺号をなし置き、神殿にはほど／＼の御宝物を納め給ふ。傍には又文殊の霊相を作り立て、常山の宝祚を守らしめ給ひける。されば桓武、平城、嵯峨の三帝の敕願寺として、正一位准三宮日光山大権現と御神官進らせ給ひて、未来永劫まで、人民の守らせ給へと成り。さて昌澄法師、夏峯の先達にあたりて、辨公返答しけるは、「修行辞み難し、出峯事終りて書き奉らむ。」と申し請ひて、五月半に入峯して山林斗敷の行を立て、樹下石上を宿とし、不惜身命に身をなして、一心不乱に修行しけるに、辨公失せ給ひぬと聞えければ、篠懸の袖を絞りける。されども日限りあれば、文月十四日に成就して、御墓に参り、臥し歎きけれども、甲斐なく、翌日より、かの聖教を書き奉り、御墓に納め参らせ、愚かなれども一絶を仏前に備へける。

その夕、我が宿に帰り、歎き明して、微眠みたりける夢に、辨公この聖教を聞き給ひて、御嬉しげなりける御顔はせにて、一首詠ませ給ひける。

筆の跡見るとは知らじ夢のうちもかはす言葉の例なれば

と詠ませ給ひ、その夢にしばしもなくて、明け行く空に覚えけり。もしやと眼を開き、あたりをつかゞひけれども、跡かたも無くなりけり。昌澄法師かやつの哀れともいさ／＼かなる身をうらみて、往生院と云ふ蓮台に、弘法大師阿弥陀の霊相を作り立て、妙覚門と額を遊ばしける。今に絶えざる事共なり。或る外典を見るに、一日安閑は値万金とあり。又大隠は朝市にかくれ、小隠は岩敷にかくると云へり。しかし只かのたはらに住ま欲しく、在於閑処修撰其心いふ経文をさとり得て、方丈なる庵室を結び、朝夕にかの御菩提を弔ひ琴らせて、二六時中には法華妙典をよみ奉る。されば寂莫無人声誦此經典と読みあげけるを、聞く人愚かにはせざりけり。辨公、或る人の夢に、鹿島のみかくれの明神のかりに現じ給ひ、あまたの人を発心せさせ給ふと、慥に告げどもありけり。又或る人の夢に一首の歌あり。

恋しくば上りても見よ辨の石われはごんしゃの神とこそなれ

黒髪山の頂に、辨の石と云ふ霊石あり。富士の嶽の望夫石の古語を思へば、事あひたる心地して、あらたなりける事どもなり。斯かる不思議とも人みな見いて、あるは語り、あるは歎き、よしさらば、人の唱ふべきものは、弥陀の名号、願ふべきわざは安養の淨刹なるべしと、一慶に不惜の阿弥陀仏を両三返申して、目を閉ぢ塞ぎ、袖を濡らさぬはなかりけり。

## 松帆浦物語

遠からぬ世の事にや侍りけむ。四条わたりに、中納言にて右衛門のかみかけ

翰墨約君別離 無親疎似有親疎

莫嫌紙上斑々色 進孝野僧滴淚書

たる人なむおはしましける。中将殿とて御子一人ありて、さうくしく思しけるに、ありくでちこ出でたまひにける。生先見えてかたちいと美しく物したまひければ、限りなくかじぎ給ふほどに、父の卿ははかなくなり給ひぬ。たづきなきやうにて坐しけるに、中将の君らうたき物にして、十許りまでぞ有りける。其中横川に禅師の房とて、此のをちになむおはしける。中将に申し給ふ、「この若君、いたづらにおひ出で給はむよりは、山にのぼせて物習はし給へかし。」などよりくすめ申されしかば、横川へそのぼせられる。大方の学文にも和歌の道にも心を入れて、筆とる事もたゞくしからず、はかなきすさみ事もつきくしく、心さま人に優れたりしかば、一山のもてあそび、ちこ童子もむつまじき事に思ひし程に、三年ばかり此の山に送りけるになむ。斯かれば此の母君久しく見ぬは悲しとて、折々里へよばせけるに、ある時禅師申されけるは、「学問の方もさく賢き人なり。法師になして父の御跡をもとせ給へかし。」などねんころに語らひ申し給へば、「あたらかたを墨の袖にやつさむも情なく、八重たつ雲にまじりなむも心苦し。」などのたまひて、うちとけたる答もし給はねば力なし。かくて後はあやふくや思はれけむ、京に住ませむ事を中将にも申し給ふに、つれづれの慰めにもとや思はれけむ、同じ心にのたまへば、禅師もいかせむとて、なくく京へぞ送りける。此のちこも横川に住みつき給ひければ、寂しかりし山水にも名残多く、遊び伴ひしちこ童にもはなる事なむ悲しかりける。みな京近きわたりまで送り来てぞ名残惜しみける。さて禅師立歸りて、とし月手習などして住み給ひし所を引きあげて見給へば、いと美しき手して障子に書き付けらる、

ここのへにたち帰るとも年をへてなれし深山の月は忘れじ

これを見て、禅師の君よりはじめて、皆泣きにけり。かくて後は元服して藤侍従とぞ申しける。あげおとりもせず、いよく目驚くばかりのかたちにて物し給ひける。十四になり給ひし春の頃かとよ、もと立ちなれし横川の法師、又京にも優なるをのこ数多来あひて、「北山の桜いまなむ盛りなる由人申すなり。侍従の君見給へかし。件ひ奉らむ。」と口々いへば、深山がくれの色香も殊にゆかしき心地して、俄に思ひ立ちぬ。道の程も人めつゝましければ、わざとやつ

してぞおはしける。若きどち駒竝めてみちすがら眺め渡せば、遠き山の端そこはかとなく霞みつゝ、野辺のけしき青み渡り、芝生の中に名も知らぬ花ども、重に交り色々咲きて、雲ぬの雲雀姿も見えず囀りあひたるさまども、いはむ方なし。志す山はや深くいる所にて、水の流れ岩のたゞずまひも、うつし絵を見るやうになむ覺えける。うち吹く風にそことなく匂ひ来るに、人々心あくがれて急ぎのぼりつゝ見れば、数知らぬ花ども技もたわむまで開きつゝ、今日こずばと見えたり。山がくれともいはず、都のかたの人と見えてあまた集ひ来て、木の本岩がくれの苔にむれるつゝ、歌よみ酒のみて遊びなどさまくぞ見えし。侍従の君は花に眺め入りてみ給へるに、花よりもこの君に目とどめたる人数多ありて、従ひ歩くも物むつかしくおぼえければ、花にはうとからで、引入りたる所もがたと、願ひ求めつゝ行くに、本堂のかたはらに、院家にやあらむ、ひはだの軒くち忍草所えがほにて、破れたるみすかけたるあり。此のつれたる人の中知るたよりありて、こにしはしのやどりを構へたり。たんざくとりしうち吟じなどしけり。京より持たせたる、ひわりく、さゝえやうのもの、旅のまかなひはかなくしつゝ遊ぶに、花の本にてはじめより侍従の君に心をとどめて見えたる法師、さまかたちよろしき三十ばかりなるありて、此のみすのもとまで慕ひ来て、花には心を止めずして、この君の面影に眺め入りたるなりけり。猶御簾の内へもかけりこまほしき様のものむつかしければ、つれたるのをこを出していはせけるは、「人に忍ぶ故ありて、かく隠家求めたり。らうさきなり。」などあらくしくさへせいしければ、力なきさまにて出でぬ。しはしありて十二三ばかりの童の美しくさうぞくなどしたるが、ちひさき花の枝に結び付けたる物を、あないもいはず、みすのうちへさし入れぬ。取りて見れば、

夕がすみたち隔つとも花の陰さらぬ心をいとひやはする

と清げなる手して書きたり。「返しし給へ。」と此の君に勧めれど、「はづかし。」などいひて、かたはらの人にゆづるを、「情なし。」などいひすゝむれば、

花に移るながめをおきてたが方にさらぬ心の程をわくらむ

とほのかに書いていだし給へり。之を見て限りなく嬉しく涙もこぼれ出で

にけり。さて此の法師の向後を便にとひければ、深くかくしけるをさまへいはれて、わらはなれば、「岩倉のながしの坊に、宰相の君といふ人にておはします。」といふ。さてこの宰相、おもひのみをしるべにて、尋ねよらむとぞ思ひける。さて人々その夜はとまりぬ。この院の花ことに面白し。紅白枝を交へたり。半酔半醒すれば、げにあそぶ事三日も事足るまじう覚えぬれど、京より迎への人あまた来ぬれば、かへりみがちにて出でぬ。さてかの宰相は、花の本にて見し面影身にそひて、命もたふまじき程になむ成りにける。ある時たよを求めて消息しける、「すぎにし折の花の本にて、みずもあらぬ眺めより、まだ目にかへりこぬたましひは、いつまで袖の申に留めさせ給はむ。有りしばかりのついでも、又いつかは。」などこまやかにかきて、

花のひもとくるけしきは見えずとも一夜はゆるせ木の本の山

返し

木の本を尋ねとふとも数ならぬかきねの花に心とめじな

斯かることを便りにて夜な／＼門にたゞずみ愁苦呻吟しけるを、やう／＼哀れとや思ひけむ、心とけ行くけしきなれば、しば／＼まかり通ひつゝ、後にぞ岩倉なる坊へも伴ひなどして、なきゆくまゝに心へだてず。この宰相さはる事などありて、一二日見えぬ折は、あやしう心細きまでなむつれける。さてこの若君をおもひかけたる人、こなたかなたより花につけ紅葉に結びたる玉章、むつかしきまでぞ集ひ来にける。されど返しよき程にうちしつゝ、この宰相にわくる心もなく、三年ばかりも馴れにけり。さてその頃世を御心のまゝにをさめ給ひし、大臣の御子左大将殿の御前にて、夏の雨静かにふりて日長き頃、世にある事打ちとけつゝ、人々申しけるついでに、此の侍従のかたち心ごま、たぐひ稀なる由申し肝でしかば、心動かせ給ひて、御消息度々あり。宰相出であひて申しけるは、「仰せことなむ忝く侍り。参らまほしきを、此の頃みだり心地にわづらひて臥し暮し侍り。いさ／＼かもよろしきまあらば参りなむ。よき様に申させ給へ。」とありしかば、しか／＼の由申す。五六日あり

て又御使あり。此の度は御文あり。「吹く風のめにみぬとかやのふる事も、思ひしられぬる心はわき給ふにや。ねぬなほの苦しきよしもおほつかなく、五月雨の晴間は、心ちも涼しくなり給ふならむ。思ひ立ち給へかし。」などありて、

ほと／＼きす恨みやすらむ待つことをきみにつつせる五月雨の頃

などあり。御返し、

五月雨の晴間もあらはきみがあたりなどはざらむ山時鳥

と聞きて、猶心地わづらはしきさま、幾度も宰相申して、こもりぬさせたり。さてつれづれとこもり居らむもいかゞとて、ある時のびて此の侍従を伴ひつゝ、岩倉へ行きしを、かのとのの人よくみて、御まへにてしか／＼の由ありのまゝに申しければ、「日頃のみだり心地はあらざりし事なり。」とていからせ給ふに、「宰相法師が所行なり。にくし。」など異口同音に申し侍りしかば、やがて御使あり、「わづらひ給ふとありしは皆いつはりなりけり。忍びありきし給ふなるは、軽しめらるゝなるべし。」など恨み給ひて、兄の中將にしか／＼の由ねんごろに宣ひしかば、宰相にもいはず、さうぞく引繕ひ、同じ車にてぞ参りける。御門さし入るより玉輝きまばゆきまでぞ覚えける。人見えぬ方にて対面し給ふ。ともしびほのかに、空だきものくゆり出でていとえなり。此の人のまだかたなりなりし頃、殿上などにて仄み給ひし心地せしは、ことの数にもあらず。まほにも見まほしく覚え給へど、はぢらひたるさまなれば、心もとなく思すほどに、やがて御心とまりて、心につくべき遊びをし給ひつゝ、片時さらすあひ語らひ給ひける。御志のちかまさりはそふべけれど、たゞかの宰相のことなむ心にはなるゝ折なく、めでたき御けしきも嬉しからず、心の通ひけるにや、つねには夢にぞ見えぬ。さて大将殿、此の法師を深くにくしとおもほせば、ちかき世界に徘徊させじと怒り給ふを知らず、思ひの催しけるにや、猶此の殿のあたりつか／＼ひ歩きけるを、口さがなきもの御まへにて、さま／＼申しければ、淡路の国へぞ追ひやらせ給ひける。これを聞くにも侍従は堪へがたく、我故とがなき人のうきめを見るらむも悲しく、かの島の浪風をも共に聞かばやとぞ嘆かれける。たがひに／＼くだりの消息もた

ぶべきやうなればおぼつかなし。かの宰相、都をわかるゝとて、如何なる便りをか求めけむ、文書きておこせたり。忍びて見ればかきつけたる言の葉多し。

ながれ木と身はなりぬとも涙川君によるせの有る世なりせば

そこはかとなく書きたり。斯かりければこの大将殿の御心も恨めしく、情後れて思へば、うちとけ奉る事もなし。はてはなやましくて、玉楼展覧の清風も心につかずさまじく、ひたぶるに眺めがちにて衰へ行けば、かの人を思ふ故とは知らせ給はで、物のけにやとて祈りなどせさせ給へど、験あるべきならねば、おなじさまにわづらひて、弱るやうに物せられしかば、母君悲しみて、さましく申してまかでさせ侍りぬ。さてかの岩倉に泊りぬる伊与といふ法師を、忍びによびとりつゝ、床近くさぶらはせて、「宰相の我が身故遠き島へと聞き給ふれば、悲しくてかく心地もわづらふなり。そこにいかにまるを恨めしくお思ひ給ふらむ。」と涙にむせびつゝ宣へば、聞く心地いはむ方なく悲しくて、「かく思はせ給ふこそ世にたぐひなく侍れ。なにかは恨み奉るべき。」などいひつゝ、夜も更け行くに、猶枕のもとに引きよせ、さゝやき給ふやうは、いかにして宰相のみたまへる島へ、忍びて我をいざなひ給へ。聞えありて罪にあたり侍らば、もろともにその島にて送らむこそ願ひ叶ふ心地はせめ。」と宣へば、「あはれに忝くは思ひ侍れど、まことにいとけなくおはします御心にてこそ、かくはのたまへ、かの淡路へわたらせ給ひたらば、かくれも侍らじ。やがて大将どの聞かせ給はば、猶にくしとてこれよりまさる罪にもあたり侍るべし。御志あらば文かきて給へ。いかに忍びてもちて罷らむ。」といふに、猶同じ様にうち歎きつゝ宣へば、哀れにも不思議にも覚えて、つくづくと案じぬるが、思ふやう、この宰相に我もおくれて心ならぬ世にながらぶるも本意なし。又この人のかく宣ふもいなみがたし。もとより惜しからぬ身なれば、世に聞えありともいかせむ、さらばともなひて、今一たび対面させ奉らむと思ふ心あり。さてこの法師申し侍るやう、「わが君をたばかり申すべきやうあり。大将殿へも御母うへにも、文書きおかせ給へ。罪なき人をわれ故遠き国へつかはされたる恨めしき、とにもかくにも世に心もとまり給はねば、身をなげ給ひたる由申させ給へ。ゆゝしき事なれ共、さも侍らばたゞされも侍らじ。」などやうだいつきくしく申せば、嬉しく思せど、又うち返し、「母の歎き給ひて、

心地も煩ひたまはばいかせむなどこれのみぞ悲しき。」と宣へば、「それは後に忍びて御心ひとつ知らせ給はば、慰め給ふべし。」などいへば、げにもと思ひつゝ、嬉しかりけり。大将殿よりは、たえずおぼつかながらせ給へど、同じさまなる心地のよし聞えて、過ぎゆく程に、長月にもなりぬ。いと物心細く、ともすれば露にあらそふ涙ふりおつ。或時、中将殿も物まつてし給ひ、人すくなる折、忍びて岩倉の伊与法師を召しに遣はしたれば、心をえて、夜に紛れて来たり。かねて契り定め給ひしやうに、文書きおき物とりしたゝめなどしつゝ、ねたるやうにぞ忍び出でたまひける。此の法師甲斐々々しきものにて、事とへの乗物などかまへて、あけぬほどに山崎までぞ来たりける。こゝにしばしやすめて、「常の旅人の行きかふ道は人見とがめぬべし。」とて、あらぬ方の山路にかゝれば、白雲跡を埋み、青嵐道をすゝめつゝ行く程に、此の若君習はぬ旅にいける心地もせで、すまの浦につきぬ。名ある所なれば、海上の月と眺めまほしけれど、「人もこそ見とがむれ。」など、伊与法師せいしければ、心ならず衣かたしきてね給ひたれど、聞きならはぬ浪の音おどろくしく枕に近し。源氏の大将の、心づくしの秋風にとのたまひしと思ひ知られて、

秋風に心づくしの我が袖やむかしにこゆる須磨の浦浪

と濁りこちて少しうちまどろみたる夢に、此の宰相浅ましげにおどろへて、「かく尋ねおはしましたる嬉しさは、この世ならでもなどが。」などさめく泣きて、

磯枕心づくしの悲しさに波路わかつゝわれも来にけり

といふともなきに、「たゞ今淡路へ渡る舟なむある。」といふ声に驚きぬ。あはれと思へど、物騒がしければ、出で立ちつゝ舟に來らむとて、しばし汀に休らふ程に、暁近き月浪の上に澄み渡りて心細し。東船西船つなぎ置きたるにも、唯見江心秋月白と楽天の詠ぜしも、斯かるにやと覚えたり。こぎ行くほどに、岩屋といふ浦につきぬ。まことや都には、侍従の身をなげたる聞えありければ、大将殿あわて騒ぎ給ひつゝ、「役なきすさみわざして、人のかたきをもおひ、又あたらさましたる人をも失ひけるよ。」と悲しみ給ひける。世の人もこの殿を

よろしとも申さず。母上は、此の書きおき給ひたる文を顔に引きあてて、そのまま起きも上り給はず。中将たゞ御子のやうにかしづき給ひしかひもなく見なし給へば、惜しう悲しうぞ思しける。さて岩屋にとまり給ひて、かの人のある所早くとはまほしけれども、つゝましく、あなないもしうでは如何なためらふ。松帆の浦とやらむに渡らせ給ふ由京にて聞きしかば、まつその浦を尋ぬるに、繪島が磯のむかひなる由申すを、若君聞き給ひて、京極中納言の、「やくやもしほの。」とながめ給ひしも、此の浦のことによ、身の焦れぬるもことわりぞかしくと思ふ。さてその日は此の浦を尋ねて、こゝかしこに休みつゝ、暮るゝ程に、しぐれあらゝしくふりて、浪の音高し。海土の家ゐるのみにて、いづくをはかりとも覚えぬに、灯の光ほのかに見ゆ。それをしるべにて行けば、板ぶきの堂あり。「海人の蓬屋にやどらむよりはこゝにこそ。」などいひて尋ねよるに、かたはらに小庵あり。立ちよりに見れば、松の葉ふすべて、老僧一人むかひあるなるべし。「あない申さむ。」といへば、からびたる声にて、「たぞ。」といふ。「これは津の国の方のものなり。四国へ渡らむとするに、たよりの舟におくれてまどひ侍るなり。この御堂のかたはらに雨やどりせまほしく侍るなり。」などいへば、あやしくや覚えけむ、たち出でて燈明の光に見るに、やつしたれど此の若君をたゞならずや見けむ、「あないとほし。」などいひて、庭の内へよび入れぬ。哀れげにすみなしたり。達磨大師の画像一幅かけて助老、蒲団、麻の衾許りうちおきたり。暫し物語などしつゝ、かの人の向後とはまほしけれどもうちつけなればうちいず。この若君をつゝと見て、「怪し。都方の人にてぞおはすらむ。われ昔都のものなり。はちばかりの年、人をあやまつ事ありて京にも住みかね侍りしかば、やがてもとどり切りて、江湖山林にうかれ歩きつゝ年経侍りけるに、いかなる縁にか、斯かる漁屋のとなりをしめ、紫鷺白鷗を友としつゝ三十余年送り侍りぬる。」など語るも哀れなれば、それを便りにて、此の流され人の事をとひければ、「あの松帆の浦にさる人侍りし。この夏頃より此の島へつり給ひしなり。」といふ。くはしく語り給へ。聞かまほしき故あり。「とこへば、まつほの浦よりこの庵までは常に渡り給ひつゝ、都の方の恋しきなど語り給ひけるが、殿上人の御こととて、明暮恋ひ泣き給つて、心に思ふ事をば隔て残さず語り給ひしなり。その思ひにや侍りけむ、心地わづらひ給ひしが、日々に重り給ひて、この庵へも渡り給はず、つきそひはべる人も見えねば、哀れに見侍りて日をへだてず罷りあつかひしほどに、遂になくなり

給ひぬ。今日七日になむなり給ふ。煙になしはべる事も此の僧し侍りし。」と語るに、聞く心地物も覚えす。つづぶし臥して泣きこがれぬ。この僧、「いかにくゝ、さてはゆかりにてこそおはすらめ。」などいひて、わわも打泣きけり。やゝありて伊与法師申しける、「今まではつゝみ侍れども、かの人はや失せ給ひぬる上は、世に憚りもなし。これこそ恋ひ泣き給ひしと宣ふ上人よ。かくあやしき山賤になし奉るも、道の程の人めを思ふ故なり。さるにてもしかあつかひ給ひて後の事などまでしたため給ひける御志、ことの葉たるまじ。」などいふ。老僧いひけるは、「かの人のいまはのとちめに、志のほど有り難しと宣ひて、小さき法花經念珠など賜はせける。」とて取出でて見す。平生手なれたまひしものどもなれば、いよゝ目もくるゝばかりなり。又巻き固めて細かにしたゝめたる文の上に、四条殿へとて、青侍の名書きたるあり。「これも今はのきはに、よき便りあらば、しかゝ尋ね奉れと宣ひし。」といふ。「此の文こそ此の御かたへなれ。」といへば、「あな嬉し、さらばたしかに奉り侍る。」といふとき、開きて見るに、岩倉の人々侍従の君のかたへなるべし。都を出でしより此の島に住みし有様、今はのきは近きさまなど書き集めたる鳥の跡のやつに見ゆ。

くやしきはやがてきゆべきつき身とも知らぬ別れの道芝の露

などやつにぞ侍りける。ありし夜か様のにての夢も、今は思ひ合はせられていと哀れなり。つとめて此の僧をしるべにて、松帆の浦へ行きてまつ此のほど住みたまひし庵のさまを見れば、浅ましげによるほひ傾きて、松の柱竹の垣も皆くち行くさまなり。いかでこゝに月日を過し給ひけむと思ふもかなし。さて少し隔りて松の一むらある所におろそかなる塚あり。しるしの松の一本植ゑたるを、「これにぞ侍る。」と申せば、立ちよりまろび伏してぞ伊与法師も泣きける。かの王褒が柏樹ならねども、これも涙に枯れやしなましとぞ覚えける。やゝためらひて、此のしるしの木に、若君かきつけ給ひける。

おくれじの心も知らで程とほく首の下にや我をまつらむ

とて、やがてこの海に身をなけ給はむとするを、伊与法師とりとめ奉り申しけるは、「宰相の事今はいぶかひなし。御こゝろさし侍らば跡をとほせ給へ。



御身を失はせ給はば罪をこそおほせ給はめ。又御母上の御歎き浅かるべしやは。「などさまへ申しければ、力なくして本意もとげ給はず。」さらばさまをだにかへむ。」と言ふ。「それもあたら御身なり。」とせいしけれども、しひて身もなげつべきさまのしたまへば、今年十六に成り給ふかたちは、つぼめる花、山の端出づる月のさまし給へる、御ぐしを泣く／＼そり落して、墨の衣にやつしぬるも夢のやうなり。恨めしきものは此の世なりけりとぞ覚ゆる。伊与法師も墨の袖いと深くなしつゝ、伴ひ奉りて高野山の方へや行きけむ。後はしらすかし。